平成 27 年度
文部科学省委託調査

地域における読書活動推進のための体制整備に関する調査研究

報告書

平成 28 年 3 月

株式会社浜銀総合研究所

目　次

第１章　調査概要 3
１．調査研究の目的 3
２．調査検討委員会の設置・開催 3
３．調査実施方法 4
４．本報告書の構成、分析の視点 11
第２章　子供の読書習慣等の実態（全体概要） 17
１．読書に対する意識 17
２．１日あたりの読書時間 18
３．１か月あたりの読書冊数（不読率） 19
４．１か月の読書冊数が０冊であった児童・生徒が本を読まなかった理由 20
５．本を読むことについて影響を受けたと思うこと 23
６．一番感動したり興味を持ったりした本を読んだ時期 26
７．一番感動したり興味を持ったりした本について影響を受けていること 28
８．図書館の利用頻度 31
９．学校の図書館（図書室）に対する認識 32
１０．学校での読書活動等に対する認識 33
１１．地域の図書館等に対する認識 34
１２．本をもっと読みたくなるようにするために必要・重要と考えること 35
１３．就学前・小学校低学年段階での家庭での読書に関する取組の状況 38
１４．現在の家庭での読書に関する取組の状況 39
１５．保護者の読書習慣、家庭における蔵書数 40
１６．子供の読書習慣等の実態・小括 41
第３章　子供の読書習慣等に関する詳細分析（テーマ別の分析） 45
１．子供の読書習慣等に影響する諸要因に関する分析 45
（１）分析の枠組み・結果の概要 45
（２）個人属性（性別）との関係 46
（３）家庭環境との関係 47
（４）学校・図書館環境との関係 50

２．本を読むきっかけとなりうる出来事等に関する分析 53
（１）分析の枠組み・結果の概要 53
（２）個人属性別（性別）の特徴 54
（３）家庭環境要因別の特徴 56
（４）学校・図書館環境要因別の特徴 62
（５）読書習慣等との関係の特徴 68
３．子供の読書習慣等の実態に関する課題認識 72
（１）保護者の課題認識 72
（２）各学校・教育機関における課題認識 74

第４章　子供の読書推進のための取組状況 79
１．家庭での取組状況 79
２．学校・教育機関での取組状況 81
（１）幼稚園 81
（２）小学校 82
（３）中学校 83
（４）高等学校 84
３．内容・テーマ別の取組の詳細状況 85
４．事例紹介 104

第５章　まとめ・考察 135

参考資料 143
１．調査票 143
２．単純集計表 173
３．調査対象地域に関する参考資料 201

第１章

調査概要

第１章　調査概要

１．調査研究の目的

文部科学省「第三次子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」（平成 25 年 5 月 17 日：閣議決定）では、子供の読書活動における課題として「小学生、中学生、高校生と学校段階が進むにつれて読書離れが進む傾向」にあること、「地域における取組の差が顕著」であることが指摘されている。また、同計画の中では、子供たちの読書活動を推進するために、地方公共団体、学校、図書館、民間団体、ボランティア等が連携・協力等していくことが重要な取組として位置付けられている。

上記のような課題認識等をふまえ、本調査研究は、主に以下の 2 点を目的として実施した[1]。また、これらの点に関する検討を通じて、今後、全国の各地域において子供たちの読書活動推進のための取組が効果的に行われる上で参考となるような情報整理を行うことを目指した。

A：小学生、中学生、高校生の読書の実態や不読の背景・理由等を把握するための調査を実施し、課題を明確にするとともに、不読解消のための方策等について検討を行う

B：各自治体（都道府県、市区町村）で実施されている子供たちの読書推進に関する取組のうち、地方公共団体、学校、図書館、民間団体、ボランティア等の連携・協力により実施されている取組について、その連携・協力手法等に着目して調査・分析を行い、特徴等を明らかにする

２．調査検討委員会の設置・開催

本調査の実施にあたり、読書活動に関する専門的知識を有する有識者等からなる調査検討委員会を設置し、調査手法・内容等について、指導・助言を受けた。なお、調査検討委員会は、平成 27 年 11 月 2 日、平成 28 年 1 月 28 日、平成 28 年 3 月 11 日の計 3 回開催した。

図表 1-1　調査検討委員会委員（50 音順）

氏　名	所　属
（座長）　秋 田 喜代美	東京大学大学院教育学研究科　教授
坂 部　　豪	日本図書館協会　児童青少年委員会委員長
清 水　　隆 彦	荒川区立第三中学校　校長
堀 川　　照 代	青山学院女子短期大学　教授
森 田　　盛 行	全国学校図書館協議会　理事長

[1] 目的 A については、平成 26 年度に「高校生の読書に関する意識等調査」として、高校生を対象とした調査を実施している。本調査研究では、平成 26 年度の調査結果もふまえ、小学生・中学生に対しても同一の枠組みでの調査を実施することで、学校段階別の違いや、各段階における課題等を明確にすることを試みた。なお、目的 A と目的 B に関して、テーマとしてはそれぞれ別のものというわけではなく、重なり合うものである。ただし、例えば、各自治体・学校等で行われている取組が児童・生徒の不読の改善等にどのように影響しているかという点等については、本調査研究の中でヒアリング調査等により間接的には把握を試みているが、質問紙調査での分析で直接的に検証等を行うことができているわけではない。

３．調査実施方法

（１）実施調査の種類

本調査研究では、上記「調査研究の目的」との対応により、主に以下のような種類・内容の調査を実施した。

a-1 小学生・中学生・高校生を対象とした質問紙調査
a-2 小学生・中学生・高校生の保護者を対象とした質問紙調査

b-1 自治体・学校等を対象とした、子供の読書の現状に関する課題認識や取組状況の概要を把握するための質問紙調査
b-2 上記 b-1 で把握された内容についてより詳細な情報を収集するための質問紙調査(「詳細調査」)
b-3 上記 b-1、b-2 で把握された取組について、質問紙調査の結果や公開資料等からだけでは十分に把握することができない情報を得るためのヒアリング調査

（２）調査対象地域の設定

上記の各調査を実施するにあたり、本調査研究では、あらかじめ調査対象とする地域を限定して、その地域内での取組実施状況等について調査を行った[2]。

地域の選定にあたっては、全国学力・学習状況調査で、読書に関する児童・生徒質問紙の項目について否定的な回答の減少傾向が見られる都道府県（４都道府県）をまず選定し、さらに、選定された各都道府県において、読書活動に関する取組を推進している 3 市区町村（計 12 市区町村）を対象に、各種の調査を実施した。

検討・協議の結果、具体的には、図表 1-2 に掲載した自治体を対象とした[3]。なお、都道府県の選定にあたっては、特定の地域に偏らないように調整した。また、市区町村に関しては、各都道府県との協議の上選定を行った。

図表 1-2　本調査研究の対象とする自治体（都道府県、市区町村）一覧

調査対象都道府県	調査対象市区町村
秋田県	能代市、潟上市、横手市
愛知県	清須市、半田市、西尾市
高知県	須崎市、土佐町、芸西村
大分県	臼杵市、中津市、豊後大野市

[2] あらかじめ調査対象地域を選定することで、地域で取り組まれている子供の読書の推進のための取組について、地域性等の違いや、取組の背景・前提条件等の違いをふまえつつ、情報の収集ができるようになると考えた。ただし、他方で、特に児童・生徒や保護者を対象とした質問紙調査の結果については、必ずしも全国の母集団を反映したものとなっているとは言えないという点には限界がある。また、調査対象とした地域や、事例として取り上げた学校等について、必ずしも「全国の中で最も読書活動推進が進んでいる事例」というものではない点には留意が必要である。

[3] 対象都道府県の選定にあたっては、全国学力・学習状況調査のほか、「子どもの読書活動と人材育成に関する調査研究【地域・学校ワーキンググループ】報告書」（国立青少年教育振興機構、平成 25 年 6 月）の調査結果も参照した。

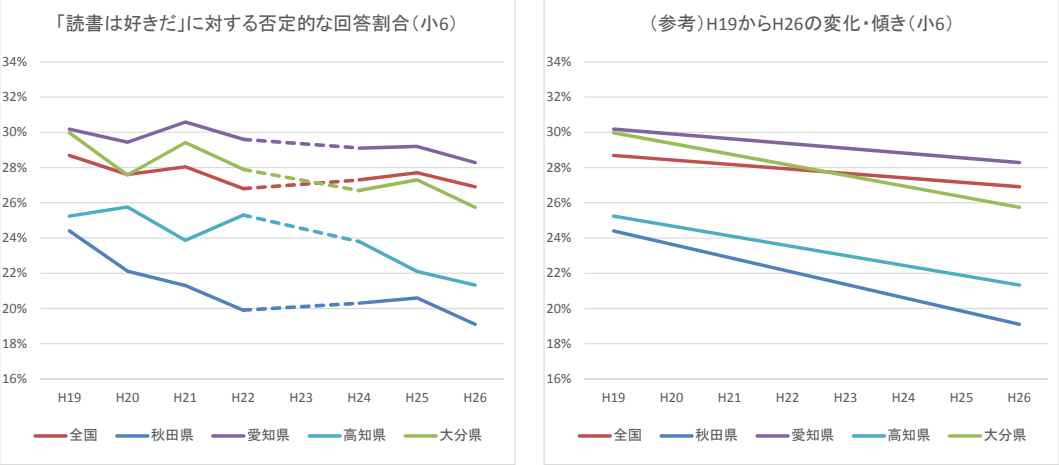
調査対象とする地域選定の検討の過程の中で、全国学力・学習状況調査での読書に関する児童・生徒質問紙の項目について、具体的には、「読書は好きだ」という質問項目に着目した[4]。

この項目に対して、否定的な回答（「当てはまらない」「どちらかといえば、当てはまらない」）割合の推移をみると[5]、まず全国の値に関して、小学生では平成 19 年の時点で 28%を超えていたところから、増減を繰り返しながら徐々に減少している傾向がみられる（図表 1-3）。中学生に関しては、平成 21 年から平成 25 年にかけて減少傾向がみられる中で、平成 26 年では若干割合が増加している（図表 1-4）。

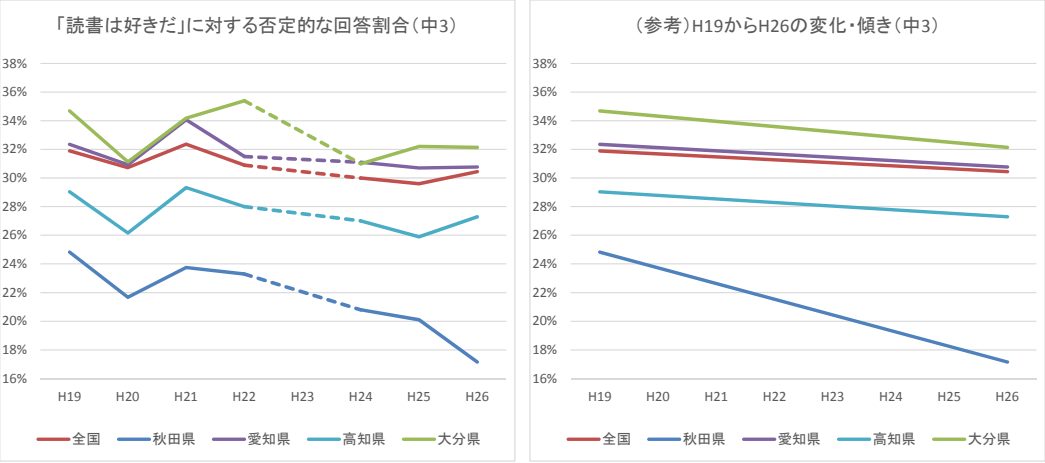
このようななか、大分県においては、小学生に関する変化として、平成 19 年や平成 21 年時点では全国値よりも高かったが、平成 26 年時点では全国値を下回っている。秋田県や高知県については、もともと全国値よりも水準が低いなかで平成 26 年にかけてさらに減少しており、全国値との差は一段と大きくなっている。なお、秋田県においては、中学生についても減少傾向が顕著に見られる。

愛知県については、全国とほぼ同様の増減の推移をしているが、平成 23 年以降の変化に着目すると、小学生・中学生ともに、この期間では全国との差が縮小していることがうかがえる。

図表 1-3　対象都道府県の小学生の回答割合の変化（出所：全国学力・学習状況調査）



図表 1-4　対象都道府県の中学生の回答割合の変化（出所：全国学力・学習状況調査）



[4] このほか、全国学力・学習状況調査で読書に関する項目としては、1 日あたりの読書時間に関する設問や、図書館に行く頻度に関する設問等がある。ただし、これらについては設問文が調査実施年度によって若干変更されており、統一されていない。このことから、本調査研究において回答結果の経年的な変化を確認するにあたり、設問文が毎年同じ形式で調査が実施されている「読書は好きだ」の項目に着目した。なお、全国学力・学習状況調査の読書に関する調査項目に関し、対象 4 県の平成 26 年度の調査結果を本報告書の巻末に参考資料として掲載した。

[5] 平成 23 年は調査が実施されていないため、その部分は破線で推移を示した。なお、平成 22 年・平成 24 年・平成 25 年の集計には合計の 100%のなかに無回答等の値が若干含まれており、この影響を取り除いていない数値となっている。

（３）質問紙調査の実施

①調査対象・調査票配付件数

質問紙調査については、以下図表 1-5 に示した対象・件数に基づき調査を実施した。

なお、児童・生徒を対象とする調査の調査対象校は各自治体に選定いただいたが、調査対象とする学年（小学 5 年生、中学 2 年生、高校 2 年生）については、調査依頼の際に当社よりあらかじめ指定した。また、高校の選定にあたっては、調査対象の偏りが大きくならないようにすることを意図して、「大学・短期大学進学率 9 割以上の普通科高校」、「それ以外の普通科高校」、「その他の専門科高校」を各 1 校抽出していただくよう依頼した。

また、県立・公立図書館対象の調査について、自治体内に複数の図書館がある場合には、中央館など代表的な館に回答いただくよう依頼した。

図表 1-5　質問紙調査の対象、調査票配付件数

調査種類	対象分類	調査票名称	対象・配付数
a-1	児童・生徒	小学生対象調査	各市町村内の公立小学校 1 校（5 年生全クラス） 計 12 校、配布数 840 部
		中学生対象調査	各市町村内の公立中学校 1 校（2 年生 1 クラス） 全 12 校 12 クラス、配布数 540 部
		高校生対象調査	各県下の公立高校 3 校（各校 2 年生 1 クラス） 全 12 校 12 クラス、配布数 540 部
調査種類	対象分類	調査票名称	対象・配付数
a-2	保護者	保護者対象調査	上記小学生・中学生・高校生の保護者対象 配布数計 1,920 部
調査種類	対象分類	調査票名称	対象・配付数
b-1	自治体・図書館	都道府県対象調査	各県 1 部、配布数計 4 部
		県立図書館対象調査	各県 1 部、配布数計 4 部
		市町村対象調査	各市町村 1 部、配布数計 12 部
		公立図書館対象調査	各市町村 1 部、配布数計 12 部
	学校・教育機関	公立幼稚園対象調査	各市町村内の全公立幼稚園各 1 部、配布数計 37 部 （秋田県 1 部、愛知県 11 部、高知県 1 部、大分県 24 部）
		公立小学校対象調査	各市町村内の全公立小学校各 1 部、配布数計 141 部 （秋田県 37 部、愛知県 48 部、高知県 10 部、大分県 46 部）
		公立中学校対象調査	各市町村内の全公立中学校各 1 部、配布数計 68 部 （秋田県 18 部、愛知県 20 部、高知県 7 部、大分県 23 部）
		公立高等学校対象調査	各県下の全公立高校各 1 部、配布数計 298 部 （秋田県 52 部、愛知県 163 部、高知県 37 部、大分県 46 部）
調査種類	対象分類・調査票名称		対象・配付数
b-2	詳細調査		「b-1」調査で把握された、自治体・図書館、学校・教育機関が実施している取組のなかから 71 事例

②主な調査事項

各調査について、主に以下の図表 1-6 に示したような内容・項目についてたずねた（調査項目の詳細については、巻末の「参考資料」に調査票を掲載した）。

図表 1-6　質問紙調査の主な内容・調査事項

<table>
<tr><th>調査種類</th><th>対象分類</th><th>調査票名称</th><th>主な内容・調査事項</th></tr>
<tr><td rowspan="3">a-1</td><td rowspan="3">児童・生徒</td><td>小学生対象調査</td><td rowspan="3">○読書が好きか
○1 日あたりの読書時間、1 か月に読んだ本の冊数
○本を読まなかった理由、本を読むことについて影響を受けたと思うこと
○一番感動したり、興味を持ったりした本について読んだ時期や影響を受けたと思うこと
○学校図書館（図書室）、地域の図書館の利用頻度、認識
○どのようにすればもっと本を読みたくなると思うか</td></tr>
<tr><td>中学生対象調査</td></tr>
<tr><td>高校生対象調査</td></tr>
<tr><th>調査種類</th><th>対象分類</th><th>調査票名称</th><th>主な内容・調査事項</th></tr>
<tr><td>a-2</td><td>保護者</td><td>保護者対象調査</td><td>○子供の読書量・頻度についての認識
○家庭での読書活動の状況
○保護者自身の読書時間、地域の図書館の利用頻度
○家庭の蔵書数
○子供の読書に関する課題認識、意識的に行っていること
○環境面で課題があると思うこと、よいと思っていること
○どのようにすれば子供がもっと本を読みたくなると思うか</td></tr>
<tr><th>調査種類</th><th>対象分類</th><th>調査票名称</th><th>主な内容・調査事項</th></tr>
<tr><td rowspan="7">b-1</td><td rowspan="4">自治体・図書館</td><td>都道府県対象調査</td><td rowspan="4">○子供の読書推進に関する取組として実施していること
（対象、連携機関・団体等、主な目的、取組・事業の概要）
○子供の読書に関する状況についての課題認識
○子供の読書に関する環境面についての課題認識</td></tr>
<tr><td>県立図書館対象調査</td></tr>
<tr><td>市町村対象調査</td></tr>
<tr><td>公立図書館対象調査</td></tr>
<tr><td rowspan="3">学校・教育機関</td><td>公立幼稚園対象調査</td><td>○子供の読書推進に関する取組として実施していること
（対象、連携機関・団体等、主な目的、取組・事業の概要）
○園児の読書に関する環境面についての課題認識
○園児の家庭における読書の状況に関する課題認識</td></tr>
<tr><td>公立小学校対象調査</td><td rowspan="3">○司書教諭の配置状況、学校司書の配置状況
○子供の読書活動推進等に関する方針や計画の策定状況
○教職員向けの研修会・勉強会等の実施状況
○学校図書館を活用した授業の実施状況
○子供の読書推進に関する取組として実施していること
（対象、連携機関・団体等、主な目的、取組・事業の概要）
○子供の読書に関する状況についての課題認識
○子供の読書に関する環境面についての課題認識</td></tr>
<tr><td>公立中学校対象調査</td></tr>
<tr><td>公立高等学校対象調査</td></tr>
<tr><th>調査種類</th><th colspan="2">対象分類・調査票名称</th><th>主な内容・調査事項</th></tr>
<tr><td>b-2</td><td colspan="2">詳細調査</td><td>○取組の概要（目的、内容、対象・参加者、実施場所、実施時期、頻度・回数、開始時期・中心的な役割を果たしている機関・団体等、連携・協力している機関・団体等）
○取組を実施するようになったきっかけ・沿革等
○連携・協力している機関・団体間の役割分担等
○必要とした資源（費用、人的資源、ノウハウ）
○成果が出ていると考える点・更なる改善が必要と考える点
○他の地域等での取組実施・推進の可能性</td></tr>
</table>

③調査票配付・回収の方法、調査実施時期

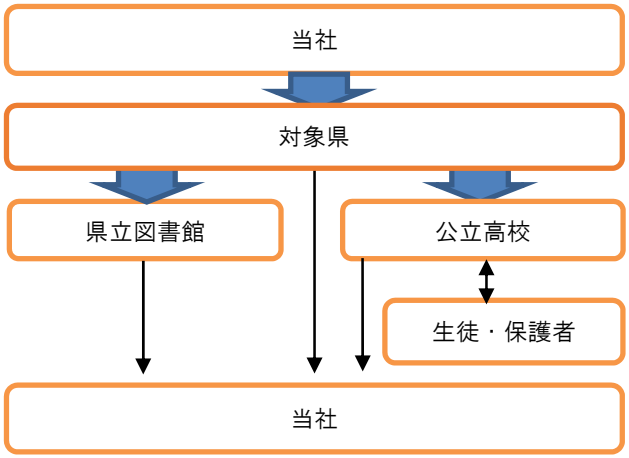
調査種類の「a-1」「a-2」「b-1」の各質問紙調査は、以下の図表 1-7、図表 1-8 に示したような流れにより、調査対象とした各県、ならびに、市区町村の協力のもと配付を行った。

なお、児童・生徒を対象とした調査については、ホームルーム等の時間を活用して校内での実施を依頼した。保護者を対象とした調査については、児童・生徒を通じて各家庭に調査票を持ち帰っていただいた上で回答いただいた。また、回答済みの調査票については、個別に返信いただくか、いったん学校で回収を行っていただいた上で、児童・生徒を対象とした調査票とともに当社に返送いただいた。

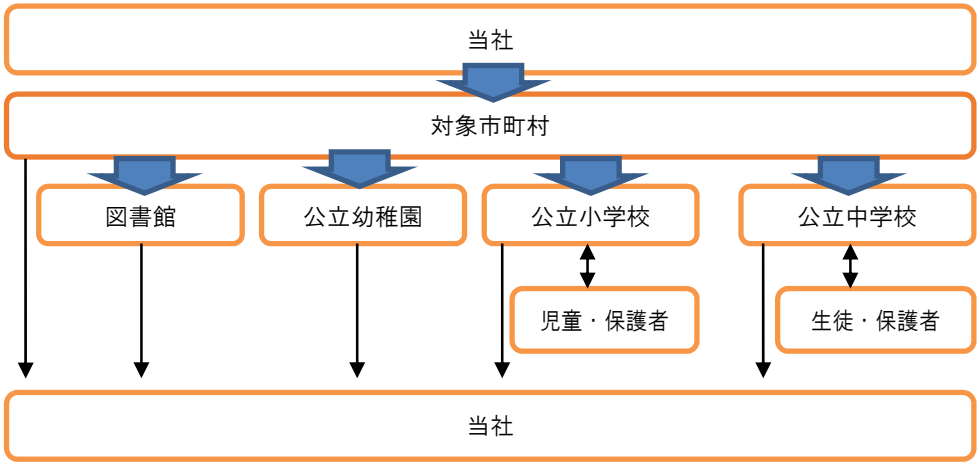
調査種類の「a-1」「a-2」「b-1」の調査票は、必要部数を印刷[6]し、平成 27 年 11 月 27 日に各県・市町村に向けて発送した。また、平成 27 年 12 月 22 日を各調査対象から当社に対する返送の締め切り日として案内した。

調査種類の「b-2」（詳細調査）は、「b-1」の内容確認後、平成 28 年 1 月 18 日に電子メールまたは郵送にて調査実施の依頼を行った。なお、詳細調査の回答期限は平成 28 年 1 月 26 日として依頼した。

図表 1-7　県に協力いただいた調査票配付・回収の流れ



図表 1-8　市町村に協力いただいた調査票配付・回収の流れ



6 一部、調査票ファイルを添付し、電子メールでの調査依頼を行った。

④調査票回収状況

調査票回収件数については、以下の図表 1-9 の通りである。

図表 1-9　質問紙調査の回収件数

<table>
<tr><th>調査種類</th><th>対象分類</th><th>調査票名称</th><th>回収件数</th></tr>
<tr><td rowspan="3">a-1</td><td rowspan="3">児童・生徒</td><td>小学生対象調査</td><td>計 524 件
（公立小学校計 12 校、対象学校の 5 年生全クラスで実施）</td></tr>
<tr><td>中学生対象調査</td><td>計 327 件
（公立中学校計 12 校、対象学校の 2 年生各 1 クラスで実施）</td></tr>
<tr><td>高校生対象調査</td><td>計 457 件
（公立高等学校計 12 校、対象学校の 2 年生各 1 クラスで実施）</td></tr>
<tr><th>調査種類</th><th>対象分類</th><th>調査票名称</th><th>回収件数</th></tr>
<tr><td>a-2</td><td>保護者</td><td>保護者対象調査</td><td>計 1,038 件
（小学生 463 件、中学生 269 件、高校生 304 件、不明 2 件）</td></tr>
<tr><th>調査種類</th><th>対象分類</th><th>調査票名称</th><th>回収件数</th></tr>
<tr><td rowspan="8">b-1</td><td rowspan="4">自治体･図書館</td><td>都道府県対象調査</td><td rowspan="4">計 29 件*</td></tr>
<tr><td>県立図書館対象調査</td></tr>
<tr><td>市町村対象調査</td></tr>
<tr><td>公立図書館対象調査</td></tr>
<tr><td rowspan="4">学校･教育機関</td><td>公立幼稚園対象調査</td><td>計 25 件
（配付 37 件に対する割合 67.6%）</td></tr>
<tr><td>公立小学校対象調査</td><td>計 124 件
（配付 141 件に対する割合 87.9%）</td></tr>
<tr><td>公立中学校対象調査</td><td>計 58 件
（配付 68 件に対する割合 85.3%）</td></tr>
<tr><td>公立高等学校対象調査</td><td>計 232 件
（配付 298 件に対する割合 77.9%）</td></tr>
<tr><th>調査種類</th><th colspan="2">対象分類・調査票名称</th><th>回収件数</th></tr>
<tr><td>b-2</td><td colspan="2">詳細調査</td><td>44 件
（配付 71 件に対する割合 62.0%）</td></tr>
</table>

※一部の対象については、自治体と図書館の情報を取りまとめた上で返送いただいた

（４）ヒアリング調査の実施

調査種類「b-1」「b-2」の質問紙調査で得られた情報をより深めるため、「b-3」として、ヒアリング調査を実施した。

ヒアリング調査は、以下の図表 1-10 に示した対象に実施した。なお、ヒアリングの際には、各地に浜銀総合研究所研究員が 2 名訪問し、各対象が実施している取組について 1 ～2 時間程度話をうかがった。

図表 1-10　ヒアリング調査の実施対象・日程

調査対象都道府県	訪問先	訪問日時
秋田県	秋田県庁	平成 28 年 2 月 23 日　10:00～
	潟上市図書館	平成 28 年 2 月 24 日　10:00～
	潟上市立天王小学校	平成 28 年 2 月 24 日　14:00～
愛知県	愛知県教育委員会	平成 28 年 2 月 26 日　15:00～
	愛知県図書館	平成 28 年 3 月 3 日　10:00～
	清須市立図書館	平成 28 年 3 月 3 日　14:30～
	愛知県立緑丘商業高等学校	平成 28 年 3 月 4 日　10:00～
高知県	高知県教育委員会	平成 28 年 3 月 2 日　10:00～
	芸西村教育委員会	平成 28 年 3 月 2 日　14:30～
大分県	大分県教育委員会	平成 28 年 2 月 17 日　10:00～
	豊後大野市立朝地小・中学校	平成 28 年 2 月 17 日　15:00～
	大分県立佐伯豊南高等学校	平成 28 年 2 月 24 日　15:00～

４．本報告書の構成、分析の視点

本報告書では、第 2 章において、「子供の読書習慣等の実態」として、主に単純集計の結果により小学生・中学生・高校生の読書に関する実態について、全体概要を把握した。その上で、第 3 章では、「子供の読書習慣等に関する詳細分析」として、クロス集計や自由記述回答等に基づき分析を行った。なお、第 3 章は、分析のテーマ別に、「子供の読書習慣等に影響する諸要因に関する分析」「本を読むきっかけとなりうる出来事等に関する分析」「子供の読書習慣等の実態に関する課題認識」の 3 つの節から構成している。

第 2 章・第 3 章は、主に本調査研究の目的 A に対応する内容であるが、第 4 章では、目的 B に対応する内容として、調査対象とした自治体・図書館、学校・教育機関等で子供の読書推進のために取り組まれている内容について情報を整理した。なお、ヒアリング調査から得られた情報に基づく事例紹介についても、第 4 章にて掲載した。

第 5 章は、「まとめ・考察」として、本調査研究において主に把握されたことや考察結果等について掲載し、また、巻末には参考資料として、実施した調査の調査票、集計結果一覧、その他調査対象・地域に関する参考資料等を掲載した。

（１）第２章の内容

第 2 章「子供の読書習慣等の実態」では、小学生・中学生・高校生のそれぞれが普段どれくらい本を読んでいるのか、読まない理由や、読むことに影響していると考える出来事は何か等について、主に単純集計から把握された情報に基づき、その全体状況を把握した。

なお、一部の点については、保護者対象の調査結果も参照し、家庭における読書の状況等を把握した。

（２）第３章第１節の内容

第 3 章第 1 節「子供の読書習慣等に影響する諸要因に関する分析」では、どのような児童・生徒が多く本を読んでいる（読んでいない）のかについて分析を行った。

なお、分析を行うにあたっては、子供の読書習慣等に影響を与えうる要因として、「個人属性（性別）」、「家庭環境要因（保護者の読書習慣、家庭の蔵書数、読書に関する就学前段階の取組）」、「学校・図書館環境要因（学校での読書に関する取組状況等）」の 3 点に着目した。

また、子供の読書習慣等について、具体的には、1 か月に読んだ本の冊数に関する分析を中心に、以下の点に着目して分析を行った。

＜「子供の読書習慣等」として着目した視点＞

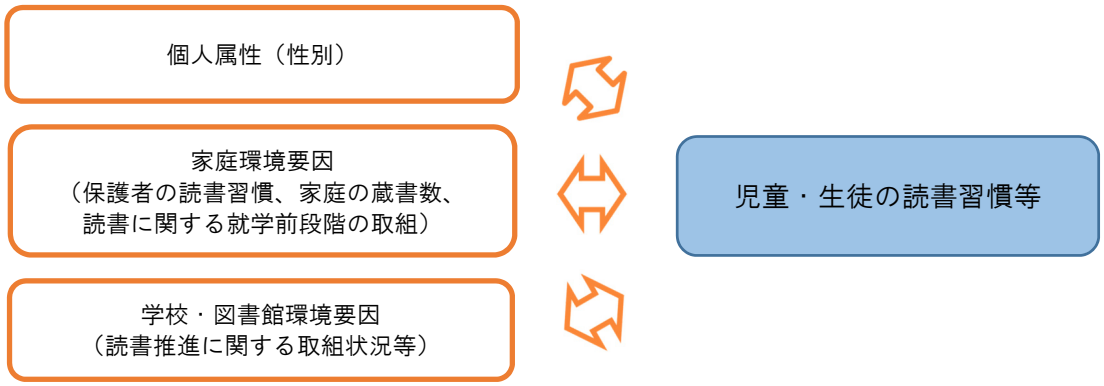
・この 1 か月に読んだ本が「0 冊」の割合

・普段学校のある日に紙の本を「全く読まない」割合

・学校のない休みの日に紙の本を「全く読まない」割合

・読書が好きかについて「あまり好きではない」「好きではない」の合計割合

図表 1-11　本報告書第 3 章第 1 節の分析内容に関するイメージ



このほか、「家庭環境要因」の影響に関しては、児童・生徒対象の調査と、保護者対象の調査のそれぞれのデータのマッチングを行った上で分析を行った。

児童・生徒向け調査と保護者向け調査のデータマッチングについては、各調査で把握したクラス名・出席番号の情報に基づき、児童・生徒（子供）と保護者との対応関係を把握した。このように、それぞれ別の調査で得られたデータに基づきクロス集計を行うことで、児童・生徒の回答結果に対する保護者の影響について、因果の関係をより明確にした上で解釈等を行えるという利点がある。なお、上記のような方法により、データマッチングが可能であった件数は次の図表 1-12 のようになっている。

また、「学校・図書館環境要因」の影響について分析する上では、児童・生徒の回答結果に基づき、学校図書館の環境整備等がより充実していると考えられる学校群とそうではない学校群とに分類し、それぞれの学校に在籍している児童・生徒の読書量等の状況について比較分析を行った。

図表 1-12　児童・生徒対象調査と保護者対象調査とのマッチング結果

	マッチングが可能であった件数	児童・生徒対象調査有効回答数に占める割合	保護者対象調査有効回答数に占める割合
小学生対象調査と保護者対象調査のマッチング	308	58.8%	66.5%
中学生対象調査と保護者対象調査のマッチング	197	60.2%	73.2%
高校生対象調査と保護者対象調査のマッチング	259	56.7%	85.2%

（３）第３章第２節の内容

第３章第２節「本を読むきっかけとなりうる出来事等に関する分析」では、児童・生徒がどのようなことに影響を受けて本を読んでいるのかを把握するため、１か月に１冊以上本を読んでいる者に関し[7]、属性等の別に本を読むことに影響を受けたと考える出来事の内容との関係について分析した。

なお、分析にあたっては、「個人属性（性別）」、「家庭環境要因（保護者の読書習慣、家庭の蔵書数、読書に関する就学前段階の取組）」、「学校・図書館環境要因（学校での読書に関する取組状況等）」の３点に加え、「児童・生徒の読書習慣等」として、「読書量」「平日・休日の読書時間」との関係性について分析を行った。

図表 1-13　本報告書第３章第２節の分析内容に関するイメージ

（５）第３章第３節の内容

第３章第３節「子供の読書習慣等の実態に関する課題認識」では、保護者・学校等の教員が、それぞれ子供の読書習慣等の実態について課題をどのように認識しているのかを把握するため、自由記述により回答が得られた情報について整理した。

保護者からの回答については、主に家庭における読書の状況や課題等に関して、また、地域における環境面での課題等に関して把握した。学校からの回答に関しては、幼稚園・小学校・中学校・高等学校に関して、それぞれどのような認識が持たれているのかについて、段階別に見られる差異や共通点について把握を試みた。

[7] １か月に読んだ本の冊数が０冊であった者に関しては、なぜ読まなかったのかをたずねる設問を設けている。ただし、小学生・中学生については１か月に読んだ本の冊数が０冊であった者の数が少ないこと、高校生に関しては平成 26 年度「高校生の読書に関する意識等調査」にて詳細な分析を行っていることから、本報告書では、１冊以上本を読んでいる者に関し、子供が本を読むきっかけとなりうる出来事を把握するための分析をより詳細に実施した。

（６）第４章の内容

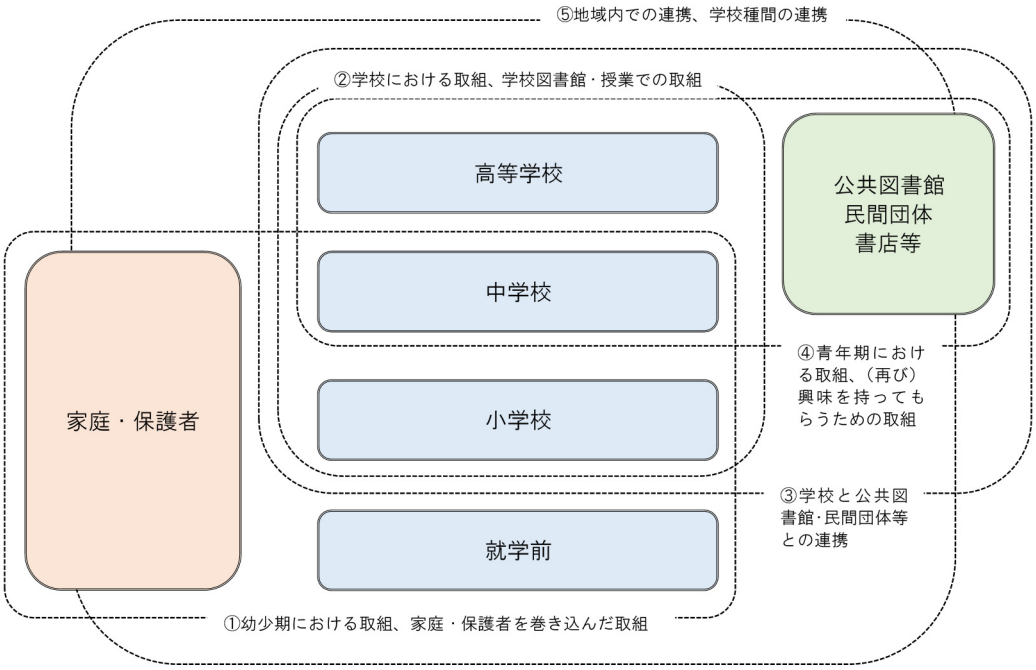
第４章「子供の読書推進のための取組状況」では、第２章・第３章の分析・整理の中で把握された子供の読書の実態や課題点等をふまえつつ、調査対象とした各地域で読書推進のためにどのような取組がなされているのか、その内容について把握を行った。

この点について、本調査研究では、特に自治体（教育委員会含む）、図書館、学校等教育機関、民間企業、ＮＰＯ法人、ボランティア団体、家庭等との連携･協力により実施されている取組を中心として、自治体や学校・教育機関等での取組状況等について整理した。

また、調査の中で情報が得られた一部の取組に関しては、取組の概要だけでなく、取組を実施するようになったきっかけや沿革等、必要とした資源（費用、人的資源、ノウハウ）、成果や課題点等について情報を整理した。このほか、ヒアリング調査でさらに情報を得た取組に関しては、より詳細な事例紹介を行った。

なお、以下のように、子供の教育段階別に、対象範囲・領域の想定をし、「①幼少期における取組、家庭・保護者を巻き込んだ取組」「②学校における取組、学校図書館・授業での取組」「③学校と公共図書館・民間団体等との連携」「④青年期における取組、（再び）興味を持ってもらうための取組」「⑤地域内での連携、学校種間の連携」の別に、取組の情報整理・紹介を行った。

図表 1-14　子供の読書推進のための取組の内容・テーマ別の対象範囲・領域イメージ



第２章

子供の読書習慣等の実態

（全体概要）

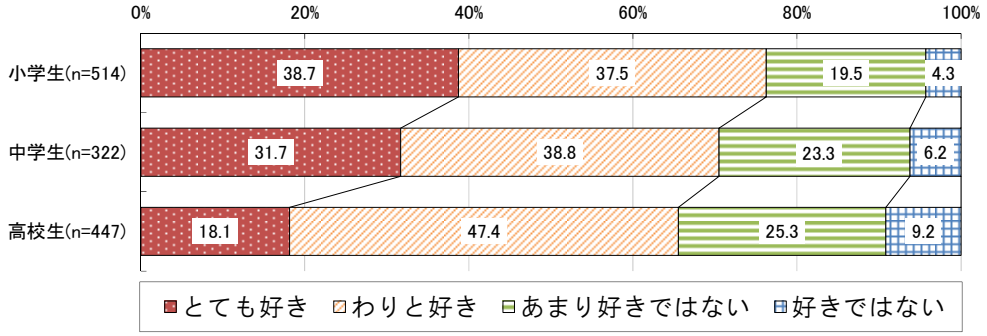
第２章　子供の読書習慣等の実態（全体概要）

１．読書に対する意識

◇ 小学生・中学生・高校生のうち、どれくらいの人が読書好き？

- 読書[8]が「とても好き」と回答した児童・生徒の割合は、小学生では 38.7%、中学生は 31.7%、高校生は 18.1%[9]で、学校段階が高いほどその割合は少なくなっている[10]。
- なお、「わりと好き」の回答と合わせると、いずれも６割超の者が「好き」と回答している。

図表 2-1-1　読書が好きかについての意識



※それぞれ、「無回答」は除いて集計した。

《読み取れること・ポイント》

★ 小学生・中学生・高校生ともに、６割以上の児童・生徒は「読書が好き」と回答しているが、その割合は学校段階が高くになるにつれて低くなっている。

---

8 今回児童・生徒を対象に実施した質問紙調査における「読書」には、パソコンやタブレット端末、スマートフォン等で読める本（電子書籍）を含むものとし、他方で、マンガや雑誌、新聞、教科書や参考書を読むことは含まないこととした。また、「マンガ」に関して、いわゆる「学習マンガ」については、「ほぼすべてがマンガで構成されているもの」は本調査における読書の対象外として考えていただくよう、調査実施の際に案内をした。

9 平成 26 年度「高校生の読書に関する意識等調査」では 17.6%で、ほぼ同様の結果となっている。

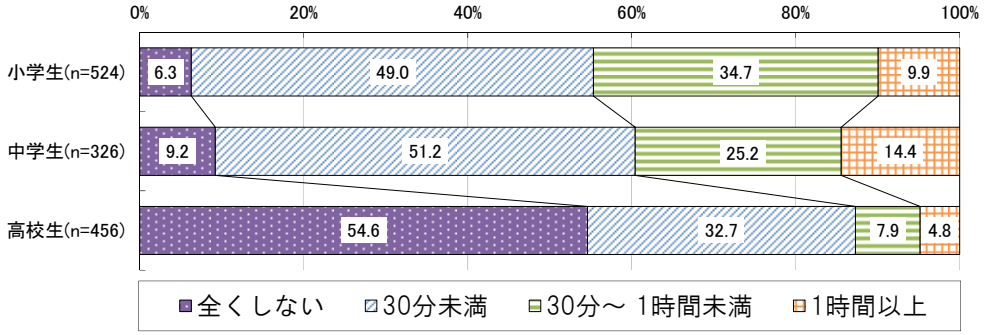
10 図表中の構成比は小数点第２位を四捨五入していることから、表示中の構成比を合計しても 100%にならない場合がある（以下同様）。

２．１日あたりの読書時間

◇ 小学生・中学生・高校生は普段どれくらいの時間本を読んでいる？

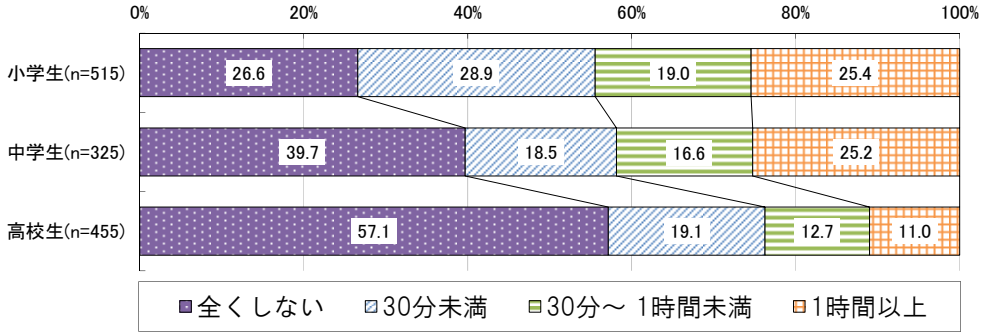
- 「1 日にどのくらい本を読みますか」という設問で、「ふだん学校のある日」（平日）については、小学生の 6.3%、中学生の 9.2%、高校生の 54.6%が「全くしない」と回答している。
- また、「学校のない休みの日」（休日）については、小学生の 26.6%、中学生の 39.7%、高校生の 57.1%[11]が「全くしない」と回答している。
- なお、「全くしない」と回答した児童・生徒以外では、1 日あたりの時間数として、平日では「30 分未満」との回答が最も多くなっている。休日に関しては、小学生・中学生の 2 割以上が「1 時間以上」と回答している。

図表 2-2-1　1 日あたりの読書時間（ふだん学校のある日）



※それぞれ、「無回答」は除いて集計した。
※「1 時間以上」の回答は「1 時間～2 時間未満」「2 時間～3 時間未満」「3 時間～4 時間未満」「4 時間以上」の選択肢による回答を再分類して集計した。

図表 2-2-2　1 日あたりの読書時間（学校のない休みの日）



※それぞれ、「無回答」は除いて集計した。
※「1 時間以上」の回答は「1 時間～2 時間未満」「2 時間～3 時間未満」「3 時間～4 時間未満」「4 時間以上」の選択肢による回答を再分類して集計した。

《読み取れること・ポイント》

★ 小学生・中学生では、平日に読書を全くしない人の割合は 1 割未満と低いが、休日についてその割合は小学生で 3 割弱、中学生では約 4 割となっている。
★ 高校生については、平日・休日ともに、半数以上は本を全く読んでいない状況にある。

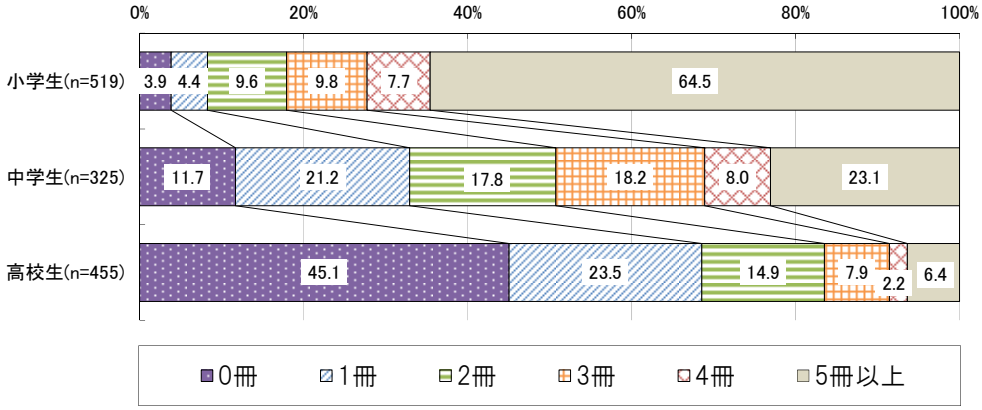
[11] 平成 26 年度「高校生の読書に関する意識等調査」で「全くしない」の割合は、平日について 52.6%、休日について 56.9%で、ほぼ同様の結果となっている。

３．１か月あたりの読書冊数（不読率[12]）

◇ 小学生・中学生・高校生のうち、１か月に読む本の冊数が「0 冊」の児童・生徒の割合（不読率）はどれくらい？

- この１か月で読んだ本の冊数について「０冊」との回答（不読率）は、小学生では 3.9%、中学生では 11.7%、高校生では 45.1%となっている[13]。
- 他方、「5 冊以上」との回答は、小学生では 64.5%、中学生では 23.1%、高校生では 6.4%となっている。
- なお、1 か月で読んだ本の冊数の平均値を算出すると、小学生では 10.0 冊、中学生では 4.5 冊、高校生では 1.5 冊であった。

図表 2-3-1　最近 1 か月間に読んだ本の冊数



※それぞれ、「無回答」は除いて集計した。
※「5 冊以上」については数字での回答を再分類して集計した。

《読み取れること・ポイント》

★ 小学生では月に 5 冊以上本を読んでいる児童が 6 割を超え、「0 冊」の児童は 1 割未満と少ない。
★ 他方で、高校生の約半数は、1 か月間に 1 冊も本を読んでいない状況にある。

[12] 文部科学省「第三次子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」では、全国学校図書館協議会の学校読書調査を参照し、「1 か月に 1 冊も本を読まなかった『不読者』の割合」を「不読率」と呼んでいる。本報告書においては、児童・生徒を対象にして実施した調査で、「1 か月で読んだ本の冊数が『0 冊』と回答した生徒の割合」を「不読率」と呼ぶこととしている。

[13] 不読率の値について、全国学校図書館協議会が実施している学校読書調査の結果と比較して、本調査結果で得られた値のほうが若干低いが、この背景としては、調査対象の選定の仕方や調査の実施時期等に違いがあることが影響しているものと想定される。なお、平成 26 年度「高校生の読書に関する意識等調査」では、不読率は 51.4%であった。

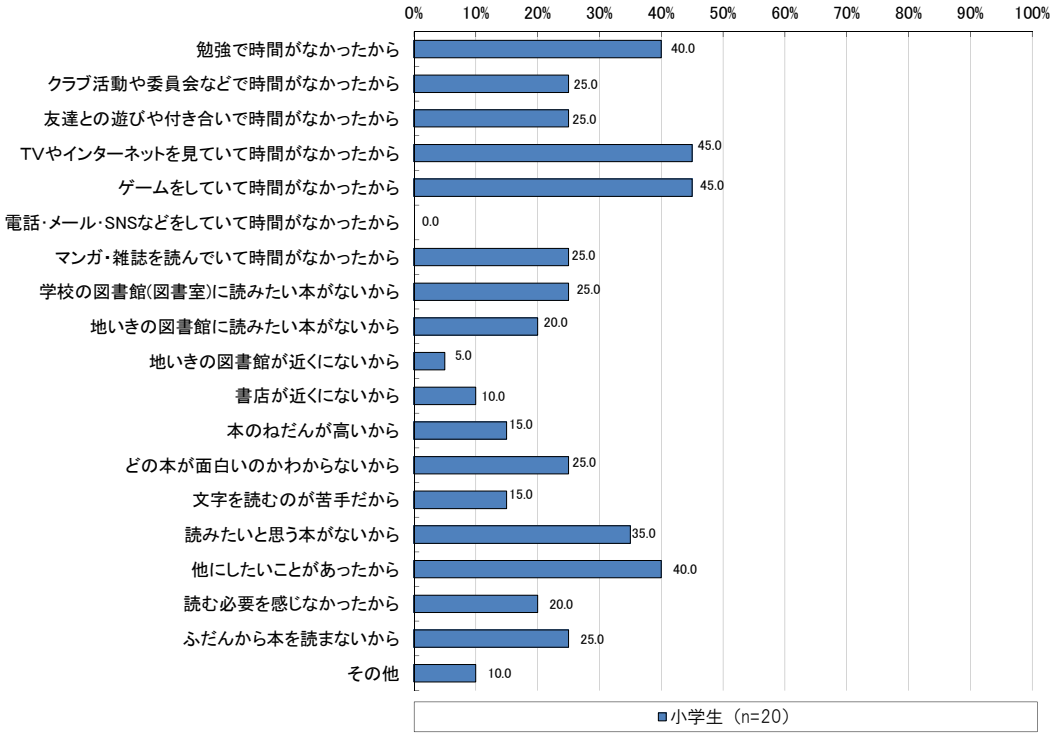
４．１か月の読書冊数が０冊であった児童・生徒が本を読まなかった理由

◇ 本を読まない小学生・中学生・高校生は、それぞれなぜ本を読まないのだろうか？

（１）小学生

- １か月に本を読んだ冊数が「0 冊」であった小学生に、本を読まなかった理由をたずねたところ、最も回答割合が高いのは、「ＴＶやインターネットを見ていて時間がなかったから」「ゲームをしていて時間がなかったから」（それぞれ 45.0%）であった。
- また、次いで回答割合が高いのは「勉強で時間がなかったから」、「他にしたいことがあったから」（それぞれ 40.０%）となっている。

図表 2-4-1　１か月に本を１冊も読まなかった児童が本を読まなかった理由（小学生、複数回答）

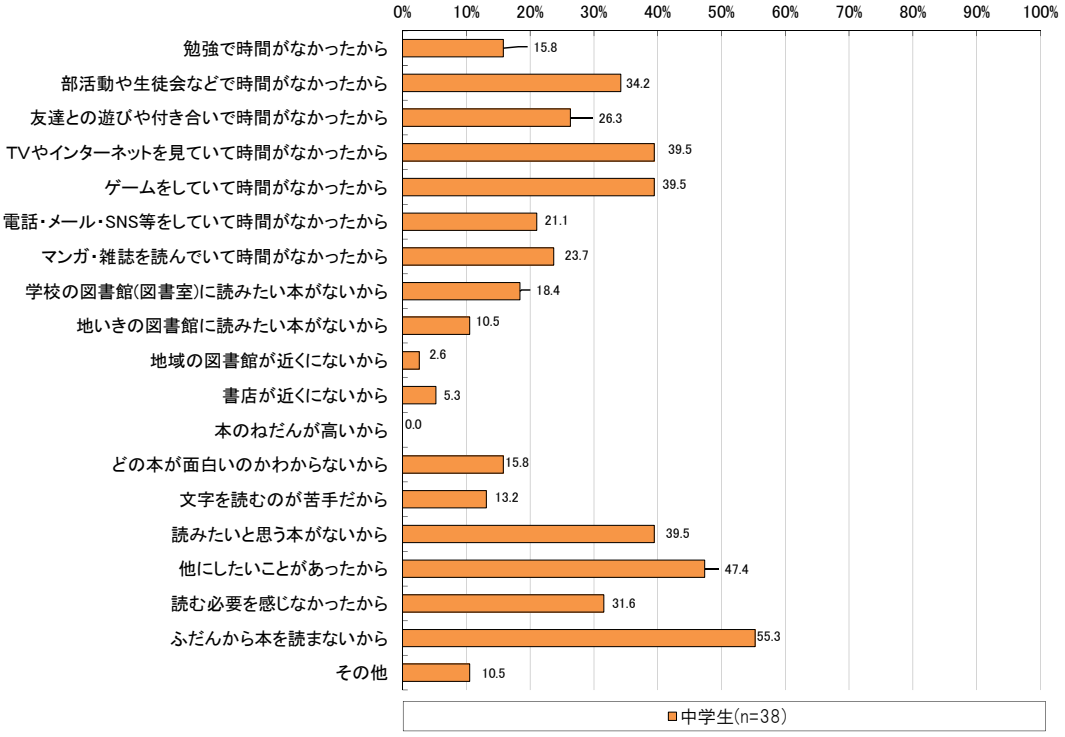


※「無回答」は除いて集計した。集計対象件数が 20 件と少ない点には留意が必要である。

（２）中学生

- １か月に本を読んだ冊数が「0 冊」であった中学生に、本を読まなかった理由をたずねたところ、最も回答割合が高いのは、「ふだんから本を読まないから」（55.3%）であった。
- また、次いで回答割合が高いのは「他にしたいことがあったから」（47.4%）となっており、さらに、「ＴＶやインターネットを見ていて時間がなかったから」「ゲームをしていて時間がなかったから」「読みたいと思う本がないから」（それぞれ、39.5%）が続いている。

図表 2-4-2　１か月に本を１冊も読まなかった生徒が本を読まなかった理由（中学生、複数回答）

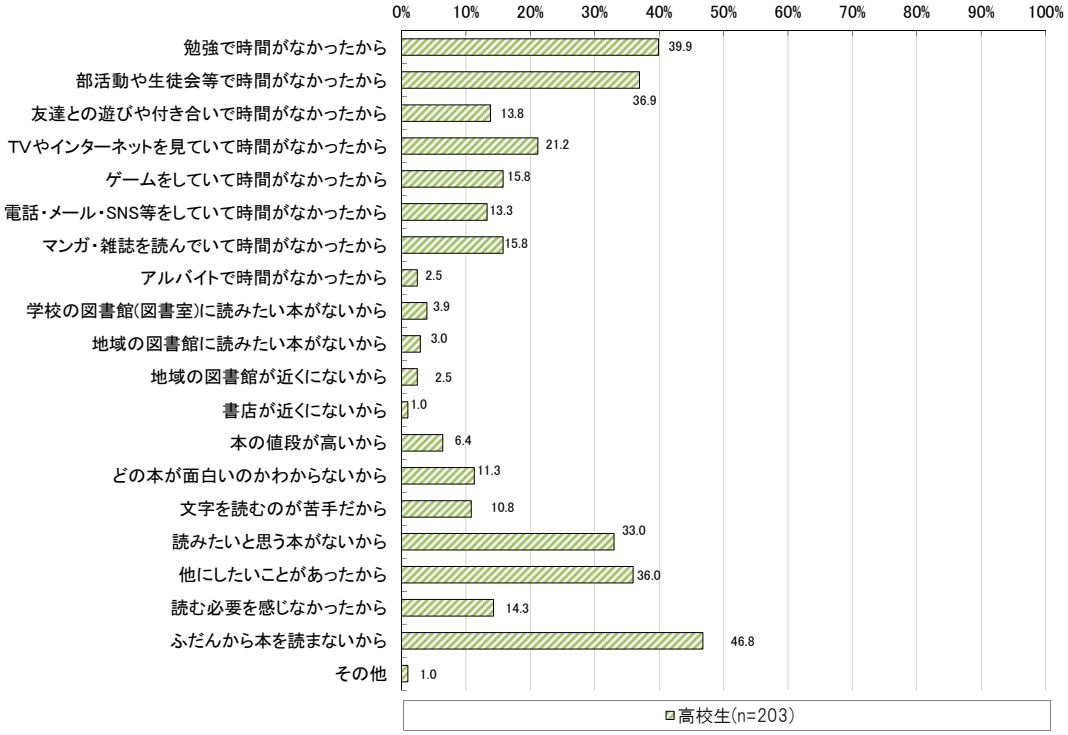


※「無回答」は除いて集計した。集計対象件数が 38 件と少ない点には留意が必要である。

（３）高校生

- １か月に本を読んだ冊数が「0 冊」であった高校生に、本を読まなかった理由をたずねたところ、最も回答割合が高いのは「ふだんから本を読まないから」（46.8%）であった。
- また、次いで回答割合が高いのは「勉強で時間がなかったから」（39.9%）となっており[14]、さらに、「部活動や生徒会等で時間がなかったから」（36.9%）、「他にしたいことがあったから」（36.0%）、「読みたいと思う本がないから」（33.0%）が続いている。

図表 2-4-3　１か月に本を１冊も読まなかった生徒が本を読まなかった理由（高校生、複数回答）



※「無回答」は除いて集計した。

《読み取れること・ポイント》

- ★ 本を読まない理由として、小学生や中学生では「TV やインターネット」「ゲーム」など、読書以外の娯楽・趣味等に時間がかけられている者の割合が相対的に高くなっている。
- ★ 中学生や高校生では、読書習慣が身についていないために本を読まなくなっている者が多いのではないかと考えられる。
- ★ 高校生では、勉強や部活動・生徒会活動等に時間をとられていることを不読の理由として挙げている者も多い。

[14] 平成 26 年度「高校生の読書に関する意識等調査」と比較すると、「勉強で時間がなかったから」との回答割合が相対的に高くなっている。この点については、調査対象の選定の仕方の違いが影響している可能性があるほか、今年度調査の実施時期が 12 月であったため、学期末試験の影響等があったことも考えられる。

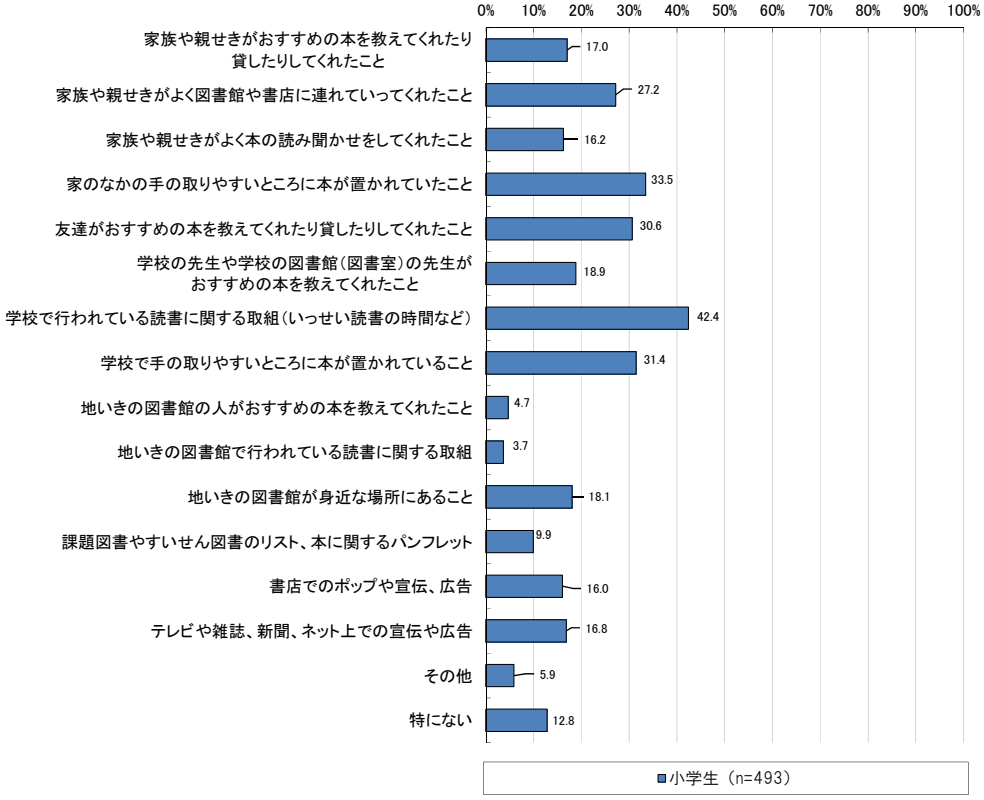
５．本を読むことについて影響を受けたと思うこと

◇ １か月に１冊以上本を読んでいる児童・生徒は、どのような出来事等に影響を受けて本を読んでいるのだろうか？

（１）小学生

- １か月に本を読んだ冊数が１冊以上であった児童・生徒に、本を読むことについてこれまでに影響を受けたと思う出来事などをたずねたところ、最も回答割合が高いのは、「学校で行われている読書に関する取組（いっせい読書の時間など）」（42.4%）であった。
- また、次いで回答割合が高いのは、「家のなかの手の取りやすいところに本が置かれていたこと」（33.5%）であり、さらに、「学校で手の取りやすいところに本が置かれていること」（31.4%）、「友達がおすすめの本を教えてくれたり貸したりしてくれたこと」（30.6%）が続いている。

図表 2-5-1　本を読むことについてこれまで影響を受けたと思うこと（小学生、複数回答）

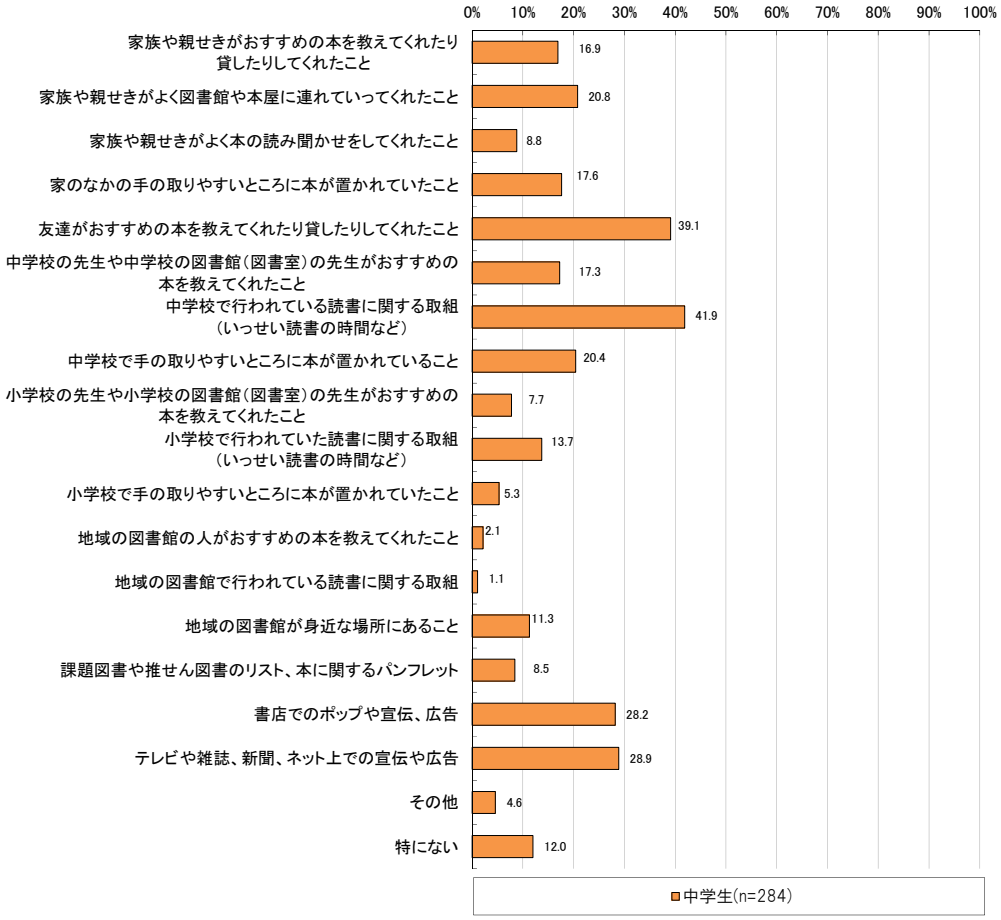


※「無回答」は除いて集計した。

（２）中学生

- １か月に本を読んだ冊数が１冊以上であった中学生に、本を読むことについてこれまでに影響を受けたと思う出来事などをたずねたところ、最も回答割合が高いのは、「中学校で行われている読書に関する取組（いっせい読書の時間など）」（41.9%）であった。
- また、次いで回答割合が高いのは、「友達がおすすめの本を教えてくれたり貸したりしてくれたこと」（39.1%）であり、さらに、「テレビや雑誌、新聞、ネット上での宣伝や広告」（28.9%）、「書店でのポップや宣伝、広告」（28.2%）が続いている。

図表 2-5-2　本を読むことについてこれまで影響を受けたと思うこと（中学生、複数回答）

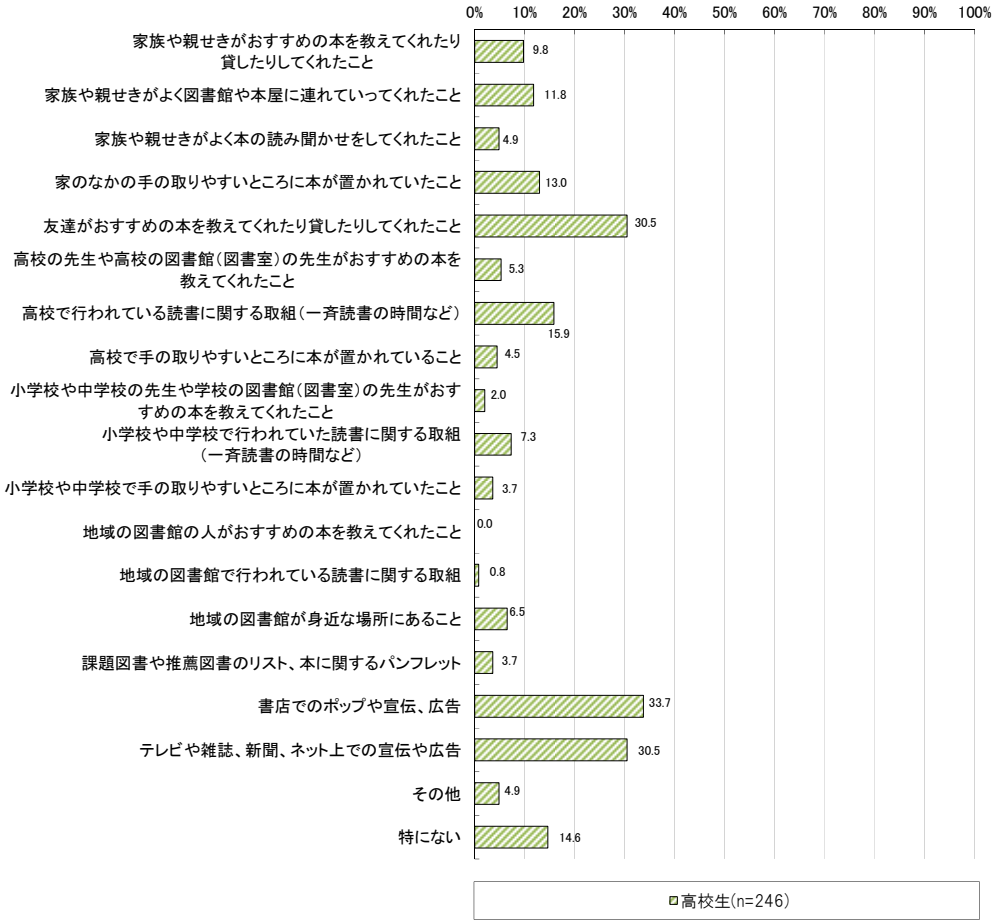


※「無回答」は除いて集計した。

（３）高校生

- １か月に本を読んだ冊数が１冊以上であった高校生に、本を読むことについてこれまでに影響を受けたと思う出来事などをたずねたところ、最も回答割合が高いのは、「書店でのポップや宣伝、広告」（33.7%）であった。
- また、次いで回答割合が高いのは、「友達がおすすめの本を教えてくれたり貸したりしてくれたこと」「テレビや雑誌、新聞、ネット上での宣伝や広告」（それぞれ 30.5%）となっている。

図表 2-5-3　本を読むことについてこれまで影響を受けたと思うこと（高校生、複数回答）



※「無回答」は除いて集計した。

《読み取れること・ポイント》

★ 本を読むことについて、小学生・中学生では、一斉読書の時間など、学校で実施されている取組の影響を受けている者が多くなっている。
★ また、小学生では家庭や学校で手の取りやすいところに本が置かれていることが影響している者が比較的多く、これらの環境整備が重要であることがうかがえる。
★ 他方、高校生で月に１冊以上本を読んでいる者は、学校外の場で、書店やメディアを通じて得られる情報に影響を受けている者が比較的多い。
★ このほか、小学生・中学生・高校生のそれぞれについて、友達からの影響を受ける者が相対的に多いことも見て取れる。

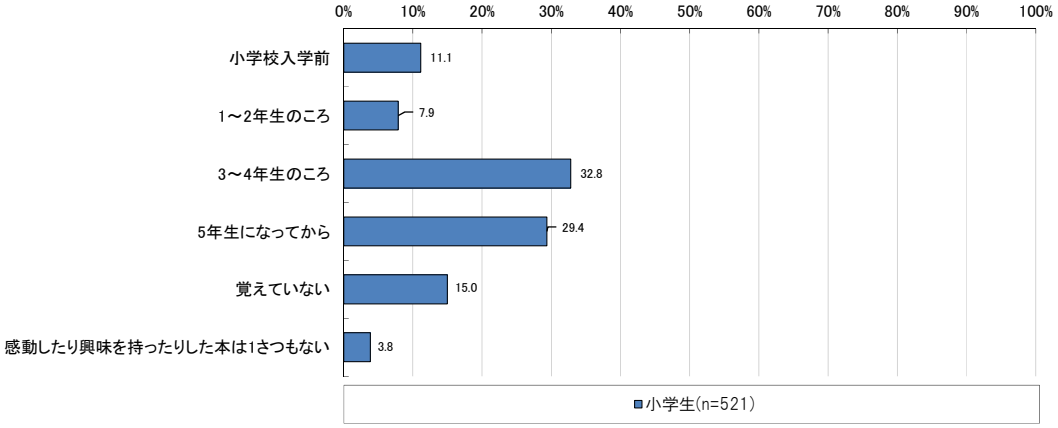
６．一番感動したり興味を持ったりした本を読んだ時期

◇ 小学生・中学生・高校生がそれぞれ一番感動したり興味を持ったりした本は、いつごろ読まれた本なのだろうか？

（１）小学生

- 小学生に対し、一番感動したり、興味を持ったりした本をはじめて読んだのはいつごろかをたずねたところ、最も回答割合が高いのは、「3～4 年生のころ」（32.8%）であった。
- また、次いで回答割合が高いのは、「5 年生になってから」（29.4%）であった。

図表 2-6-1　今まで読んだ本の中で、一番感動したり興味を持ったりした本について、その本をはじめて読んだのはいつごろか（小学生）

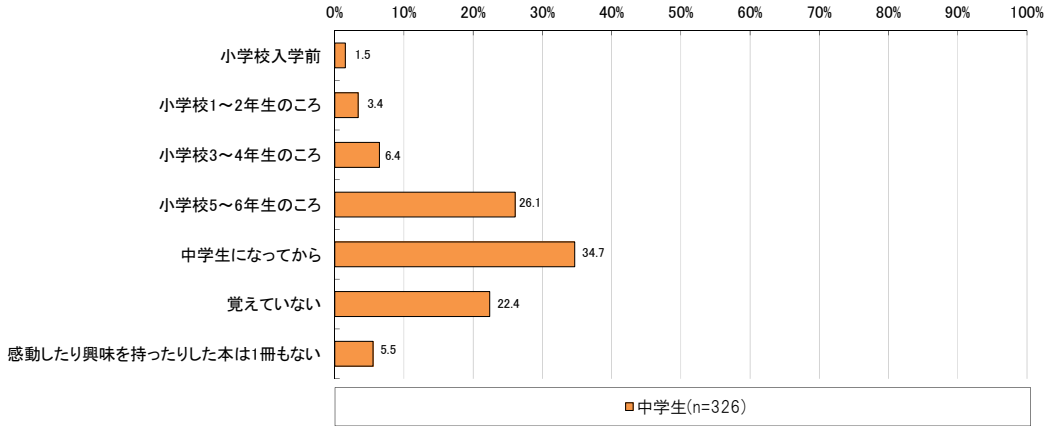


※「無回答」は除いて集計した。

（２）中学生

- 中学生に対し、一番感動したり、興味を持ったりした本をはじめて読んだのはいつごろかをたずねたところ、最も回答割合が高いのは、「中学生になってから」（34.7%）であった。
- また、次いで回答割合が高いのは、「小学校 5~ 6 年生のころ」（26.1%）であった。

図表 2-6-2　今まで読んだ本の中で、一番感動したり興味を持ったりした本について、その本をはじめて読んだのはいつごろか（中学生）

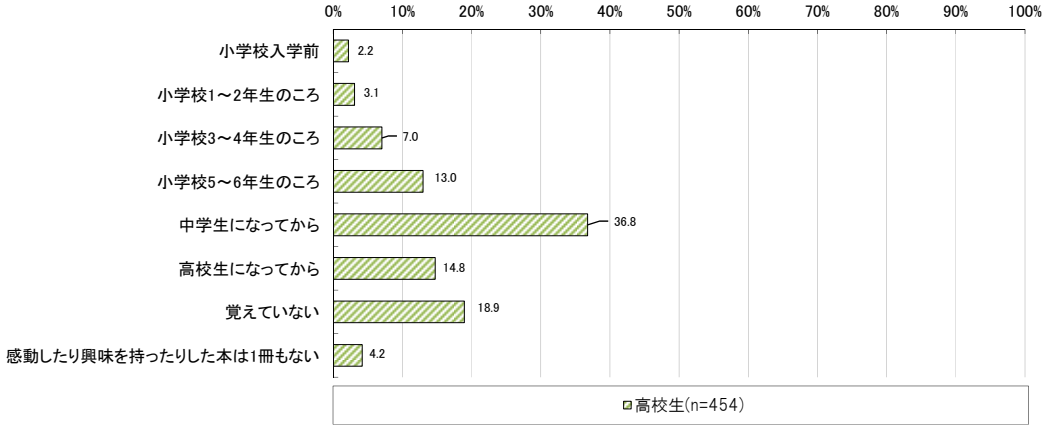


※「無回答」は除いて集計した。

（３）高校生

- 高校生に対し、一番感動したり、興味を持ったりした本をはじめて読んだのはいつごろかをたずねたところ、最も回答割合が高いのは、「中学生になってから」（36.8%）であった。
- また、次いで回答割合が高いのは、「覚えていない」（18.9%）であった。なお、「高校生になってから」の回答割合は１割強であり、「小学校 5~6 年生のころ」とほぼ同程度となっている。

図表 2-6-3　今まで読んだ本の中で、一番感動したり興味を持ったりした本について、その本をはじめて読んだのはいつごろか（高校生）



※「無回答」は除いて集計した。

《読み取れること・ポイント》

★ これまで読んだ本の中で一番感動したり興味を持ったりした本は、現在の学校段階・学年になってから、もしくは、直前の学校段階・学年で読まれていることが多い。
★ 高校生では「高校生になってから」との回答割合は相対的に低く、「中学生になってから」との回答割合が特に高くなっている。

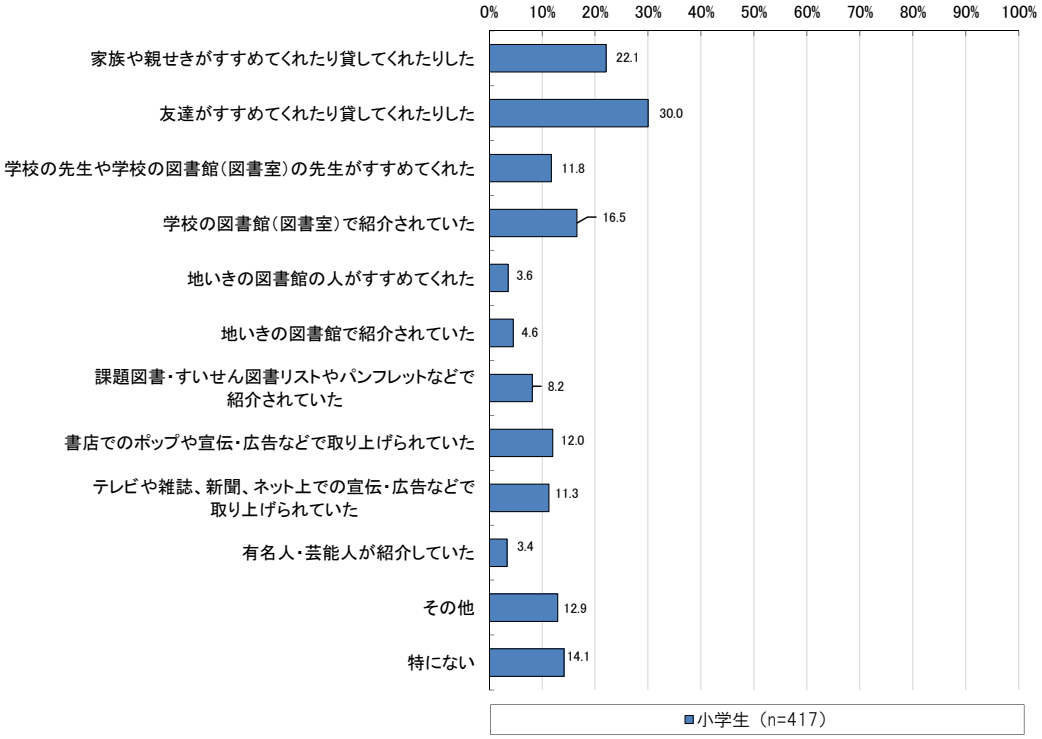
７．一番感動したり興味を持ったりした本について影響を受けていること

◇ 一番感動したり興味を持ったりした本を読むようになったことには、どのようなことが影響しているのだろうか？

（１）小学生

- 小学生に対して、一番感動したり興味を持ったりした本を読むようになったことについて、影響を受けている出来事などをたずねたところ、最も回答割合が高いのは、「友達がすすめてくれたり貸してくれたりした」（30.0%）であった。
- また、次いで回答割合が高いのは、「家族や親せきがすすめてくれたり貸してくれたりした」（22.1%）であり、さらに、「学校の図書館（図書室）で紹介されていた」（16.5%）が続いている。

図表 2-7-1　一番感動したり興味を持ったりした本を読むようになったことについて、影響を受けていると思うこと（小学生、複数回答）

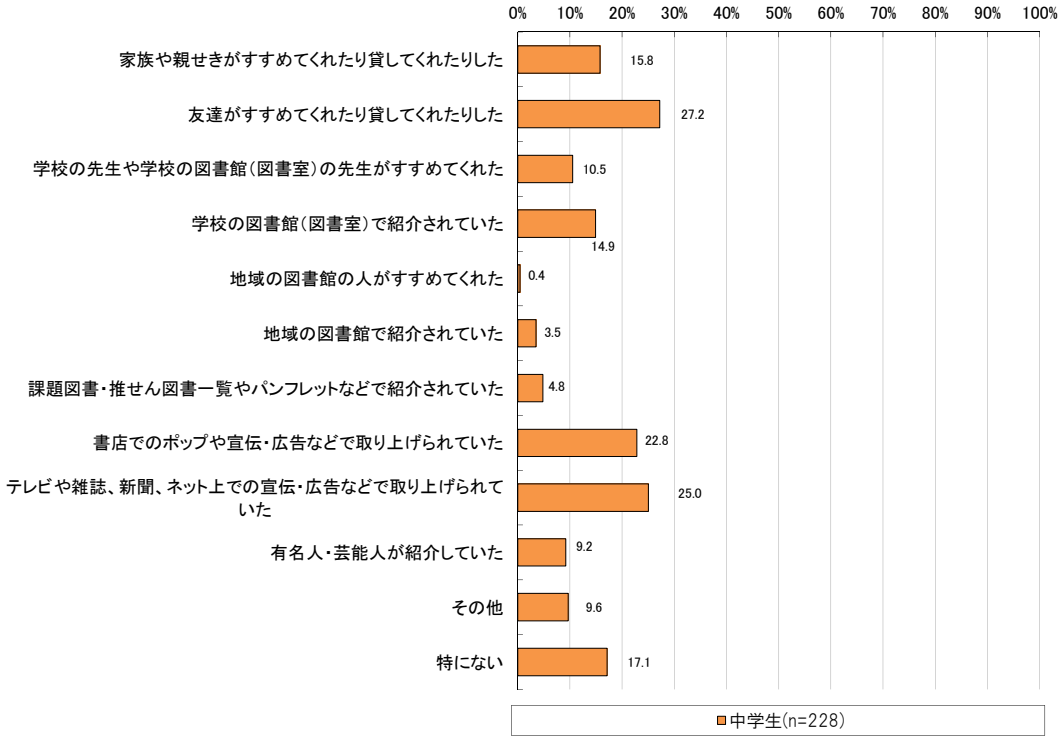


※「無回答」は除いて集計した。

（２）中学生

- 中学生に対して、一番感動したり興味を持ったりした本を読むようになったことについて、影響を受けている出来事などをたずねたところ、最も回答割合が高いのは、「友達がすすめてくれたり貸してくれたりした」（27.2%）であった。
- また、次いで回答割合が高いのは、「テレビや雑誌、新聞、ネット上での宣伝・広告などで取り上げられていた」（25.0%）であり、さらに、「書店でのポップや宣伝・広告などで取り上げられていた」（22.8%）が続いている。

図表 2-7-2　一番感動したり興味を持ったりした本を読むようになったことについて、影響を受けていると思うこと（中学生、複数回答）

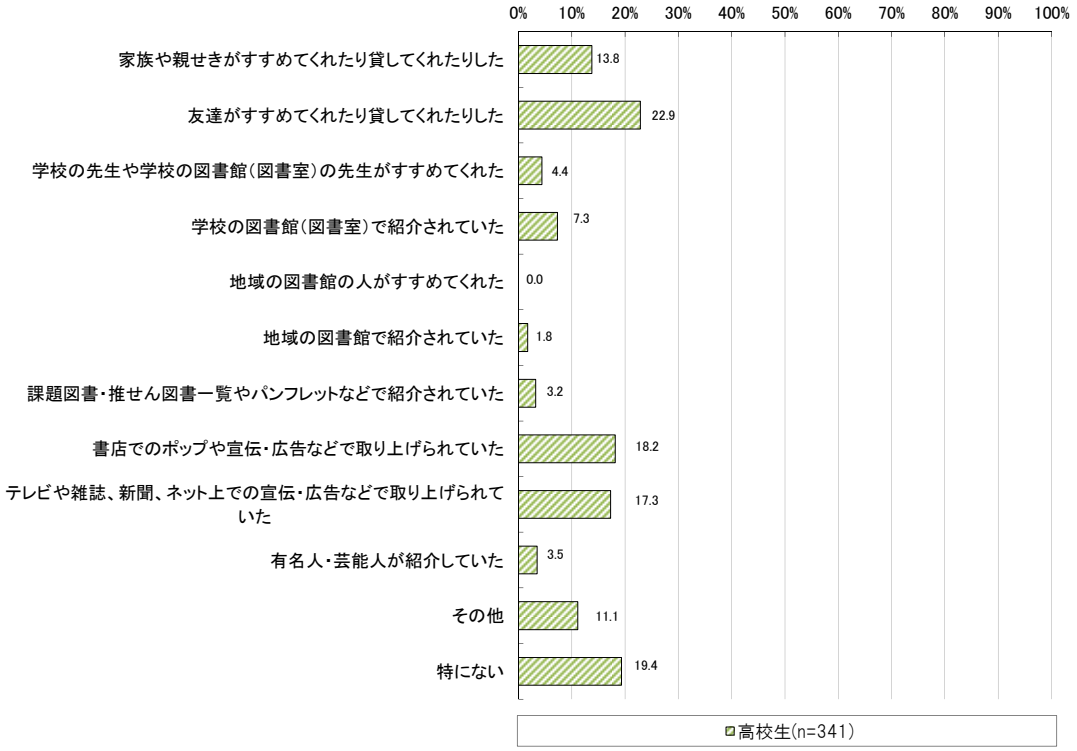


※「無回答」は除いて集計した。

（３）高校生

- 高校生に対して、一番感動したり興味を持ったりした本を読むようになったことについて、影響を受けている出来事などをたずねたところ、最も回答割合が高いのは「友達がすすめてくれたり貸してくれたりした」（22.9%）であった。
- また、次いで回答割合が高いのは、「特にない」（19.4%）であったが、それを除くと、「書店でのポップや宣伝・公告などで取り上げられていた」（18.2%）、「テレビや雑誌、新聞、ネット上での宣伝・広告などで取り上げられていた」（17.3%）が続いている。

図表 2-7-3　一番感動したり興味を持ったりした本を読むようになったことについて、影響を受けていると思うこと（高校生、複数回答）



※「無回答」は除いて集計した。

《読み取れること・ポイント》

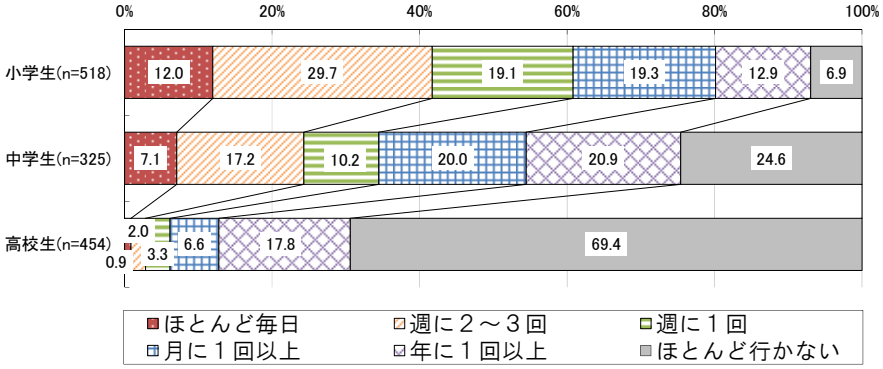
★ 小学生・中学生・高校生ともに、これまでに一番感動したり興味を持ったりした本については、友達がすすめたり貸したりした本であった場合が多くなっている。
★ また、小学生では家族や親せきがすすめたり貸したりした本であった場合や、学校図書館（図書室）で紹介されていた本であった場合も相対的に多い。
★ 中学生や高校生に関しては、書店やメディアで取り上げられていた本であることが多いことがうかがえる。

８．図書館の利用頻度

◇ 小学生・中学生・高校生はどのくらいの頻度で図書館に行っている？

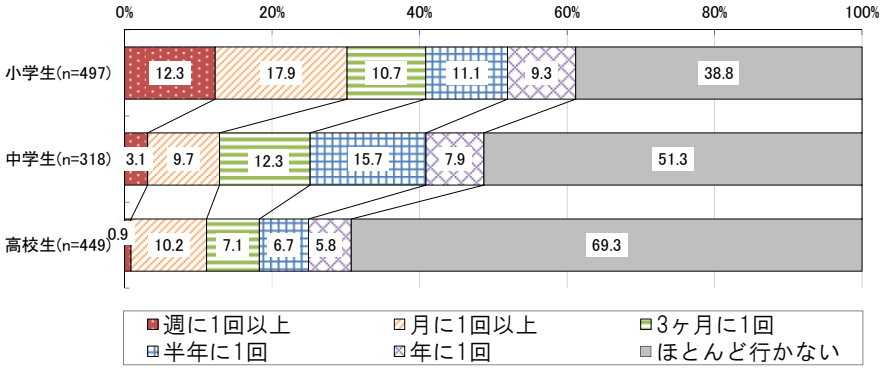
- ふだんどのくらい「学校の図書館（図書室）」に行くかをたずねたところ、最も回答割合が高かったのは、小学生では「週に 2～3 回」（29.7%）で、中学生・高校生では「ほとんど行かない」（それぞれ 24.6%、69.4%）であった。小学生では、週に 1 回以上の頻度で行っている者が約 6 割となっているが、中学生でその割合は 3 割強、高校生では 1 割未満となっている。
- また、「地域の図書館」に関しては、小学生・中学生・高校生ともに「ほとんど行かない」の割合が最も高くなっている（それぞれ 38.8%、51.3%、69.3%[15]）。月に 1 回以上の頻度で行っている者の割合は、小学生で約 3 割、中学生・高校生では約 1 割となっている。

図表 2-8-1　学校図書館（図書室）の利用頻度



※それぞれ、「無回答」は除いて集計した。
※「月に 1 回以上」は、「月に 2～3 回」「月に 1 回」の回答を合わせて集計した。また、「年に 1 回以上」は、「3 ヶ月に 1 回」「半年に 1 回」「年に 1 回」の回答を合わせて集計した。

図表 2-8-2　地域の図書館の利用頻度



※それぞれ、「無回答」は除いて集計した。
※「週に 1 回以上」は、「ほとんど毎日」「週に 2～3 回」「週に 1 回」の回答を合わせて集計した。また、「月に 1 回以上」は、「月に 2～3 回」「月に 1 回」の回答を合わせて集計した。

《読み取れること・ポイント》

★ 小学生では、週に 1 回以上の頻度で学校図書館（図書室）に行く者の割合は 6 割を超えるが、高校生では 1 割未満であり、また、高校生では学校図書館（図書室）、地域の図書館について、約 7 割の者が「ほとんど行かない」状況にある。

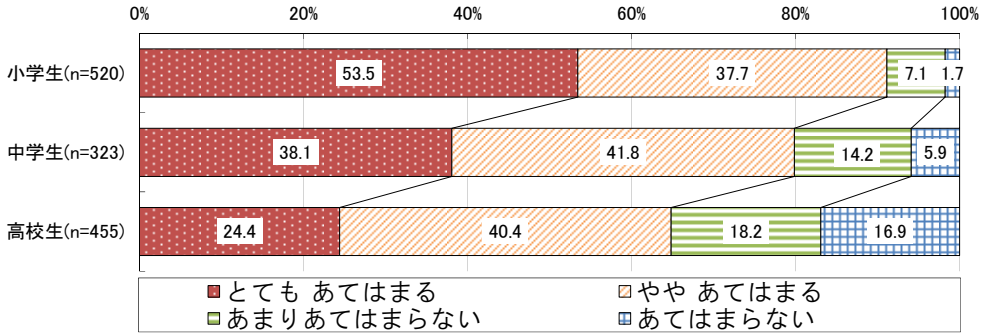
[15] 平成 26 年度「高校生の読書に関する意識等調査」では、「ほとんど利用しない」割合に関し、学校の図書館（図書室）について 62.8%、地域の図書館について 63.0%であった。

９．学校の図書館（図書室）に対する認識

◇ 小学生・中学生・高校生は学校図書館（図書室）についてどのように思っている？

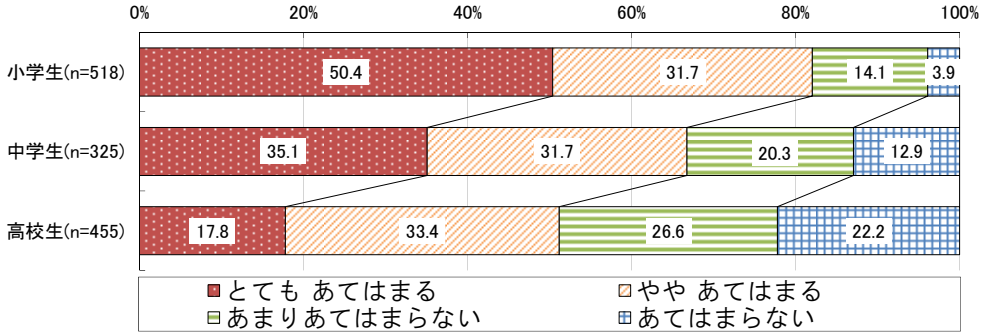
- 学校図書館（図書室）について使いやすいと思うかについてたずねたところ、小学生では「とてもあてはまる」「ややあてはまる」の回答の合計割合が 91.2%、中学生では 79.9%、高校生では 64.8%となっており、高校生において肯定的な回答割合が低くなっている。
- また、学校図書館（図書室）に読みたいと思う本があるかについてたずねたところ、「とてもあてはまる」「ややあてはまる」の回答の合計割合は、小学生では 82.1%、中学生では 66.8%、高校生では 51.2%となっており、この点についても高校生では肯定的な回答割合が低くなっている。

図表 2-9-1　学校の図書館（図書室）は使いやすい



※それぞれ「無回答」を除いて集計した。
※学校図書館（図書室）をほとんど利用していない者も集計対象に含まれる。

図表 2-9-2　学校の図書館（図書室）には読みたいと思う本がある



※それぞれ「無回答」を除いて集計した。
※学校図書館（図書室）をほとんど利用していない者も集計対象に含まれる。

《読み取れること・ポイント》

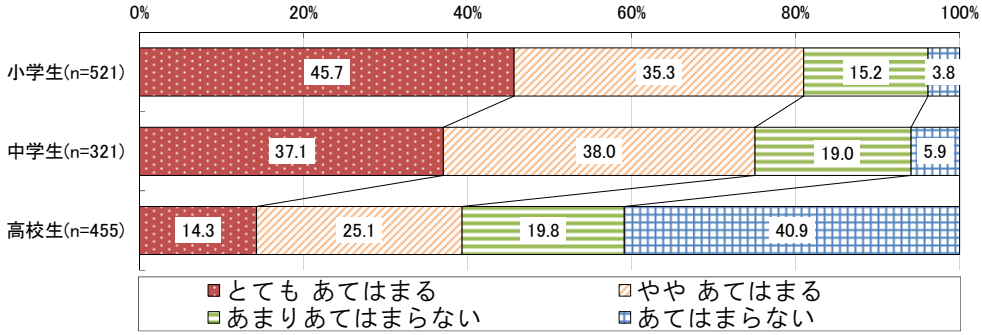
★ 学校図書館（図書室）の使いやすさや蔵書の内容に関する認識として、小学生ではそれぞれ８割以上の者が肯定的な回答をしているが、その割合は学校段階が上がるにつれて低くなっている。

１０．学校での読書活動等に対する認識

◇ 学校内での読書推進に関する活動の状況をどのように認識している？

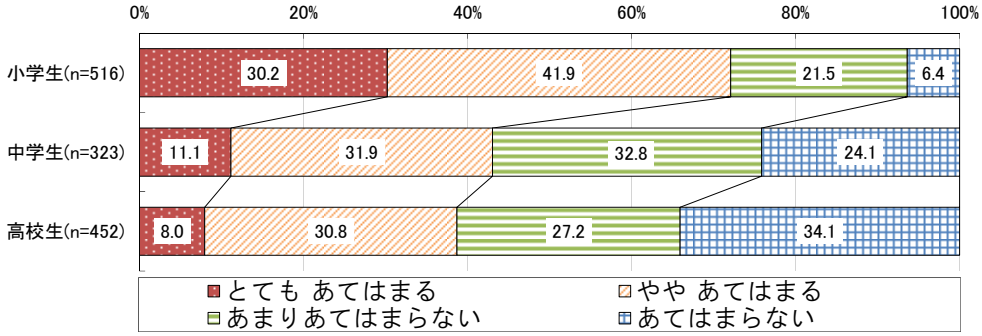
- 一斉読書の時間など、読書に関する活動に力を入れていると思うかについてたずねたところ、「とてもあてはまる」「ややあてはまる」の回答の合計割合が小学生では 81.0%、中学生では 75.1%、高校生では 39.4%となっており、小学生・中学生と高校生との間で違いが大きくなっている。
- また、学校の図書館（図書室）を授業で利用するかについてたずねたところ、「とてもあてはまる」「ややあてはまる」の回答の合計割合が小学生では 72.1%、中学生では 43.0%、高校生では 38.8%であり、この点については小学生と中学生・高校生との間で違いが大きくなっている。

図表 2-10-1　一斉読書の時間など、読書に関する活動に力を入れている



※それぞれ「無回答」を除いて集計した。

図表 2-10-2　学校の図書館（図書室）を授業で利用する



※それぞれ「無回答」を除いて集計した。

《読み取れること・ポイント》

★ 小学校では、一斉読書の時間などの読書に関する活動や、学校図書館（図書室）を活用した授業が比較的よく行われている状況にあることがうかがえる。

★ 中学校では、一斉読書の時間などの読書に関する活動は行われていることが多いが、学校図書館（図書室）を活用した授業についてはあまり行われていない場合のほうが多いことがうかがえる。

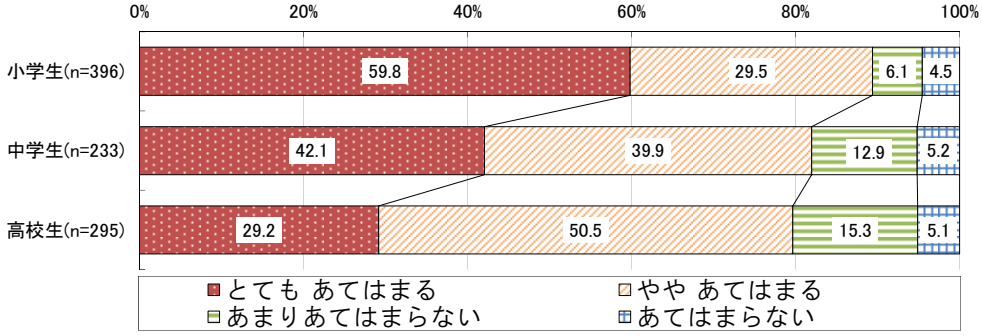
★ 高等学校では、一斉読書の時間などの読書に関する活動、学校図書館（図書室）を活用した授業ともに、あまり行われていない場合の方が多いことがうかがえる。

１１．地域の図書館等に対する認識

◇ 小学生・中学生・高校生は地域の図書館についてどのように思っている？

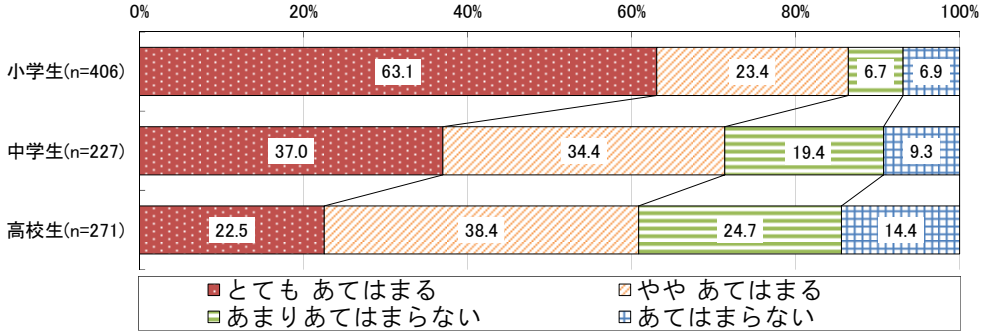
- 地域の図書館について使いやすいと思うかについてたずねたところ、小学生では「とてもあてはまる」「ややあてはまる」の回答の合計割合が 89.3%、中学生では 82.0%、高校生では 79.7%となっており、いずれも 8～9 割程度となっている。
- また、地域の図書館に読みたいと思う本があるかについてたずねたところ、「とてもあてはまる」「ややあてはまる」の回答の合計割合は、小学生では 86.5%、中学生では 71.4%、高校生では 60.9%となっており、高校生では肯定的な回答割合が低くなっている。

図表 2-11-1　地域の図書館は使いやすい



※それぞれ「わからない」「無回答」を除いて集計した。
※地域の図書館をほとんど利用していない者も集計対象に含まれる。

図表 2-11-2　地域の図書館には読みたいと思う本がある



※それぞれ「わからない」「無回答」を除いて集計した。
※地域の図書館をほとんど利用していない者も集計対象に含まれる。

《読み取れること・ポイント》

★ 地域の図書館について、「使いやすさ」については小学生・中学生・高校生のいずれについても 8 割程度が肯定的な回答となっている。
★ 他方で、「読みたいと思う本がある」かどうかについては、学校段階が上がるにつれて肯定的な回答割合は低くなっている。

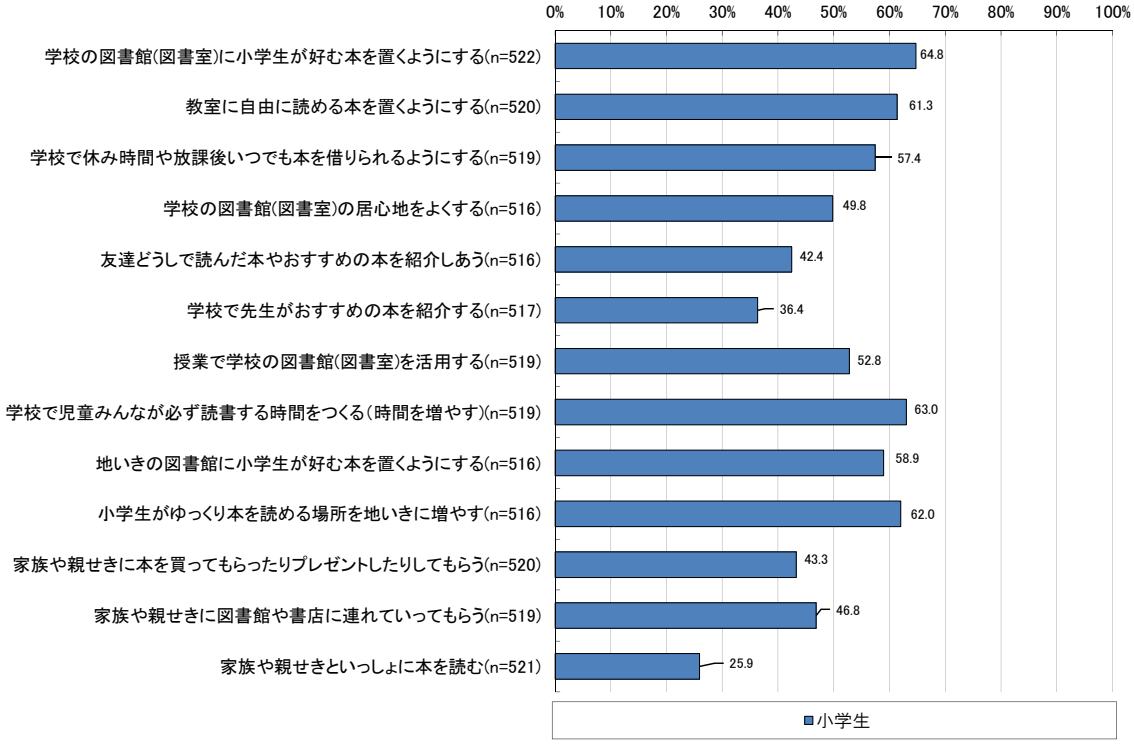
１２．本をもっと読みたくなるようにするために必要・重要と考えること

◇ 小学生・中学生・高校生は、それぞれ、どのようにすればもっと本を読みたくなると思うだろうか？

（１）小学生

- 小学生に対して、どのようにすればもっと本を読みたくなると思うかをたずねたところ、「とてもそう思う」の回答割合が高かったのは、順に「学校の図書館(図書室)に小学生が好む本を置くようにする」（64.8%）、「学校で児童みんなが必ず読書する時間をつくる（時間を増やす）」（63.0%）、「小学生がゆっくり本を読める場所を地いきに増やす」（62.0%）であった。
- このほか、「教室に自由に読める本を置くようにする」についても、6 割以上の回答となっている。

図表 2-12-1　どのようにすればもっと本を読みたくなると思うか（小学生）

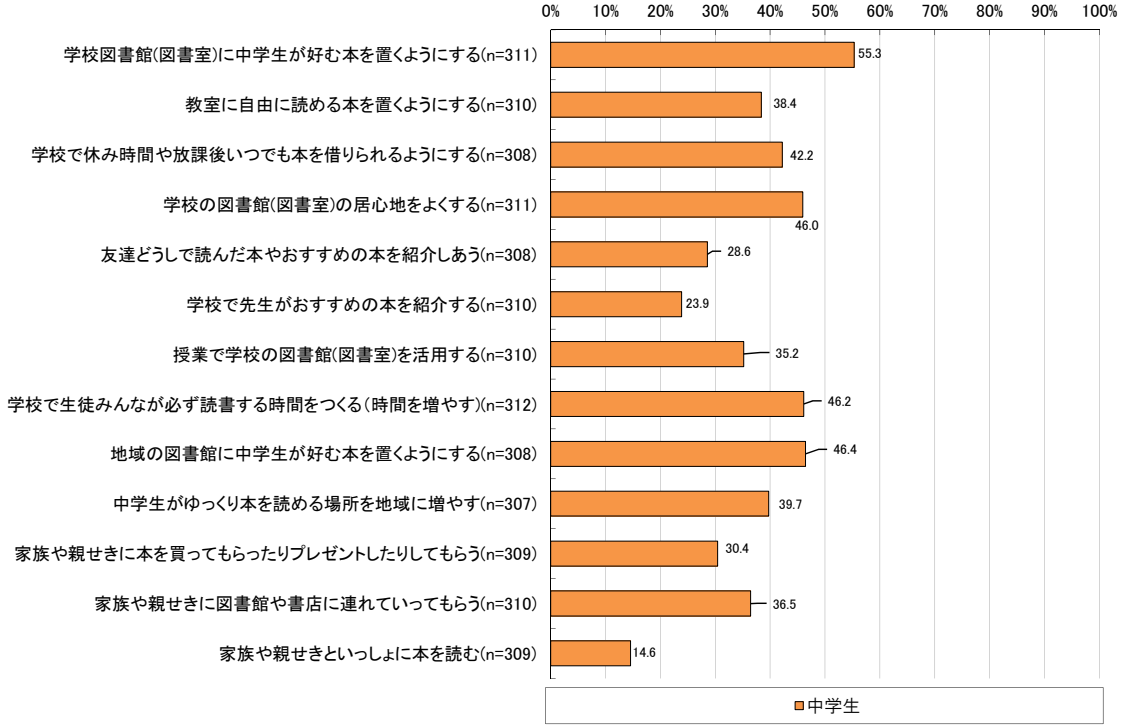


※それぞれ、「無回答」を除いた集計値について、「とてもそう思う」の割合。

（２）中学生

● 中学生に対して、どのようにすればもっと本を読みたくなると思うかをたずねたところ、「とてもそう思う」の回答割合が高かったのは、順に「学校図書館(図書室)に中学生が好む本を置くようにする」（55.3%）、「地域の図書館に中学生が好む本を置くようにする」（46.4%）、「学校で生徒みんなが必ず読書する時間をつくる（時間を増やす）」（46.2%）であった。

図表 2-12-2　どのようにすればもっと本を読みたくなると思うか（中学生）

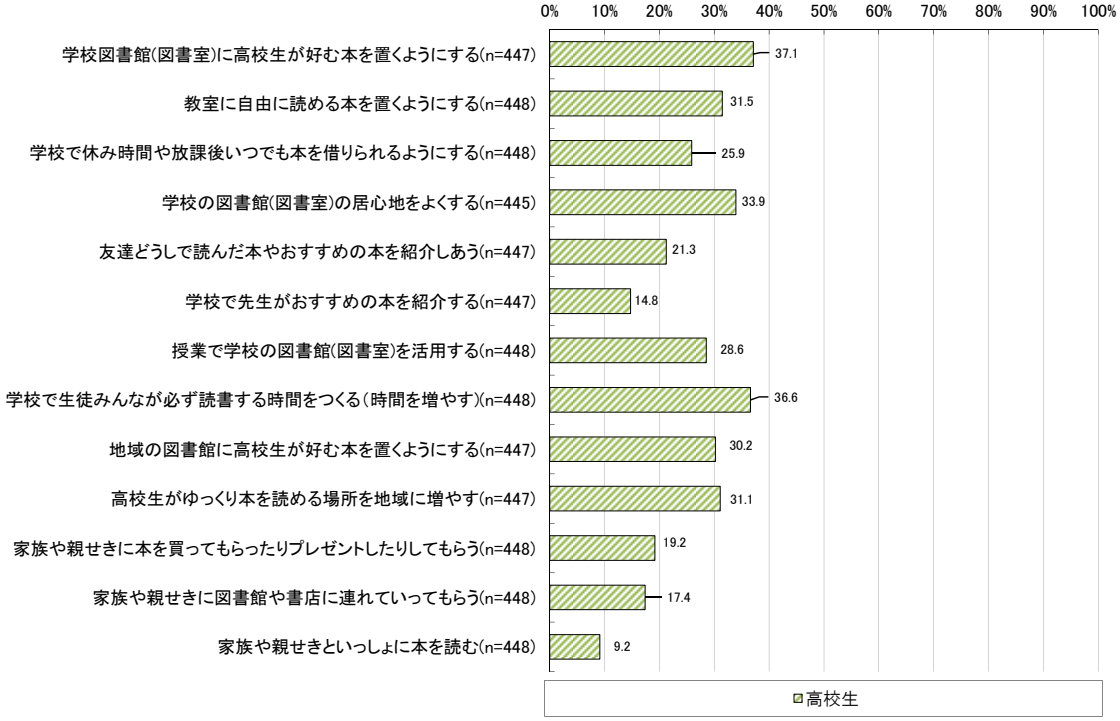


※それぞれ、「無回答」を除いた集計値について、「とてもそう思う」の割合。

（３）高校生

- 高校生に対して、どのようにすればもっと本を読みたくなると思うかをたずねたところ、「とてもそう思う」の回答割合が高かったのは、順に「学校図書館(図書室)に高校生が好む本を置くようにする」(37.1%)、「学校で生徒みんなが必ず読書する時間をつくる(時間を増やす)」(36.6%)、「学校の図書館(図書室)の居心地をよくする」（33.9%）であった[16]。
- なお、いずれの項目についても、「とてもそう思う」の回答割合は、小学生・中学生に比べて低くなっている。

図表 2-12-3　どのようにすればもっと本を読みたくなると思うか（高校生）



※それぞれ、「無回答」を除いた集計値について、「とてもそう思う」の割合。

《読み取れること・ポイント》

★ どのようにすればもっと本を読みたくなると思うかについて、小学生・中学生・高校生ともに、「学校の図書館（図書室）に好む本を置くようにする」「学校でみんなが必ず読書する時間をつくる（時間を増やす）」について、相対的に回答割合が高くなっている。

★ なお、小学生について「小学生がゆっくり本を読める場所を地いきに増やす」、高校生について「学校の図書館(図書室)の居心地をよくする」など、それぞれ、本を読む場所・環境の整備を行うことについても相対的に回答割合が高くなっていることが見て取れる。

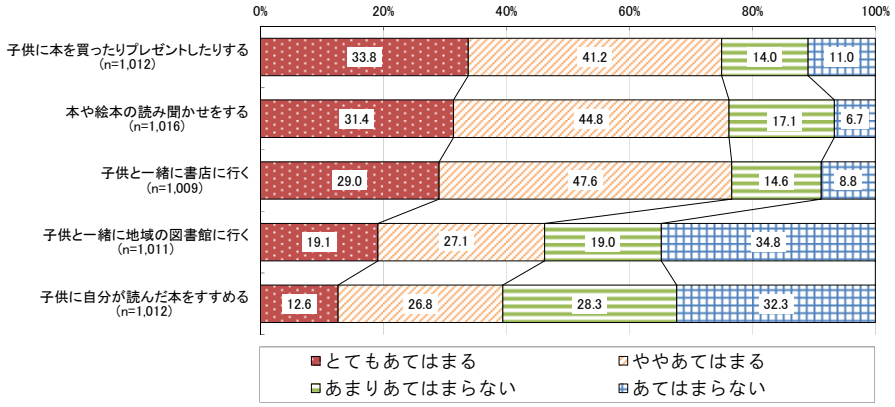
[16] 平成 26 年度「高校生の読書に関する意識等調査」では若干異なる選択肢で調査をしているが、「学校図書館（図書室）に高校生が好む本をもっと置くようにする」について、相対的に回答割合が高くなっている点は共通している。

１３．就学前・小学校低学年段階での家庭での読書に関する取組の状況

◇ 子供が小さいころ、読書について家庭ではどのような取組がどの程度なされていたのだろうか？

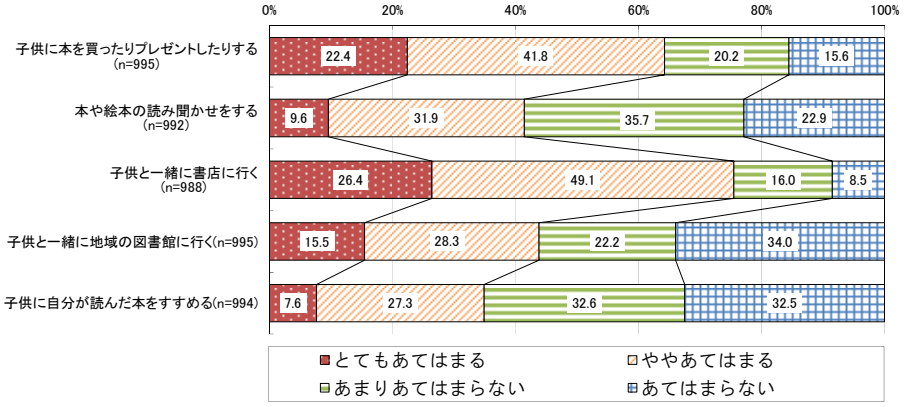
- 家庭での読書に関する取組の状況について、子供が就学前の段階では、「子供に本を買ったりプレゼントしたりする」「本や絵本の読み聞かせをする」「子供と一緒に書店に行く」について、「とてもあてはまる」「まああてはまる」を合わせた回答割合は、それぞれ７割以上となっている。
- なお、子供が小学校低学年（１～3 学年）の段階では、「本や絵本の読み聞かせをする」について、「あてはまる」の回答割合が就学前の段階と比較して低くなっている。

図表 2-13-1　就学前の段階で読書に関する取組をどのくらいしたことがあるか



※それぞれ「無回答」を除いて集計した。
※ここでは、小学生保護者・中学生保護者・高校生保護者を区別せずに集計している。

図表 2-13-2　小学校低学年の段階で読書に関する取組をどのくらいしたことがあるか



※それぞれ「無回答」を除いて集計した。
※ここでは、小学生保護者・中学生保護者・高校生保護者を区別せずに集計している。

《読み取れること・ポイント》

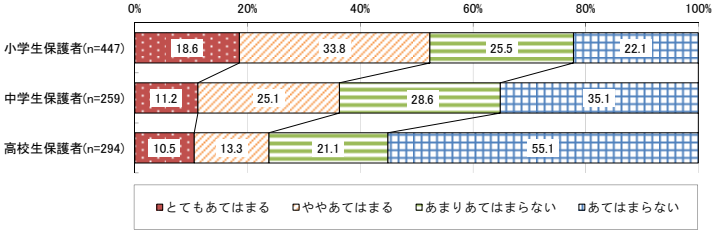
★「本や絵本の読み聞かせ」は、就学前の段階では多くの家庭で行われているが、小学校低学年の段階では行われている家庭の割合は低くなる。
★「子供と一緒に地域の図書館に行く」「子供に自分が読んだ本をすすめる」ことは、就学前の段階でもあまり行われていない家庭のほうが多くなっている。

１４．現在の家庭での読書に関する取組の状況

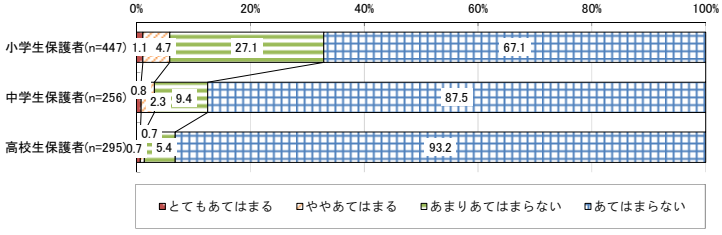
◇ 小学生・中学生・高校生の保護者は、現在読書についてどのような取組をしているのだろうか？

- 小学生・中学生・高校生の保護者が、それぞれ現在子供の読書に関してどのようなことをしているかについてみると、「子供に自分が読んだ本をすすめる」については、「とてもあてはまる」「まああてはまる」を合わせた回答割合について、小学生・中学生・高校生のそれぞれ約 3 割とほぼ同程度の割合となっている。
- 他方で、それ以外の点については、高校生になるにつれて、行われている家庭の割合は低くなっている。

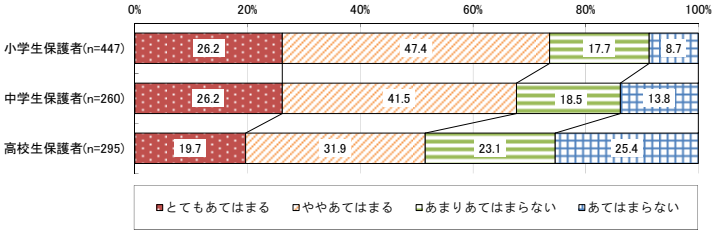
図表 2-14-1　子供に本を買ったりプレゼントしたりする



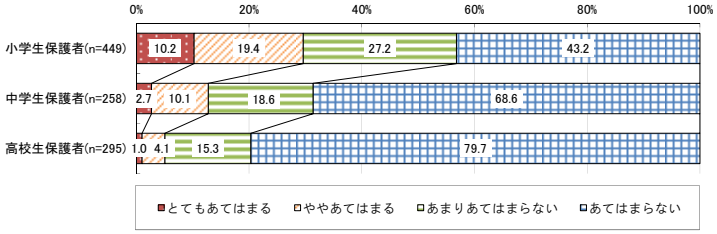
図表 2-14-2　本や絵本の読み聞かせをする



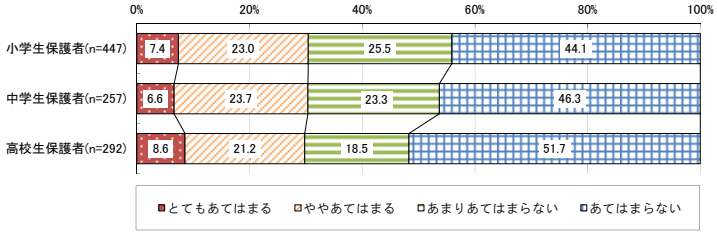
図表 2-14-3　子供と一緒に書店に行く



図表 2-14-4　子供と一緒に地域の図書館に行く



図表 2-14-5　子供に自分が読んだ本をすすめる



※それぞれ、無回答であったものを除く

《読み取れること・ポイント》

★ 子供の成長につれて、家庭における読書に関する取組の実施状況は変化するものと考えられ、特に、「本や絵本の読み聞かせをする」や「子供と一緒に地域の図書館に行く」については、高校生段階では実施されている家庭は非常に少ない。

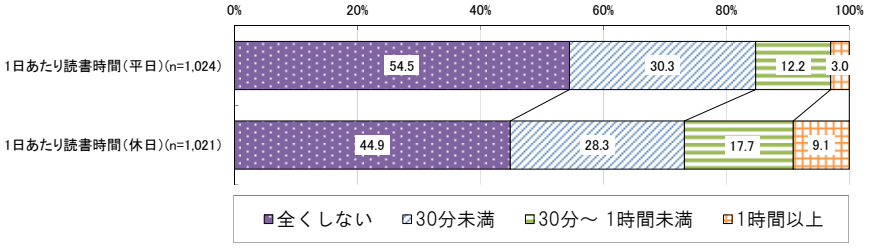
★ 他方、「子供に自分が読んだ本をすすめる」については、小学生・中学生・高校生で実施の状況にそれほど大きな違いが見られない。

１５．保護者の読書習慣、家庭における蔵書数

◇ 読書に関する家庭環境にはどのような違いがあるのだろうか？

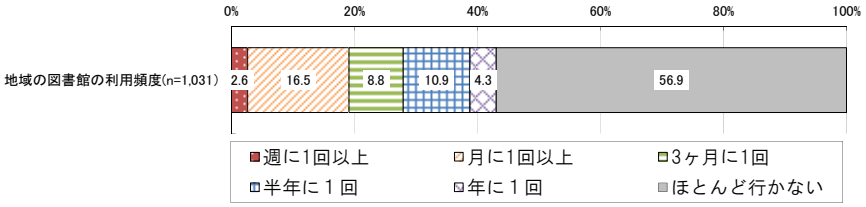
- 保護者自身が 1 日あたりどのくらい本を読むかについて、平日に関しては「全くしない」が 54.5%、休日については 44.9%となっている。
- また、保護者の図書館利用頻度について、「ほとんど行かない」の回答割合は 56.9%である。
- 家庭における蔵書数に関しては、回答が最も多いのは「10 冊～50 冊未満」（42.8%）となっている。なお、「まったくない」「10 冊未満」の回答は合わせて 20.0%であり、他方で、「100 冊～200 冊未満」「200 冊以上」との回答割合も、合わせて約 2 割となっている。

図表 2-15-1　保護者自身の１日あたりの読書時間



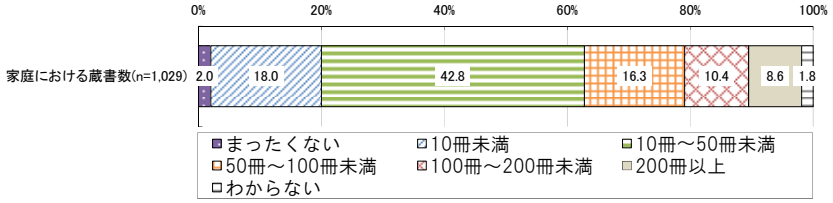
※「無回答」を除いて集計した。
※ここでは、小学生保護者・中学生保護者・高校生保護者を区別せずに集計している。

図表 2-15-2　保護者自身の図書館の利用頻度



※「無回答」を除いて集計した。
※「週に 1 回以上」は、「ほとんど毎日」「週に 2～3 回」「週に 1 回」の回答を合わせて集計した。
　また、「月に 1 回以上」は、「月に 2～3 回」「月に 1 回」の回答を合わせて集計した。
※ここでは、小学生保護者・中学生保護者・高校生保護者を区別せずに集計している。

図表 2-15-3　家庭における蔵書数



※「無回答」を除いて集計した。
※ここでは、小学生保護者・中学生保護者・高校生保護者を区別せずに集計している。

《読み取れること・ポイント》

★ 保護者の読書習慣に関して、約半数は 1 日に全く本を読んでおらず、また、1 年のうち図書館に全く行かない人も半数を超える。
★ 家庭における蔵書についても、比較的蔵書数が多い家庭と少ない家庭とが分かれており、読書に関する家庭環境に差異があることがうかがえる。

１６．子供の読書習慣等の実態・小括

上記、１．～１５．の分析で主に明らかになったことについて、「小学生」「中学生」「高校生」の別に、あらためて次のように整理した。

【小学生】

- ふだん学校のある日に本を全く読まない児童は 1 割未満であり、最近 1 か月で読んだ本が 0 冊の児童の割合も少ない。8 割以上は、1 か月間に 3 冊以上の本を読んでいる。
- 本を読むことについて、一斉読書の時間など読書に関する取組の影響や、家の中の手のとりやすいところに本が置かれていることの影響が比較的大きいと考えられる。
- 学校図書館（図書室）に関しては、週に 1 回以上利用している割合が約 6 割であり、学校図書館（図書室）が使いやすいか、読みたいと思う本があるかについての肯定的な回答割合が、他の学校段階と比較して高い。また、授業で学校の図書館（図書室）が利用されていると感じている割合も高い。
- 小学校低学年では、家庭において本や絵本の読み聞かせが行われている割合が約 4 割となっているが、小学校 5 年生の段階ではほとんど行われていない。
- 学校のない休みの日には本を全く読まない児童が 3 割弱となっており、ふだん学校のある日と比較してその割合が高くなっている。

【中学生】

- ふだん学校のある日に本を全く読まない生徒は 1 割未満であり、小学生と同様、低くなっている。最近 1 か月で読んだ本が 0 冊の生徒の割合は約 1 割で、約半数は 1 か月間に 3 冊以上の本を読んでいる。
- 本を読むことについて、一斉読書の時間など読書に関する取組の影響や、友達がおすすめの本を教えてくれたり貸したりしてくれることの影響が比較的大きいと考えられる。
- これまで一番感動したり、興味を持ったりした本をはじめて読んだのは「中学生になってから」と回答した者の割合が最も高い。
- 学校図書館（図書室）の利用頻度として、週に 1 回以上行っているのは 3 割強、他方で、ほとんど行かない生徒も 2 割強となっている。
- 学校のない休みの日には本を全く読まない生徒が 4 割弱となっており、小学生同様に、ふだん学校のある日と比較してその割合が高くなっている。

【高校生】

- 読書が好きな生徒の割合は６割を超えるが、小学生・中学生と比較するとその割合は低い。
- ふだん学校のある日に本を全く読まない生徒は 5 割強であり、小学生・中学生についてその割合が 1 割未満であったことと比較すると、状況は大きく異なる。ただし、学校のない休みの日には本を全く読まない生徒の割合も 6 割弱であり、ふだん学校のある日の状況とさほど変わらない。
- １か月に読んだ本の冊数が０冊の割合は５割近くとなっている。本を読まない理由としては「ふだん本を読まないから」が最も割合が高いが、「勉強で時間がなかったから」「部活動や生徒会等で時間がなかったから」の回答割合も相対的に高い。
- １か月に１冊以上本を読んでいる者に関して、本を読むことについて影響を与えたものとしては「書店でのポップや宣伝、広告」の回答割合が最も高く、一斉読書など高校で行われている読書に関する取組の影響は相対的に小さくなっている。
- これまで一番感動したり、興味を持ったりした本をはじめて読んだ時期として「高校生になってから」の回答割合は「中学生になってから」との回答と比較して低い。
- 学校図書館（図書室）、地域の図書館ともに、約７割の者は、年間を通じてほとんど利用していない。学校図書館（図書室）が使いやすいか、読みたいと思う本があるかということについての肯定的な回答割合は、小学生・中学生と比較して低い。
- 家庭における読書に関する取組の状況として、保護者と子供が一緒に書店や図書館に行く機会は、小学生や中学生の時と比較して少なくなっている。他方で、「子供に保護者が読んだ本をすすめる」ことは、小学生・中学生とそれほど大きな違いは見られない。

第３章

子供の読書習慣等に関する詳細分析

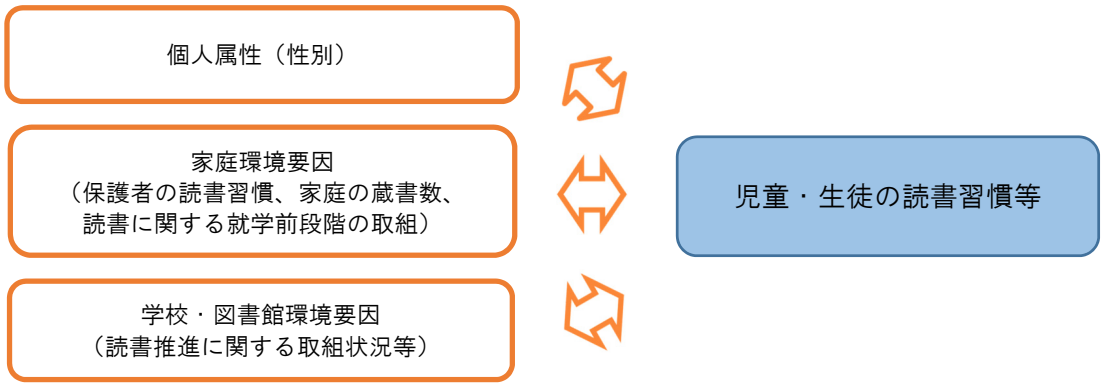
（テーマ別の分析）

第３章　子供の読書習慣等に関する詳細分析（テーマ別の分析）

１．子供の読書習慣等に影響する諸要因に関する分析

（１）分析の枠組み・結果の概要

◇ １か月の読書冊数の多寡や図書館の活用状況等には、どのような要因が影響している？



《分析の結果、読み取れたこと・ポイントのまとめ》

★ 「個人属性（性別）」、「家庭環境要因（保護者の読書習慣、家庭の蔵書数、読書に関する就学前段階の取組）」、「学校・図書館環境要因（学校での読書に関する取組状況等）」の３点に着目し、１か月に読んだ本の冊数（不読率）に関する分析を中心に、子供の読書習慣との関連性についての分析を行った[17]。

★ 小学生に関しては、不読率の値が低いこともあり、諸要因との傾向性が明瞭に見られない点も多いが、女子である場合や、家庭の蔵書数が相対的に多い場合には不読率が低く読書冊数が多い傾向が見られる。また、学校図書館（図書室）が充実している場合や、学校で読書に関する活動に力が入れられている場合などについては、読書冊数が多い傾向が見られる。

★ 中学生に関しても、上記の小学生と同様のことが把握できるほか、保護者の読書習慣の有無や、就学前の読み聞かせの状況などによっても、不読率や読書冊数に違いが見られる。

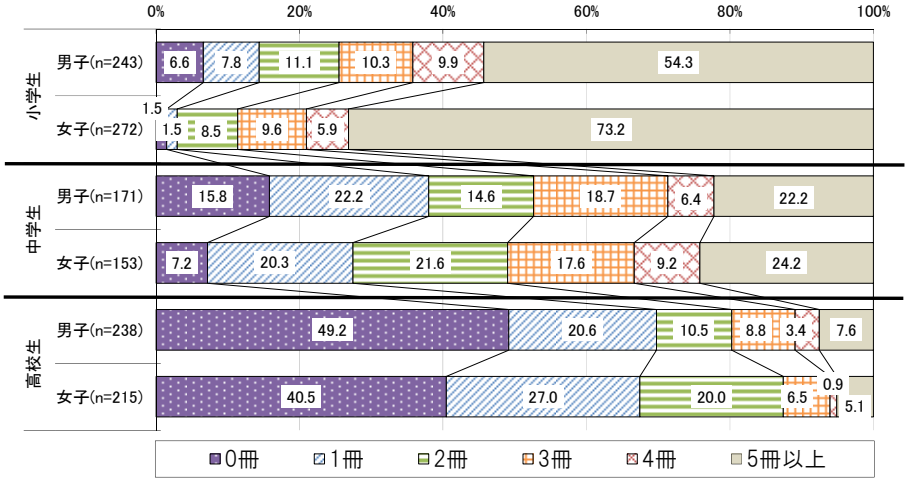
★ 高校生に関しては、保護者の読書習慣等の家庭環境要因、学校で読書推進に関する取組状況等の学校・図書館環境要因に関して、それぞれ不読率との関連性が大きいことがうかがえ、読書に関する取組状況別に分類した学校群の違いで、不読率に 20 ポイント以上の差が見られる場合もある。

[17] 各設問について、「無回答」は除いた上で集計を行った。

（２）個人属性（性別）との関係

- １か月の読書冊数について性別にみると、読んだ本が「0 冊」の割合（不読率）は、小学生・中学生・高校生ともに、女子より男子のほうが高くなっている。
- 他方、高校生に関して、月に 3 冊以上読んでいる者の割合は、男子の方が高い。
- 休日の読書時間や読書が好きかに関しても、小学生・中学生・高校生ともに、男子のほうが否定的な回答割合が高くなっている。

図表 3-1-1　性別と最近 1 か月で読んだ本の冊数との関係



図表 3-1-2　性別と児童・生徒の読書習慣等との関係

着目した点	小学生		中学生		高校生	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
この 1 か月に読んだ本が「0 冊」の割合（不読率）	6.6%	1.5%	15.8%	7.2%	49.2%	40.5%
普段学校がある日に読書を「全くしない」割合	7.3%	5.1%	11.6%	5.9%	53.8%	55.6%
学校がない休みの日に読書を「全くしない」割合	33.2%	20.4%	44.2%	34.9%	59.0%	55.1%
読書が「あまり好きではない」「好きではない」の合計割合	33.5%	14.9%	38.6%	19.3%	39.2%	29.2%

《読み取れること・ポイント》

★ 小学生・中学生・高校生ともに、男子よりも女子のほうが読書好きな者の割合は高く、不読率は低いなど、読書習慣が身についている者が多いことがうかがえる。

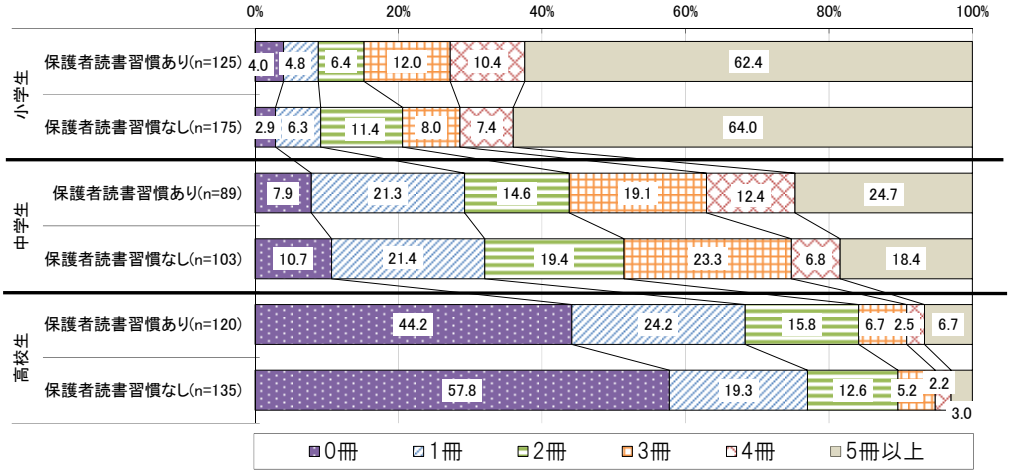
★ 高校生段階では、本を月に 3 冊以上読んでいる者の割合は女子より男子の方が高く、男子のなかでより個人差が大きいのではないかと考えられる。

（３）家庭環境との関係

①保護者の読書習慣との関係

- 保護者が平日に本を読む習慣がある場合と、習慣がない（1 日あたりに「全くしない」）場合とに分類し、子供の読書習慣等との関係性について分析した。
- 児童・生徒の１か月の読書冊数・不読率との関係について、小学生に関しては、保護者の読書習慣の違いによる差異は大きくないことが見て取れる。中学生に関しては、保護者に読書習慣がある場合の方が若干不読率は低く、高校生の場合はその差がより明確に見られる。
- また、小学生・中学生・高校生ともに、学校がない休みの日に読書をしない者の割合について、保護者に読書習慣がない場合のほうが、値が若干高くなっている。

図表 3-1-3　保護者の読書習慣と児童・生徒が最近 1 か月で読んだ本の冊数との関係



図表 3-1-4　保護者の読書習慣と児童・生徒の読書量等との関係

着目した点	小学生		中学生		高校生	
	習慣あり	習慣なし	習慣あり	習慣なし	習慣あり	習慣なし
この 1 か月に読んだ本が「0 冊」の割合（不読率）	4.0%	2.9%	7.9%	10.7%	44.2%	57.8%
普段学校がある日に読書を「全くしない」割合	7.2%	6.2%	11.2%	9.7%	60.3%	64.4%
学校がない休みの日に読書を「全くしない」割合	25.8%	30.9%	35.2%	41.7%	52.1%	59.6%
読書が「あまり好きではない」「好きではない」の合計割合	18.9%	27.6%	30.7%	28.4%	29.2%	33.8%

《読み取れること・ポイント》

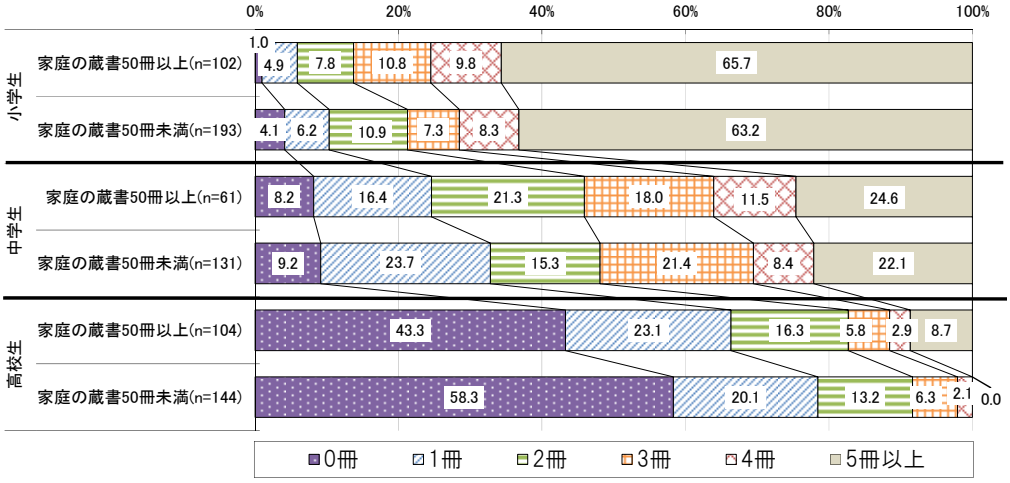
★ 小学生では、1 か月の読書冊数と保護者の読書習慣との関連性はそれほど明確には見られない。ただし、学校がない日に本を読むかについては、関連性がある可能性がある。

★ 高校生に関しては、保護者の読書習慣の違いにより、不読率に 10 ポイント以上の差が見られる。

②家にある本の冊数との関係

- 保護者から回答を得た家庭の蔵書数について、「50 冊未満」と「50 冊以上」に分類し、子供の読書習慣等との関係性について分析した（蔵書数について「わからない」「無回答」は除いて分類した）。
- 児童・生徒の１か月の読書冊数・不読率との関係について、小学生・中学生ともにその差はさほど大きくないが、家庭の蔵書数が 50 冊以上の場合の方が、若干不読率が低く、読書冊数がより多い者の割合が高い傾向があるように見受けられる。高校生に関しては、不読率の差がより明確に見られる。
- また、小学生・中学生・高校生ともに、平日・休日の読書時間や読書が好きかに関して、家庭の蔵書数が 50 冊未満の場合のほうが、それぞれ否定的な回答の割合が若干高くなっている。

図表 3-1-5　家にある本の冊数と最近１か月で読んだ本の冊数との関係



図表 3-1-6　家にある本の冊数と児童・生徒の読書習慣等との関係

着目した点	小学生		中学生		高校生	
	50 冊以上	50 冊未満	50 冊以上	50 冊未満	50 冊以上	50 冊未満
この１か月に読んだ本が「0 冊」の割合（不読率）	1.0%	4.1%	8.2%	9.2%	43.3%	58.3%
普段学校がある日に読書を「全くしない」割合	2.9%	8.7%	1.6%	14.5%	61.5%	64.8%
学校がない休みの日に読書を「全くしない」割合	16.8%	35.2%	29.5%	43.8%	50.5%	60.0%
読書が「あまり好きではない」「好きではない」の合計割合	16.0%	28.3%	26.2%	31.0%	23.3%	37.1%

《読み取れること・ポイント》

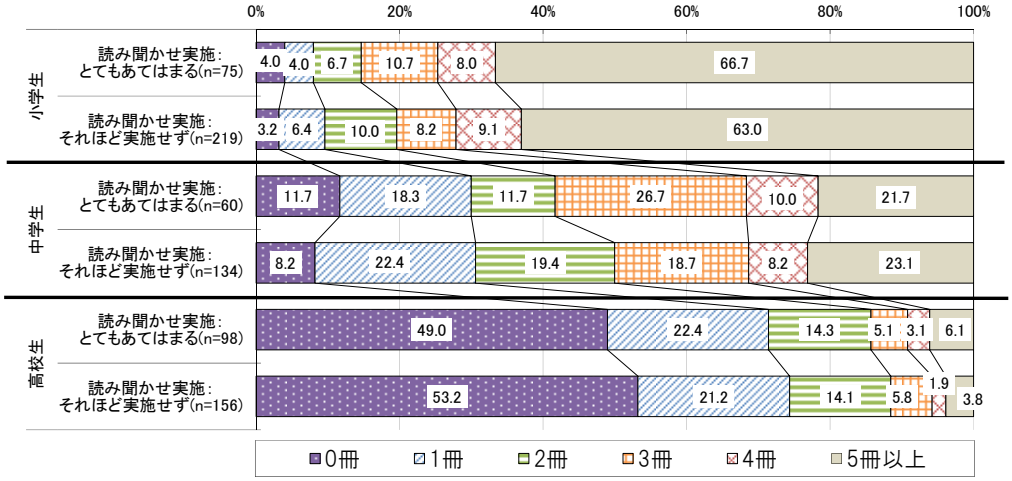
★ 家庭の蔵書数の違いは、児童・生徒の読書習慣等について、様々な点との関連性があるように見受けられる。

★ 家庭の蔵書数別の不読率の差は小学生・中学生では小さいが、高校生ではその差が約 15 ポイントとなっている。

③就学前段階における取組との関係

- 家庭において、就学前の段階で子供に対して本や絵本の読み聞かせをとてもよく実施していた（「とてもあてはまる」）場合と、それほどは実施していなかった（「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」）場合とで分類し、子供の読書習慣等との関係性について分析した。
- 児童・生徒の１か月の読書冊数・不読率との関係について、小学生・中学生では、読み聞かせがよく実施されていた場合のほうが若干不読率は高くなっているが、他方で、1 か月に 3 冊以上本を読んでいる者の割合は、読み聞かせが実施されていた場合の方が高くなっている。高校生では、読み聞かせがよく実施されていた場合の方が、不読率が低い傾向が見られる。
- また、休日に読書をしない者の割合については、小学生・中学生・高校生ともに、読み聞かせがそれほど実施されていなかった場合に否定的な割合が高くなっている。読書が好きかとの関係性については、小学生・中学生で読み聞かせがそれほど実施されていなかった場合に否定的な割合が高くなっている。

図表 3-1-7　就学前段階における読み聞かせの実施と最近 1 か月で読んだ本の冊数との関係



図表 3-1-8　就学前段階における読み聞かせの実施と児童・生徒の読書習慣等との関係

着目した点	小学生		中学生		高校生	
	実施	非実施	実施	非実施	実施	非実施
この１か月に読んだ本が「0 冊」の割合（不読率）	4.0%	3.2%	11.7%	8.2%	49.0%	53.2%
普段学校がある日に読書を「全くしない」割合	7.8%	6.4%	13.3%	9.0%	66.7%	60.3%
学校がない休みの日に読書を「全くしない」割合	18.7%	31.7%	33.3%	40.6%	52.5%	58.0%
読書が「あまり好きではない」「好きではない」の合計割合	15.8%	27.1%	20.3%	33.1%	31.6%	31.8%

《読み取れること・ポイント》

★ 高校生に関して、就学前の段階で家庭において本や絵本の読み聞かせがよく実施されていた場合に不読率が低い傾向が見られる。

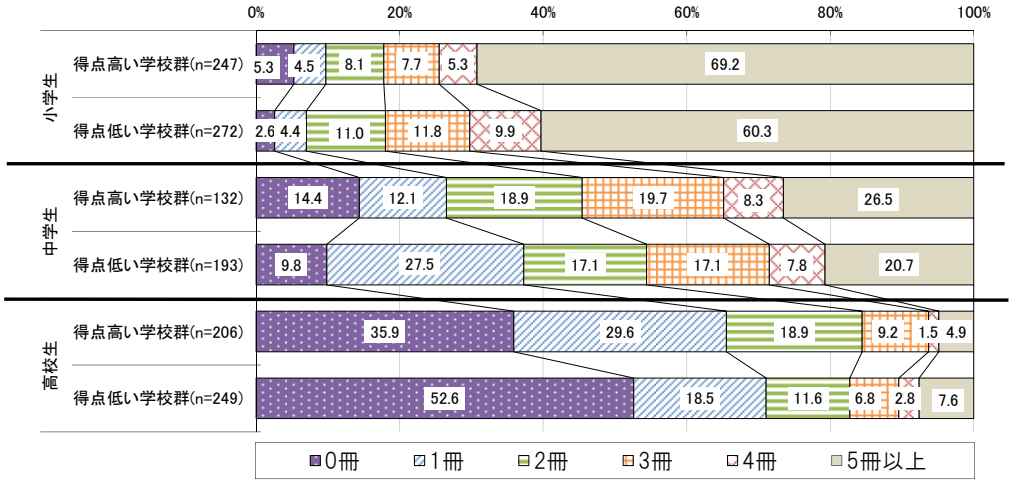
★ また、小学生・中学生・高校生ともに、休日に読書をする者の割合は、就学前の段階で読み聞かせがよく実施されていた家庭の子供の方が高い。

（４）学校・図書館環境との関係

①充実した学校図書館（図書室）であるかとの関係

- 児童・生徒の認識として、学校図書館（図書室）について「使いやすい」、または、「読みたい本がある」と回答された度合いが相対的に高い学校群と、相対的に低い学校群とで分類し[18]、児童・生徒の読書習慣等との関係性について分析した。
- １か月の読書冊数・不読率との関係について、小学生と中学生とでは、学校図書館についての肯定的な回答が高い群の学校で不読率が低くなっているわけではない。ただし、5 冊以上読んでいるなど、多くの冊数を読んでいる者の割合は比較的高くなっている。
- 他方、高校生に関しては、肯定的な回答の得点が高い学校群で不読率が低くなっている。

図表 3-1-9　充実した学校図書館（図書室）であるかと最近 1 か月で読んだ本の冊数との関係



図表 3-1-10　充実した学校図書館（図書室）であるかと児童・生徒の読書量等との関係

着目した点	小学生		中学生		高校生	
	得点高	得点低	得点高	得点低	得点高	得点低
この１か月に読んだ本が「0 冊」の割合（不読率）	5.3%	2.6%	14.4%	9.8%	35.9%	52.6%
普段学校がある日に読書を「全くしない」割合	6.1%	6.5%	12.0%	7.3%	44.4%	63.1%
学校がない休みの日に読書を「全くしない」割合	22.1%	30.5%	26.5%	48.7%	56.0%	58.1%
読書が「あまり好きではない」「好きではない」の合計割合	14.6%	31.8%	22.3%	34.4%	31.8%	36.6%

《読み取れること・ポイント》

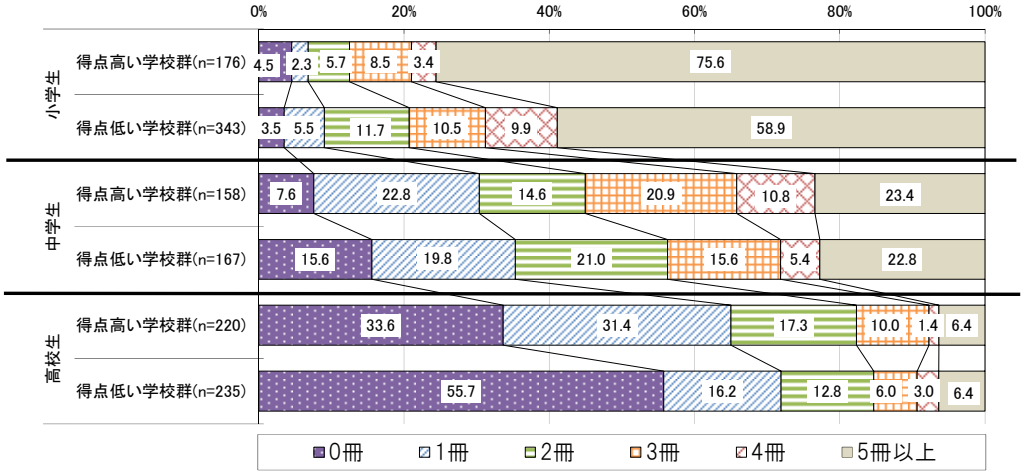
★ 学校図書館（図書室）が充実していることは、小学生や中学生に関しては不読率という点ではなく、読書の量（冊数）と関連している可能性がある。
★ 高校生に関しては、不読率について 15 ポイント以上の差が見られる。

[18] それぞれ、「とてもあてはまる」を 4 点、「ややあてはまる」を 3 点、「あまりあてはまらない」を 2 点、「あてはまらない」を 1 点とし、小学校・中学校・高等学校のそれぞれ、平均点が相対的に高い学校 6 校と、低い学校 6 校とに分類した。なお、小学校・中学校・高等学校ともに、結果として、「使いやすい」の得点が高い学校群と、「読みたい本がある」の得点が高い学校群は、同一であった。

②一斉読書の時間など、読書に関する活動状況との関係

- 児童・生徒の認識として、学校が一斉読書の時間など、読書に関する活動に力を入れていると思うかについて、肯定的な回答の得点が相対的に高い学校群と、低い学校群とで分類し[19]、児童・生徒の読書習慣等との関係性について分析した。
- 児童・生徒の１か月の読書冊数・不読率との関係について、小学生については、学校での読書に関する活動状況について肯定的な回答の得点が高い学校群で不読率が低くなっているわけではないが、比較的多くの冊数を読んでいる者の割合が高くなっている。中学生・高校生については、肯定的な回答の得点が相対的に高い学校群で不読率が低くなっている。
- 高校生について学校での読書に関する活動状況について肯定的な回答の得点が高い学校群では、平日には本を読んでいるが、休日には本を読まない者の割合が高いという結果も見られる。

図表 3-1-11　一斉読書の時間など、読書に関する活動状況と最近１か月で読んだ本の冊数との関係



図表 3-1-12　一斉読書の時間など、読書に関する活動状況と児童・生徒の読書量等との関係

着目した点	小学生		中学生		高校生	
	得点高	得点低	得点高	得点低	得点高	得点低
この１か月に読んだ本が「0 冊」の割合（不読率）	4.5%	3.5%	7.6%	15.6%	33.6%	55.7%
普段学校がある日に読書を「全くしない」割合	5.7%	6.6%	4.4%	13.7%	32.3%	75.4%
学校がない休みの日に読書を「全くしない」割合	23.8%	28.0%	38.0%	41.3%	60.7%	53.8%
読書が「あまり好きではない」「好きではない」の合計割合	19.3%	26.0%	23.6%	35.2%	38.9%	30.3%

《読み取れること・ポイント》

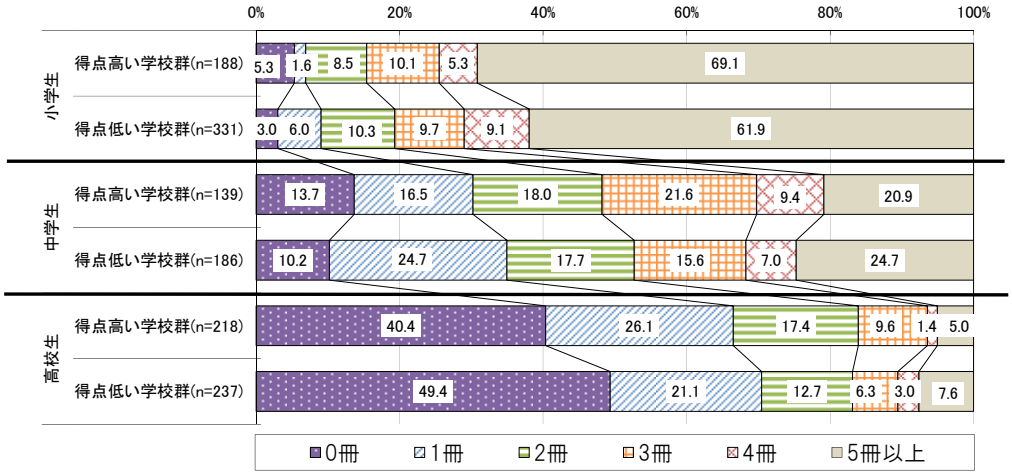
★ 読書に関する活動に力が入れられている学校では、その成果として児童・生徒の読書冊数が多く、また、不読率が低いという関連性が見られる可能性がある。
★ 高校生に関しては、不読率について 20 ポイント以上の差が見られる。

[19] 「とてもあてはまる」を４点、「ややあてはまる」を３点、「あまりあてはまらない」を２点、「あてはまらない」を１点とし、小学校・中学校・高等学校のそれぞれ、平均点が相対的に高い学校６校と、低い学校６校とに分類した。

③学校図書館（図書室）の授業での活用状況との関係

- 児童・生徒の認識として、学校図書館（図書室）が授業で利用されているかについて肯定的な回答割合が相対的に高い学校群と、低い学校群とで分類し[20]、児童・生徒の読書習慣等との関係性について分析した。
- 児童・生徒の１か月の読書冊数・不読率との関係について、小学生では学校図書館（図書室）の授業での活用状況について肯定的な回答の得点が高い学校群で、比較的多くの冊数を読んでいる者の割合が高くなっているが、不読率が低いというわけではない。
- また、中学生では肯定的な回答の得点が高い学校群で、読まれている本の冊数が必ずしも多いというわけではなく、読書冊数・不読率との関係性については学校種別により一様ではない。高校生については、得点が高い学校群で不読率が低くなっている。

図表 3-1-13　学校図書館（図書室）の授業での活用状況と最近１か月で読んだ本の冊数との関係



図表 3-1-14　学校図書館（図書室）の授業での活用状況と児童・生徒の読書量等との関係

着目した点	小学生		中学生		高校生	
	得点高	得点低	得点高	得点低	得点高	得点低
この１か月に読んだ本が「0 冊」の割合（不読率）	5.3%	3.0%	13.7%	10.2%	40.4%	49.4%
普段学校がある日に読書を「全くしない」割合	8.3%	5.1%	13.6%	5.9%	49.8%	59.1%
学校がない休みの日に読書を「全くしない」割合	26.7%	26.5%	30.4%	46.5%	61.2%	53.4%
読書が「あまり好きではない」「好きではない」の合計割合	24.7%	23.1%	27.3%	31.1%	35.8%	33.2%

《読み取れること・ポイント》

★ 学校図書館（図書室）が授業で利用されているかどうかと、小学生・中学生の読書冊数・不読率との関連性は必ずしも明瞭には見られない。
★ 高校生に関しては、不読率について約 10 ポイントの差が見られる。

[20] 「とてもあてはまる」を 4 点、「ややあてはまる」を 3 点、「あまりあてはまらない」を 2 点、「あてはまらない」を 1 点とし、小学校・中学校・高等学校のそれぞれを、平均点が相対的に高い学校 6 校と、低い学校 6 校とに分類した。

２．本を読むきっかけとなりうる出来事等に関する分析

（１）分析の枠組み・結果の概要

◇ 小学生・中学生・高校生は、それぞれどのようなことに影響を受けて本を読んでいるのだろうか？

《分析の結果、読み取れたこと・ポイントのまとめ》

★ １か月に１冊以上本を読んでいる者に関し、「個人属性（性別）」、「家庭環境要因（保護者の読書習慣、家庭の蔵書数、読書に関する就学前段階の取組）」、「学校・図書館環境要因（学校での読書に関する取組状況等）」、ならびに、「児童・生徒の読書習慣等」として、「読書量」「平日・休日の読書時間」の別に、本を読むことに影響を受けたと考える出来事の内容との関係について分析した[21]。

★ 性別の違いに関しては、小学生・中学生では、女子は男子と比べ「友達がおすすめの本を教えてくれたり貸したりしてくれたこと」の回答割合が特に高いなど、本を読むにあたり影響を受ける出来事等が性別により異なる可能性がある。

★ また、家庭環境要因や、学校・図書館環境要因別の分析からは、それぞれ、取組等が実施されている場合の児童・生徒では、関連する点について、「影響を受けたと思う」との回答割合が高くなっていることがうかがえる。

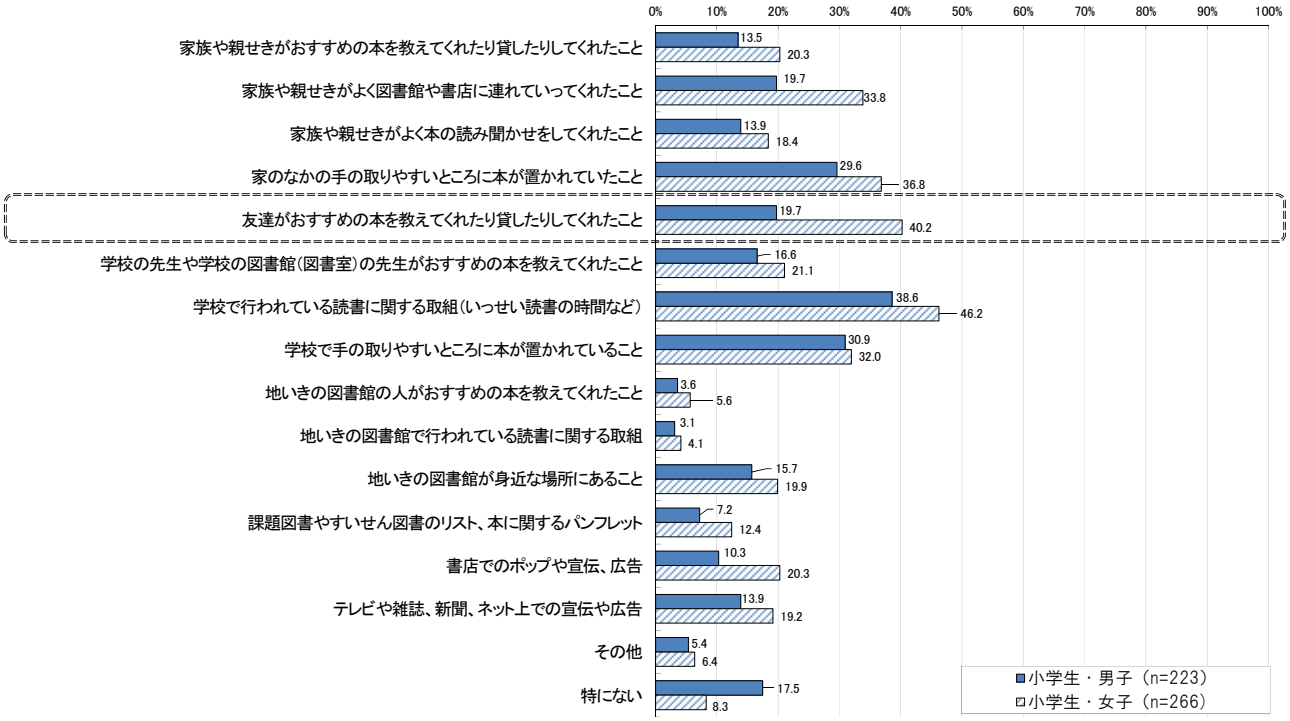
★ また、読書習慣との関係性について、読書量が相対的に少ない児童・生徒や、「平日は本を読むが休日は読まない」児童・生徒に関しては、一斉読書の時間など、学校で行われている読書に関する取組が、本を読むことに関して及ぼしている影響が比較的大きいのではないかと考えられる。

[21] 各設問について、「無回答」は除いた上で集計を行った。

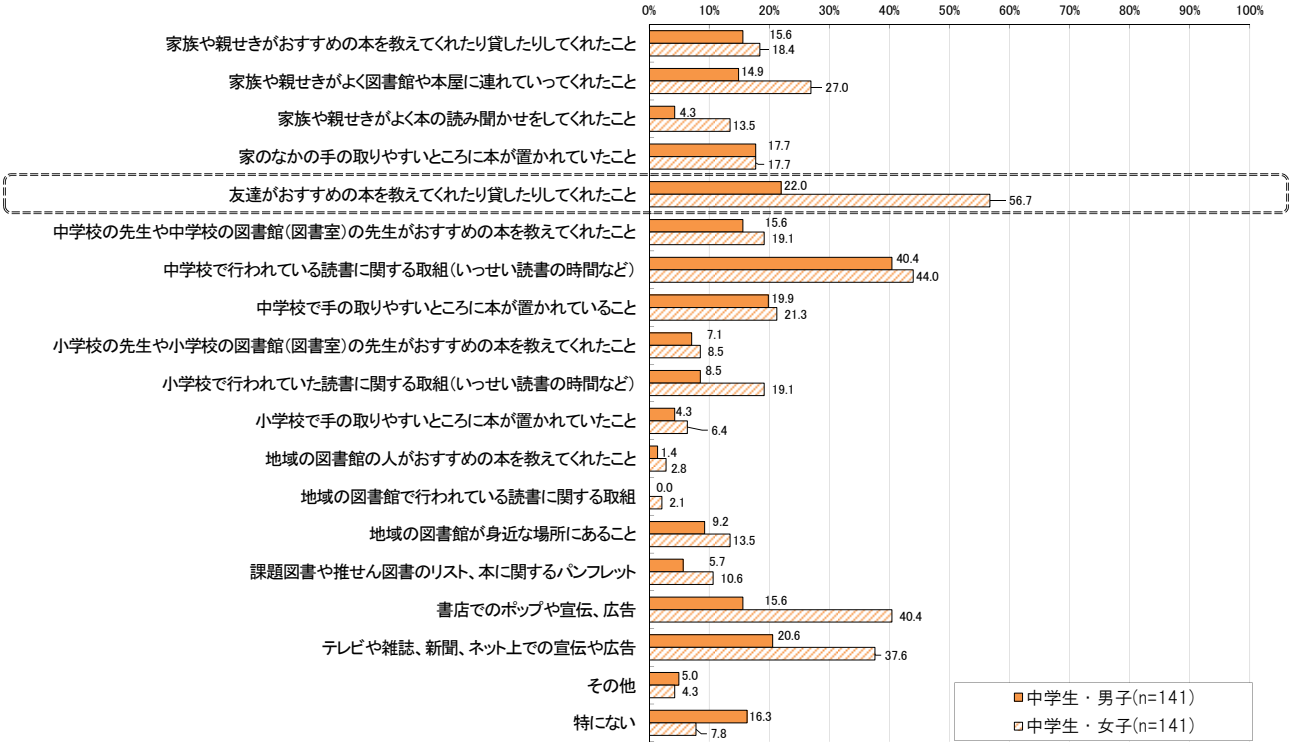
（２）個人属性別（性別）の特徴

- 本を読むことについてこれまでに影響を受けたと思う出来事等について性別にみると、小学生・中学生では、「友達がおすすめの本を教えてくれたり貸したりしてくれたこと」の回答について、男子と女子との差が大きく、女子において回答割合が高くなっている。
- また、小学生・中学生に関して、「家族や親せきがよく図書館や書店に連れて行ってくれたこと」や、「書店でのポップや宣伝、広告」「テレビや雑誌、新聞、ネット上での宣伝や広告」等に関しても、男子に比べ女子において回答割合が高い傾向が見られる。
- 高校生については、「友達がおすすめの本を教えてくれたり貸したりしてくれたこと」の回答割合は男子と比較して女子で若干高いが、小学生・中学生のような大きな差は見られず、他の項目に関しても、男子と女子とでほぼ同様の回答結果となっている。

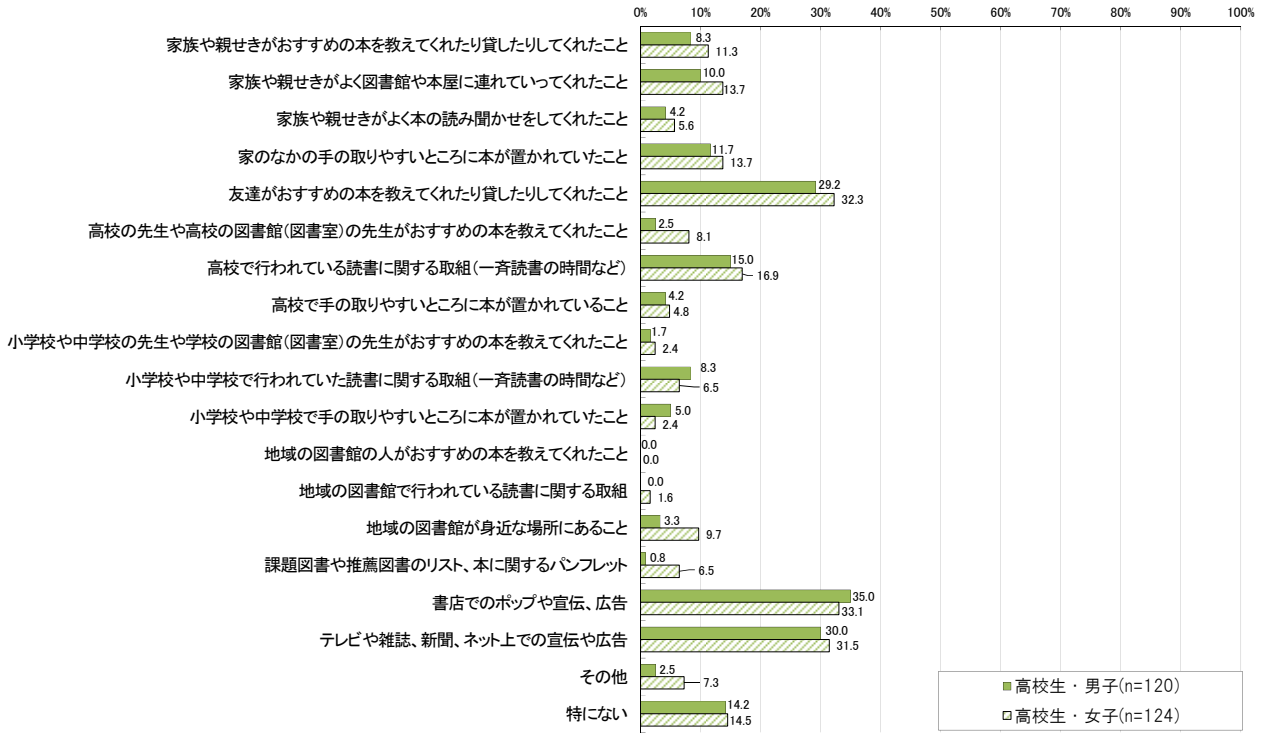
図表 3-2-1　性別と本を読むことについて影響を受けたと思う出来事等との関係（小学生、複数回答）



図表 3-2-2　性別と本を読むことについて影響を受けたと思う出来事等との関係（中学生、複数回答）



図表 3-2-3　性別と本を読むことについて影響を受けたと思う出来事等との関係（高校生、複数回答）



《読み取れること・ポイント》

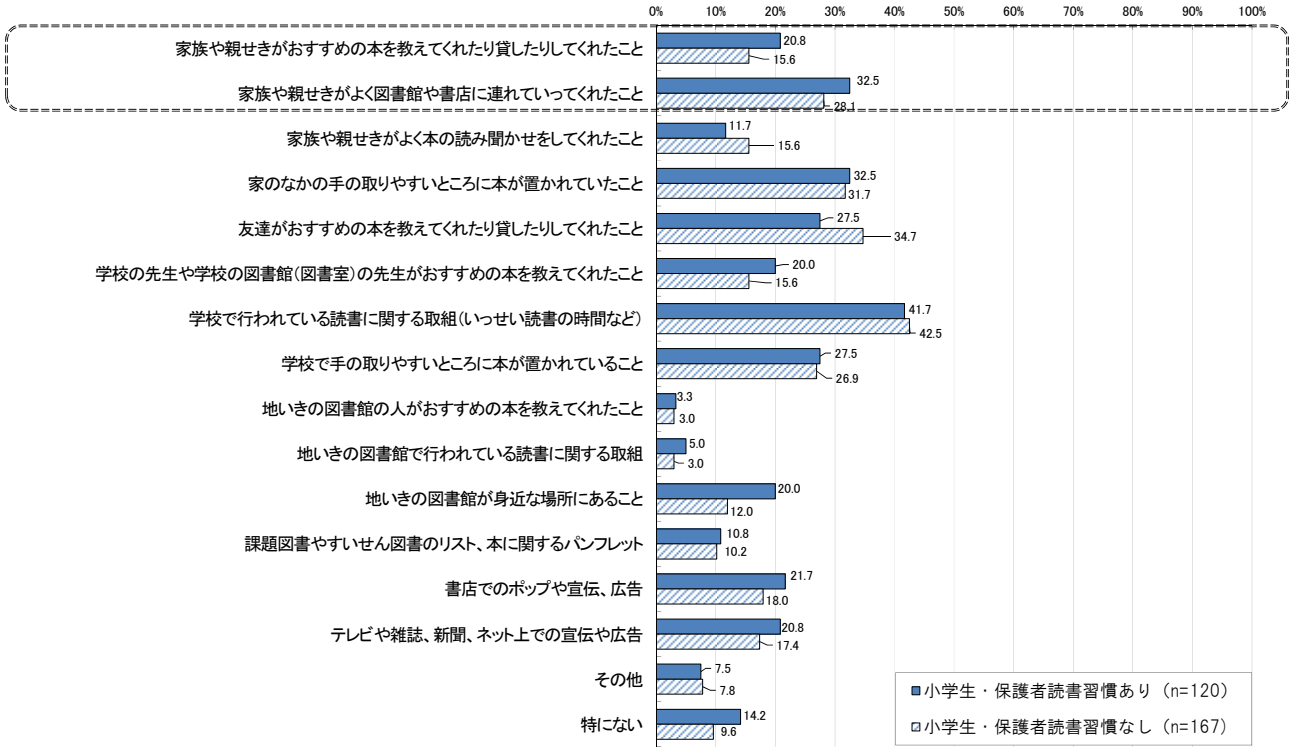
★ 小学生・中学生では、女子は男子と比べ「友達がおすすめの本を教えてくれたり貸したりしてくれたこと」の回答割合が特に高いなど、本を読むにあたり影響を受ける出来事等が性別により異なる可能性がある。

（３）家庭環境要因別の特徴

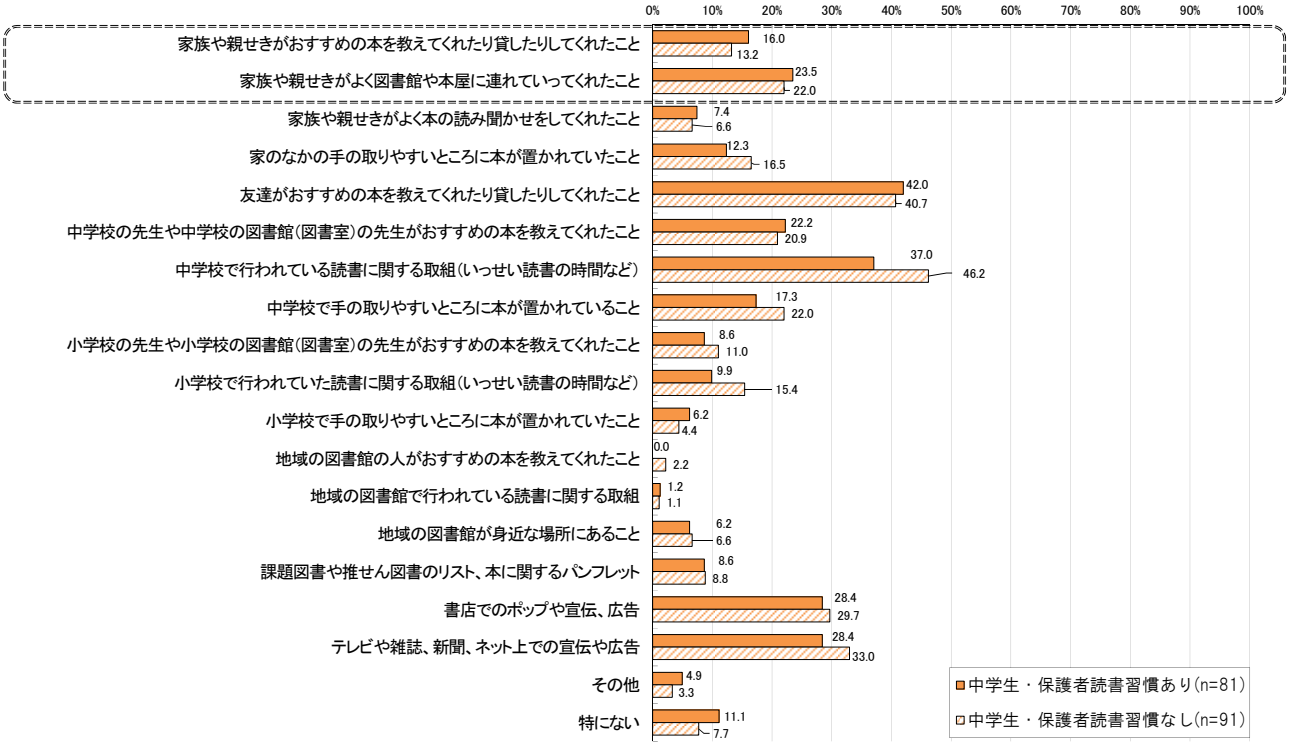
①保護者の読書習慣との関係

- 本を読むことについてこれまでに影響を受けたと思う出来事等について、保護者が平日に本を読む習慣がある場合と、習慣がない（1 日あたりに「全くしない」）場合とに分類してみると、小学生・中学生・高校生のいずれについても、保護者に読書習慣がある場合に、「家族や親せきがおすすめの本を教えてくれたり貸したりしてくれたこと」「家族や親せきがよく図書館や書店に連れていってくれたこと」について、それぞれ回答割合が若干高くなっている。
- なお、保護者に読書習慣がない場合、小学生・中学生では、「学校で行われている読書に関する取組（いっせい読書の時間など）」「中学校で行われている読書に関する取組（いっせい読書の時間など）」の回答割合が比較的高くなっている。

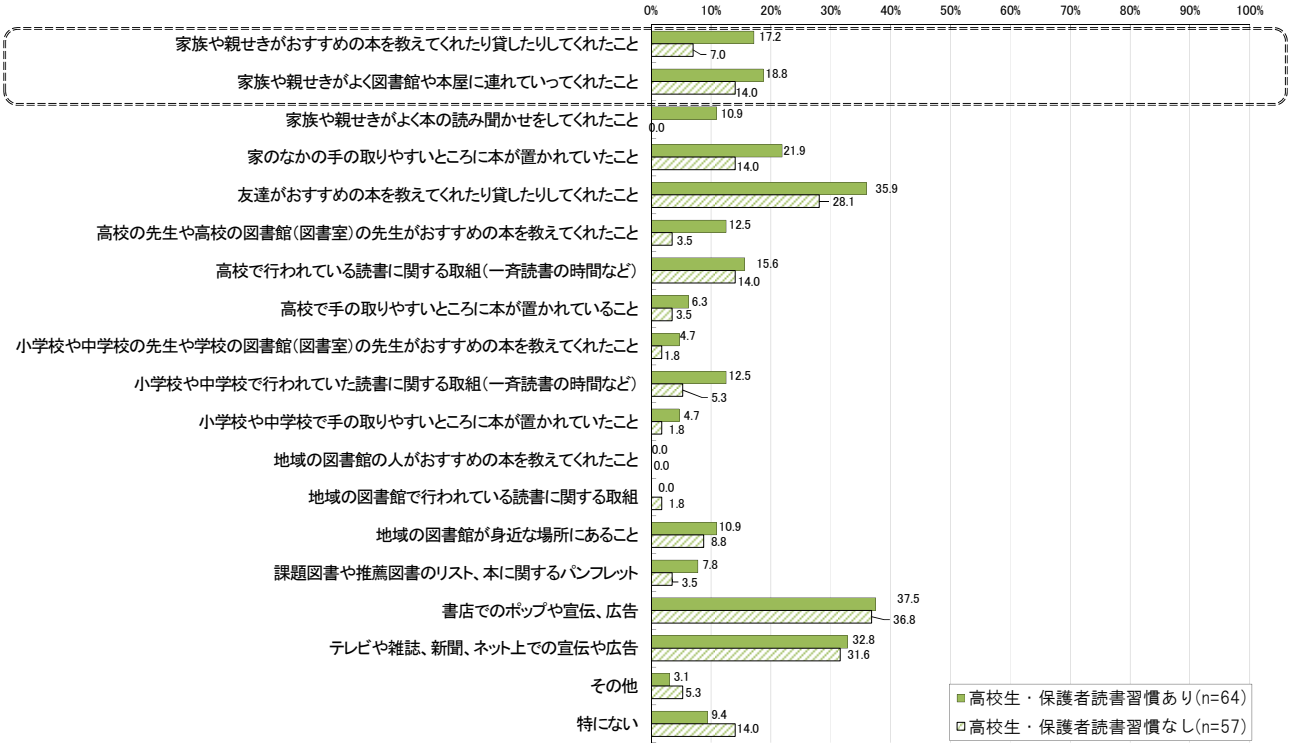
図表 3-2-4　保護者の読書習慣と本を読むことについて影響を受けたと思う出来事等との関係
（小学生、複数回答）



図表 3-2-5　保護者の読書習慣と本を読むことについて影響を受けたと思う出来事等との関係
（中学生、複数回答）



図表 3-2-6　保護者の読書習慣と本を読むことについて影響を受けたと思う出来事等との関係
（高校生、複数回答）



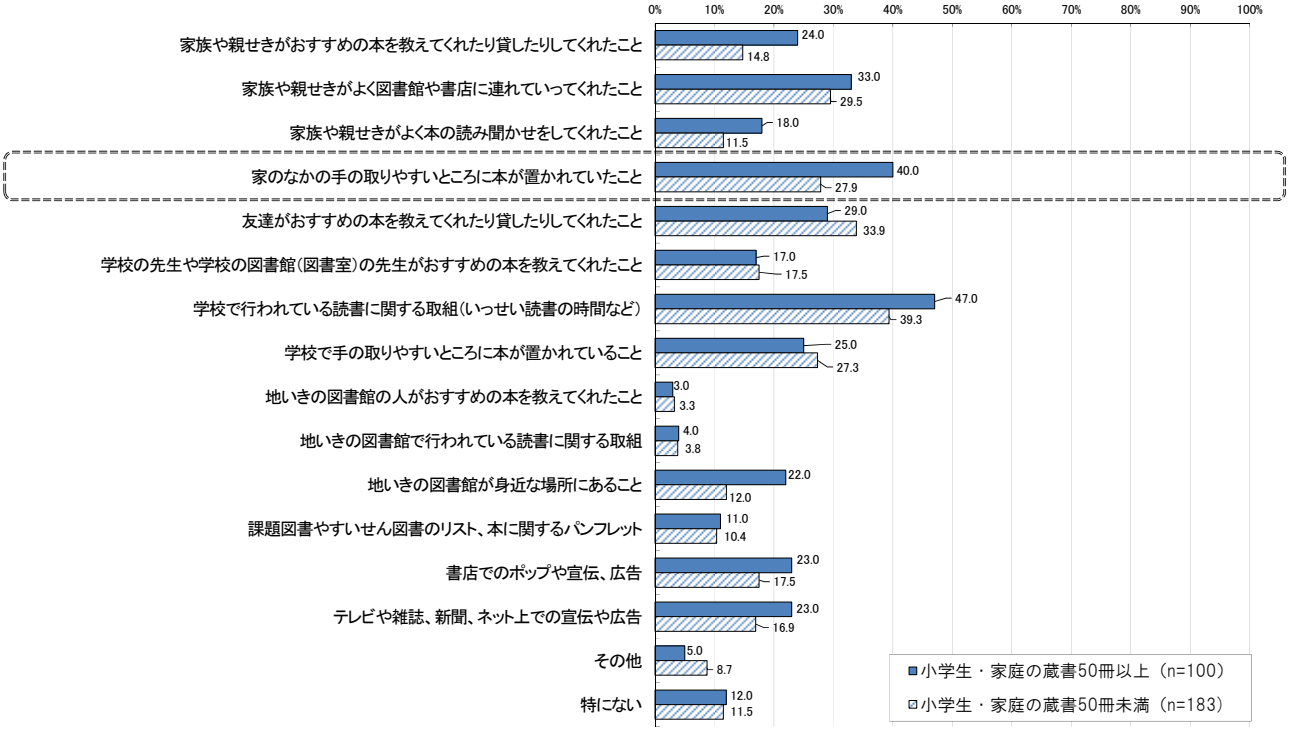
《読み取れること・ポイント》

★ 小学生・中学生・高校生ともに、保護者が平日に本を読む習慣がある場合に、本を読むことについて影響を受けたと思う出来事等として、家族や親せき等に関する項目を回答する割合が若干高くなっている。

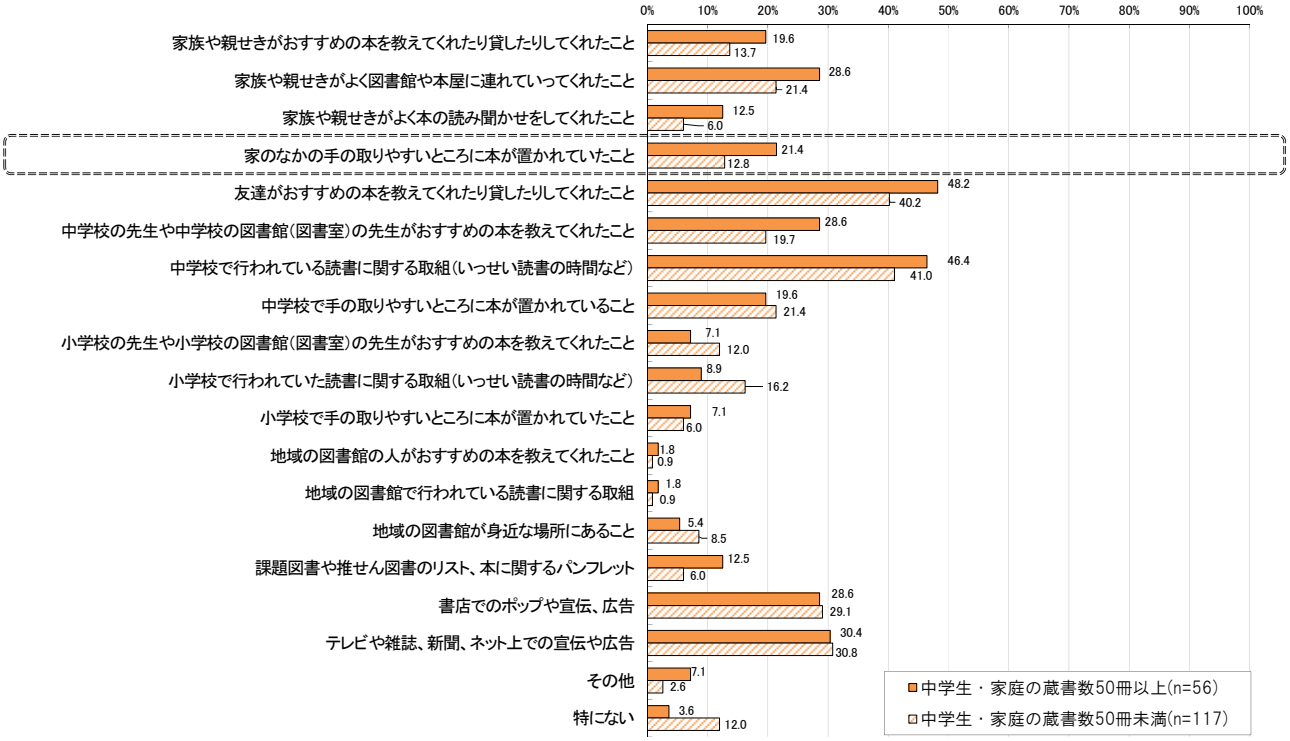
②家にある本の冊数との関係

- 本を読むことについてこれまでに影響を受けたと思う出来事等について、家庭にある本の冊数が 50 冊以上の場合と、50 冊未満の場合とに分類してみると、小学生・中学生・高校生のいずれについても、50 冊以上本がある場合に、「家のなかの手の取りやすいところに本が置かれていたこと」の回答割合が高くなっている。
- また、「家族や親せきがおすすめの本を教えてくれたり貸したりしてくれたこと」「家族や親せきがよく図書館や書店に連れていってくれたこと」「家族や親せきがよく本の読み聞かせをしてくれたこと」についても、50 冊以上本がある場合に、それぞれ回答割合が高くなっている。

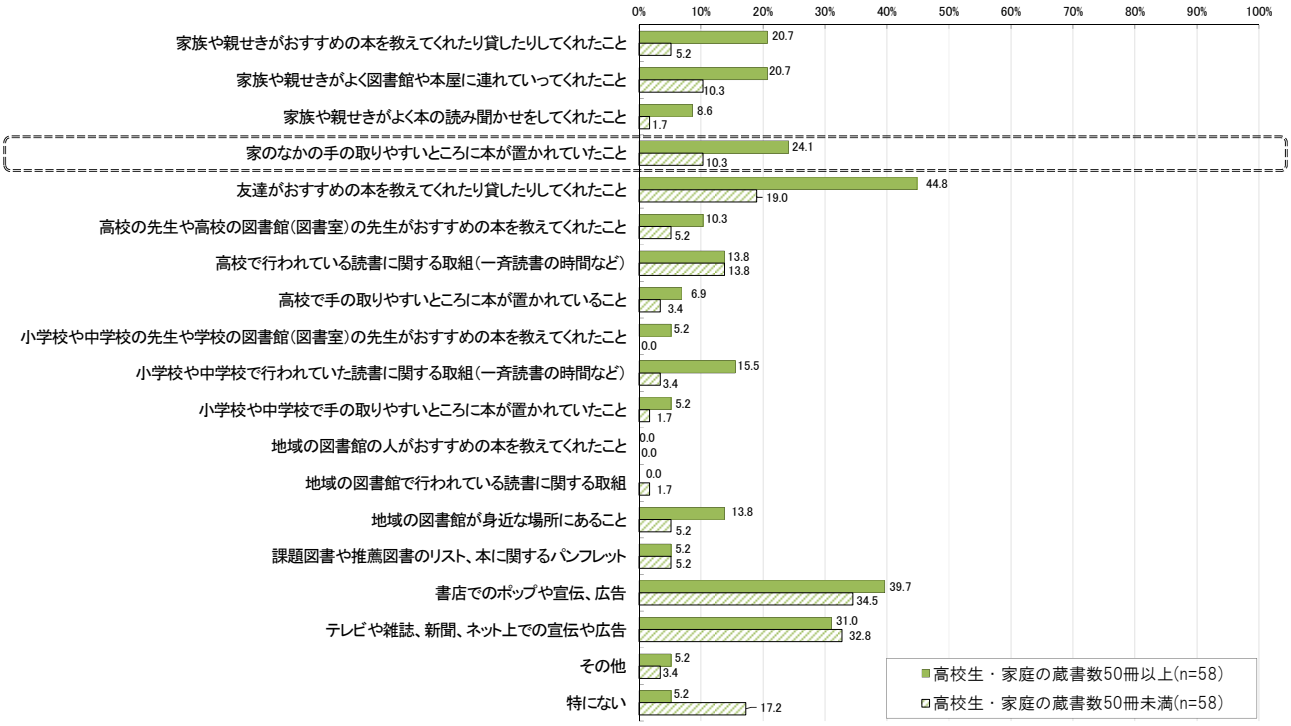
図表 3-2-7　家にある本の冊数と本を読むことについて影響を受けたと思う出来事等との関係
（小学生、複数回答）



図表 3-2-8　家にある本の冊数と本を読むことについて影響を受けたと思う出来事等との関係
（中学生、複数回答）



図表 3-2-9　家にある本の冊数と本を読むことについて影響を受けたと思う出来事等との関係
（高校生、複数回答）



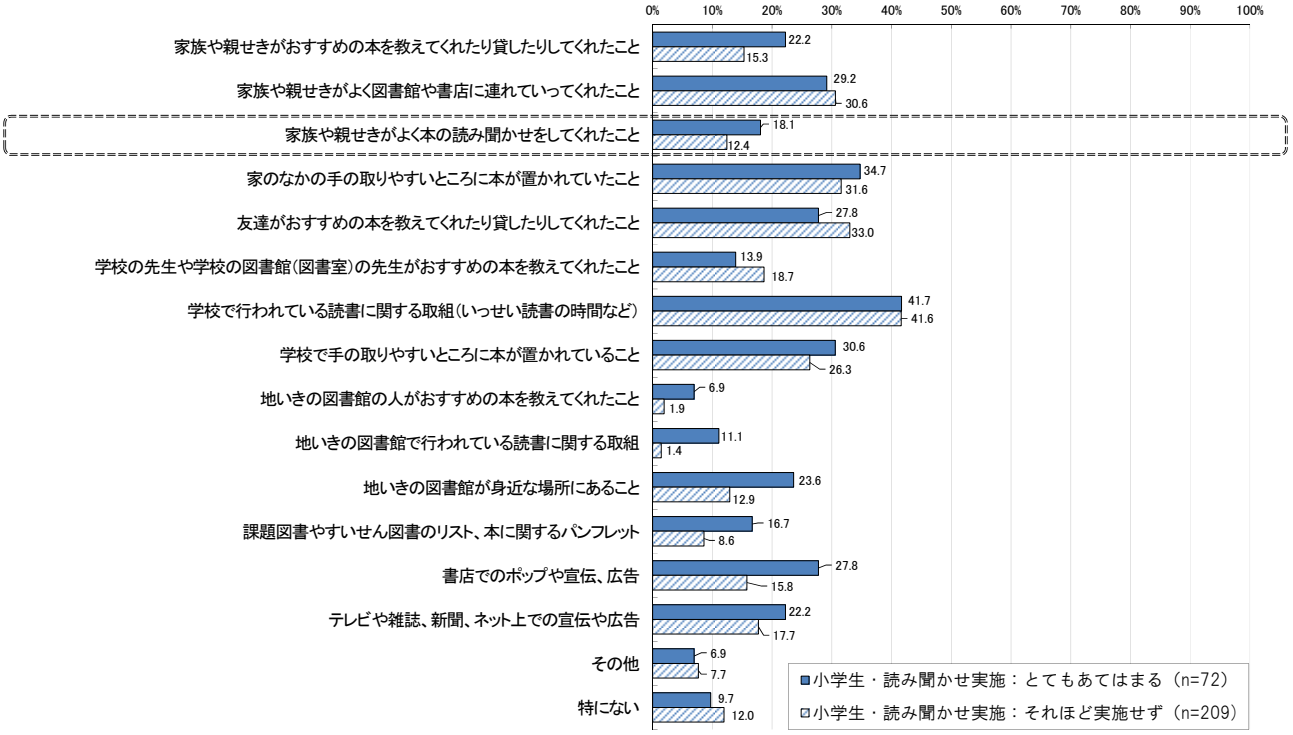
《読み取れること・ポイント》

★ 小学生・中学生・高校生ともに、家庭にある本の冊数が相対的に多い場合に、本を読むことについて影響を受けたと思う出来事等として、「家の中の手の取りやすいところに本が置かれていたこと」を回答する割合が若干高くなっている。

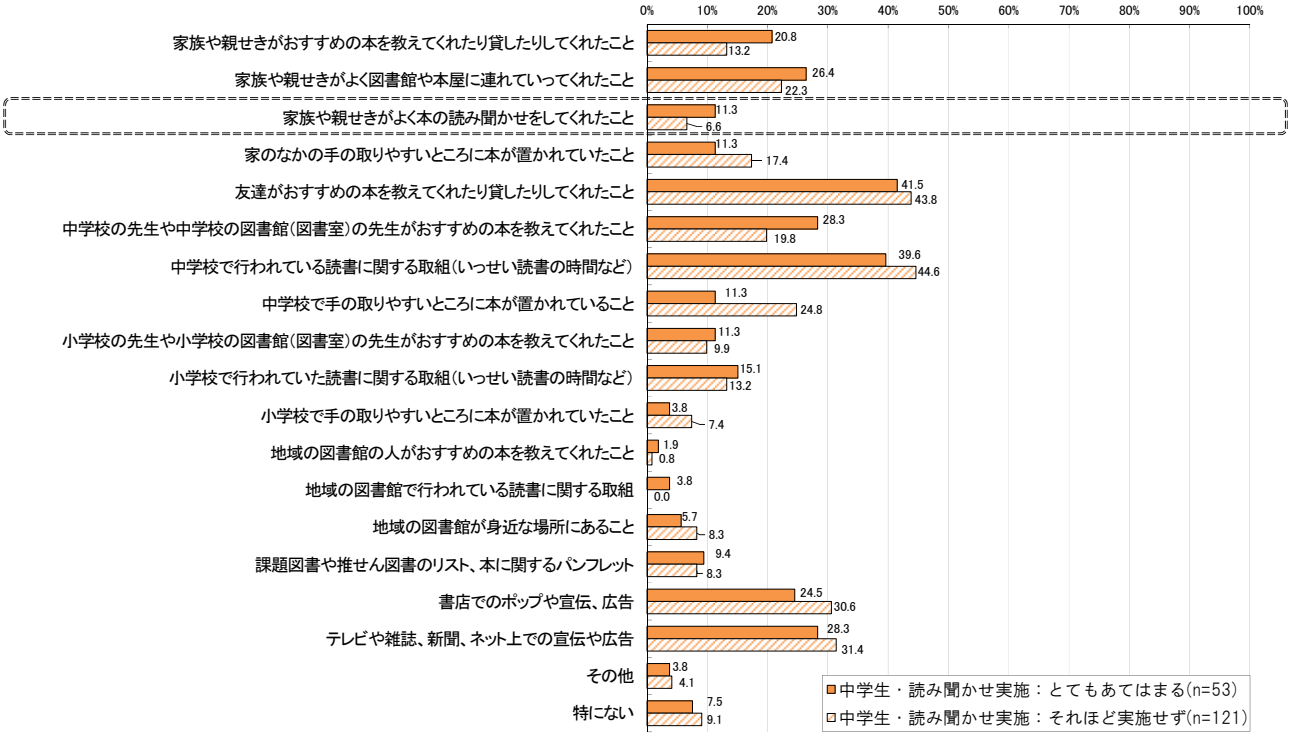
③就学前段階における取組との関係

- 本を読むことについてこれまでに影響を受けたと思う出来事等について、家庭において就学前の段階で子供に対して本や絵本の読み聞かせがよく実施されていた（「とてもあてはまる」）場合と、それほどは実施されていなかった（「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」）場合とに分類してみると、小学生・中学生・高校生のいずれについても、読み聞かせが実施されていた場合には、「家族や親せきがよく本の読み聞かせをしてくれたこと」の回答割合が若干高くなっている。
- また、「家族や親せきがおすすめの本を教えてくれたり貸したりしてくれたこと」についても、読み聞かせがよく実施されていた場合に、それぞれ回答割合が高くなっている。

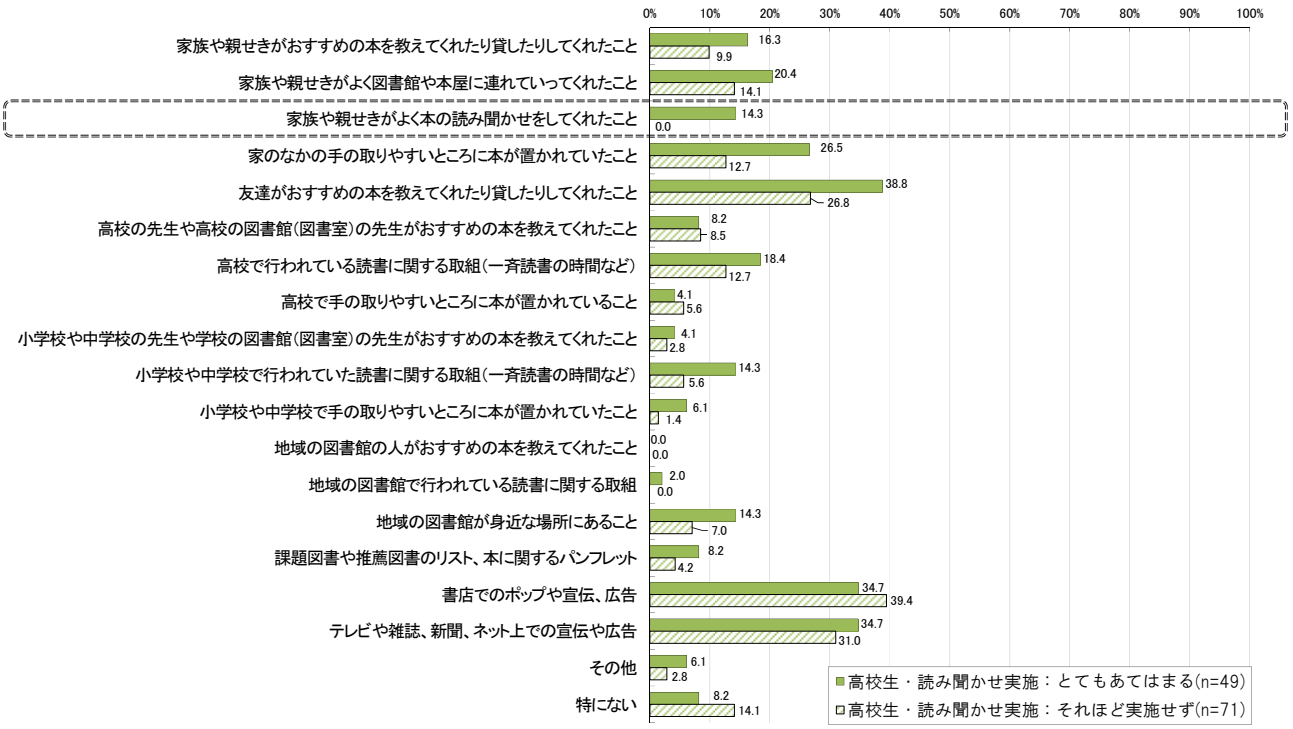
図表 3-2-10　就学前段階での読み聞かせと本を読むことについて影響を受けたと思う出来事等との関係（小学生、複数回答）



図表 3-2-11　就学前段階での読み聞かせと本を読むことについて影響を受けたと思う出来事等との関係（中学生、複数回答）



図表 3-2-12　就学前段階での読み聞かせと本を読むことについて影響を受けたと思う出来事等との関係（高校生、複数回答）



《読み取れること・ポイント》

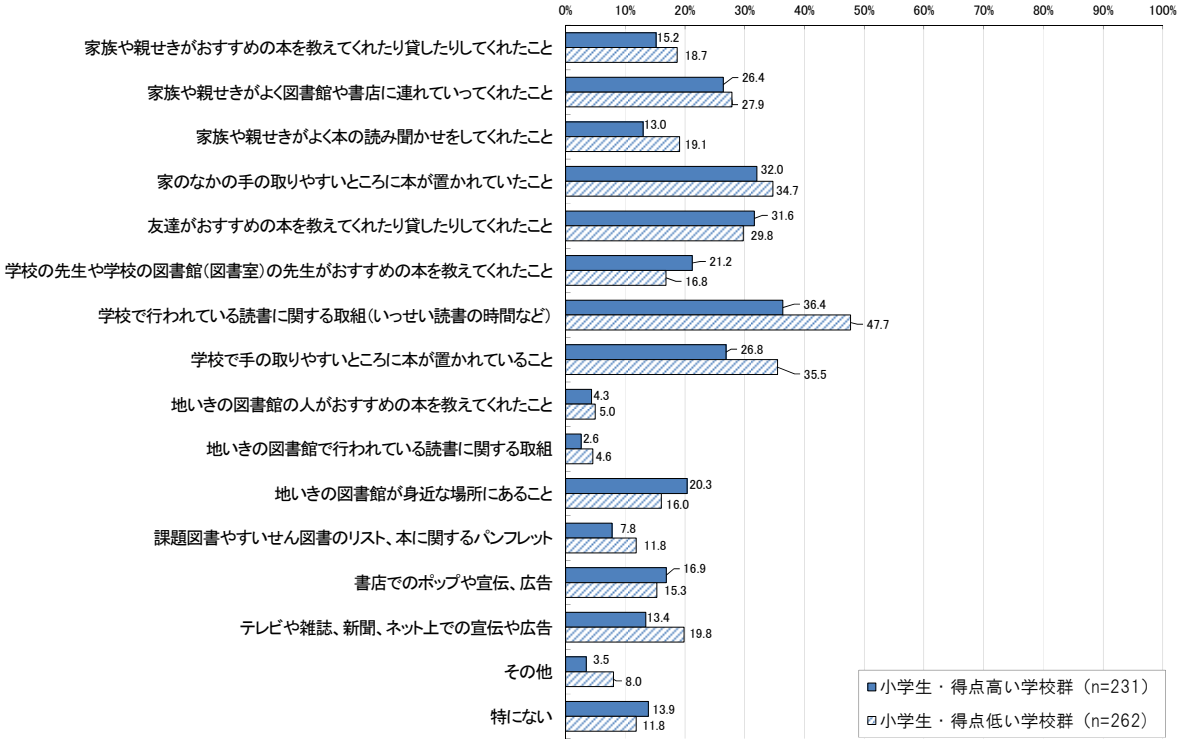
★ 小学生・中学生・高校生ともに、就学前に家庭で本や絵本の読み聞かせがよく行われていた場合に、本を読むことについて影響を受けたと思う出来事等として、「家族や親せきがよく本の読み聞かせをしてくれたこと」を回答する割合が若干高くなっている。

（４）学校・図書館環境要因別の特徴

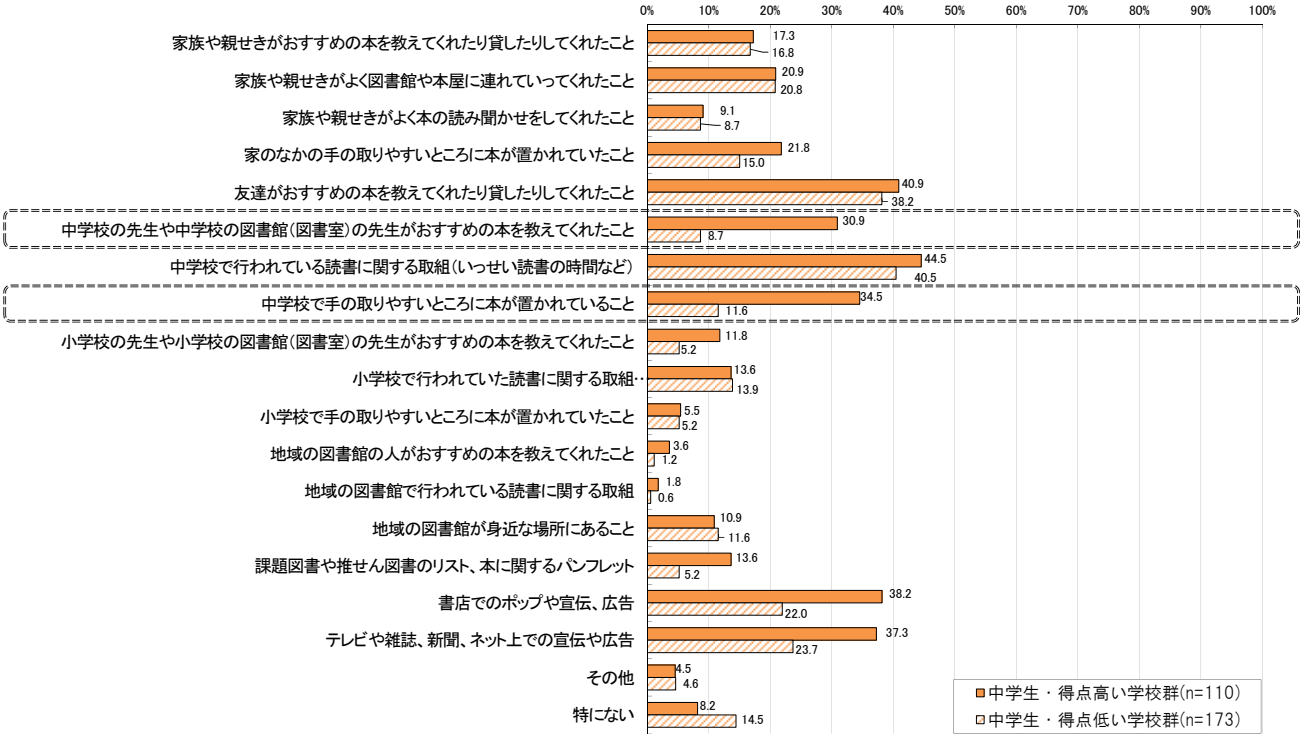
①充実した学校図書館（図書室）であるかとの関係

- 本を読むことについてこれまでに影響を受けたと思う出来事等について、学校図書館（図書室）について「使いやすい」「読みたい本がある」として肯定的な回答の得点が高い学校群と、低い学校群とに分類してみると、特に中学生に関して、肯定的な回答の得点が高い学校の場合に、「中学校の先生や中学校の図書館（図書室）の先生がおすすめの本を教えてくれたこと」「中学校で手の取りやすいところに本が置かれていること」との回答割合が高くなっている。

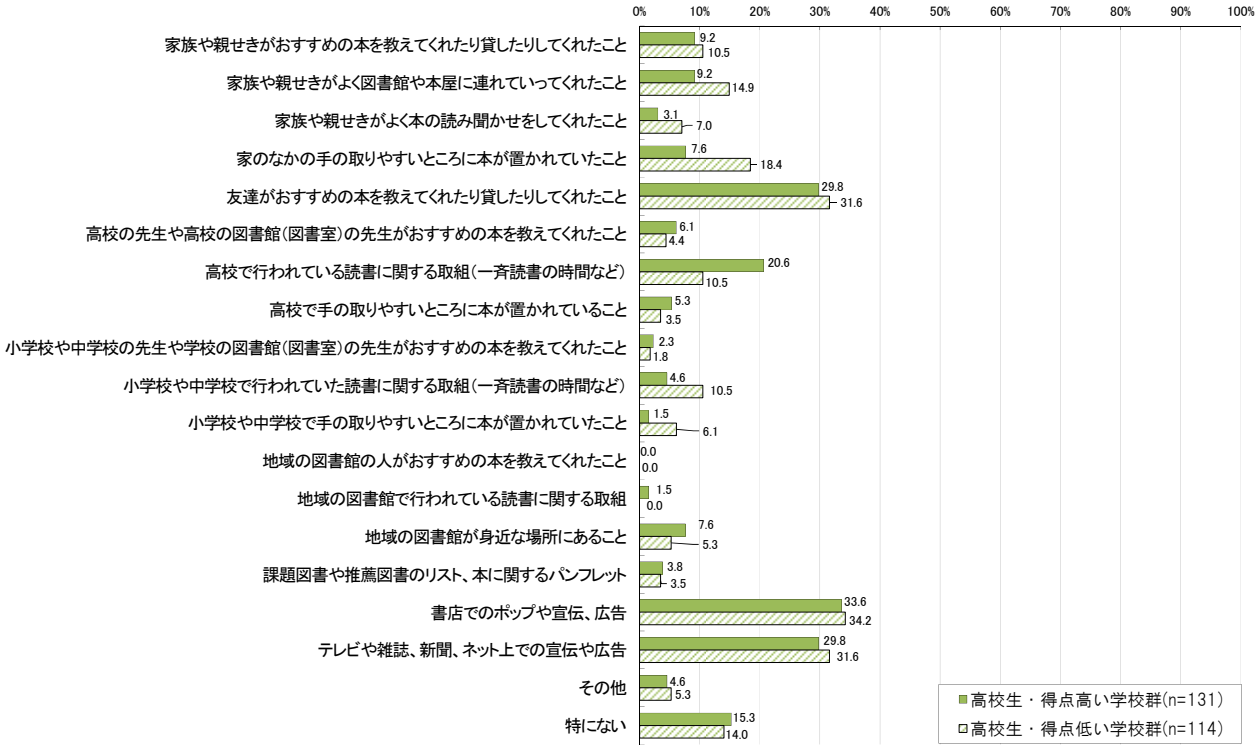
図表 3-2-13　充実した学校図書館（図書室）であるかと本を読むことについて影響を受けたと思う出来事等との関係（小学生、複数回答）



図表 3-2-14　充実した学校図書館（図書室）であるかと本を読むことについて影響を受けたと思う出来事等との関係（中学生、複数回答）



図表 3-2-15　充実した学校図書館（図書室）であるかと本を読むことについて影響を受けたと思う出来事等との関係（高校生、複数回答）



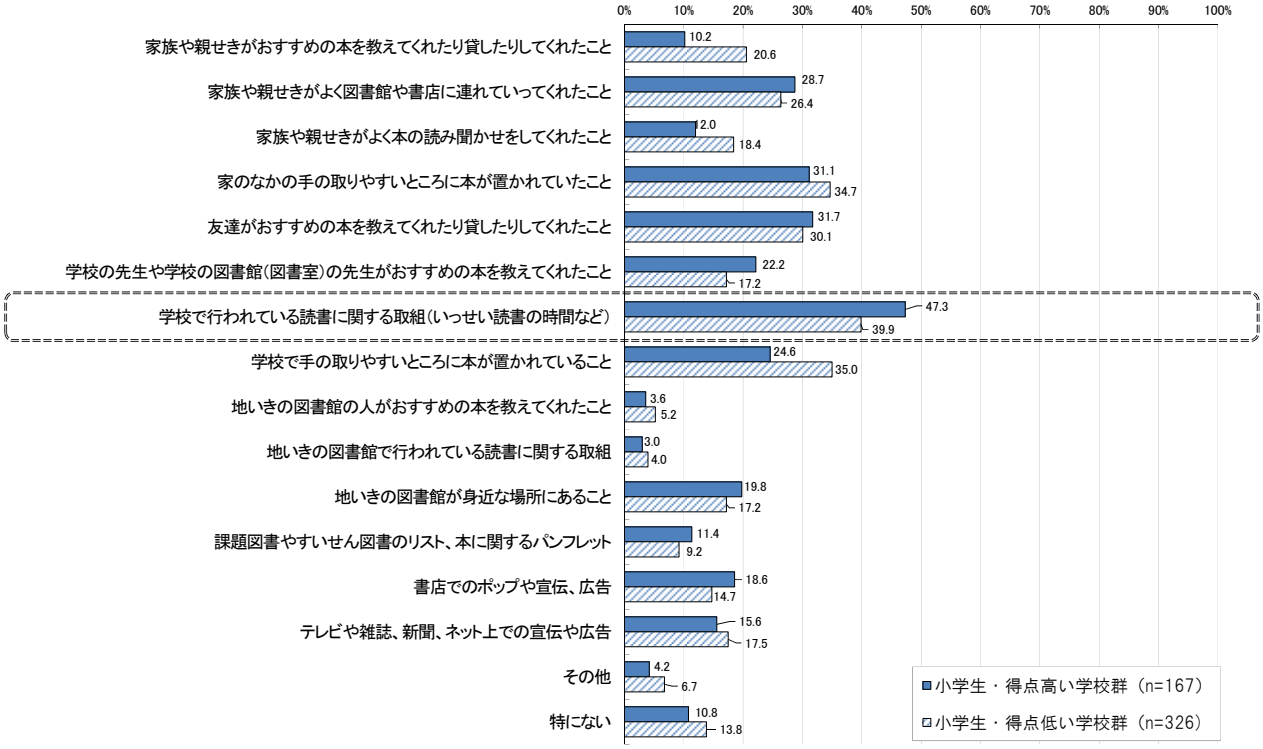
《読み取れること・ポイント》

★ 学校図書館（図書室）が充実していることは、特に中学生に関して、本を読むことに関して及ぼしている影響が大きい可能性がある。

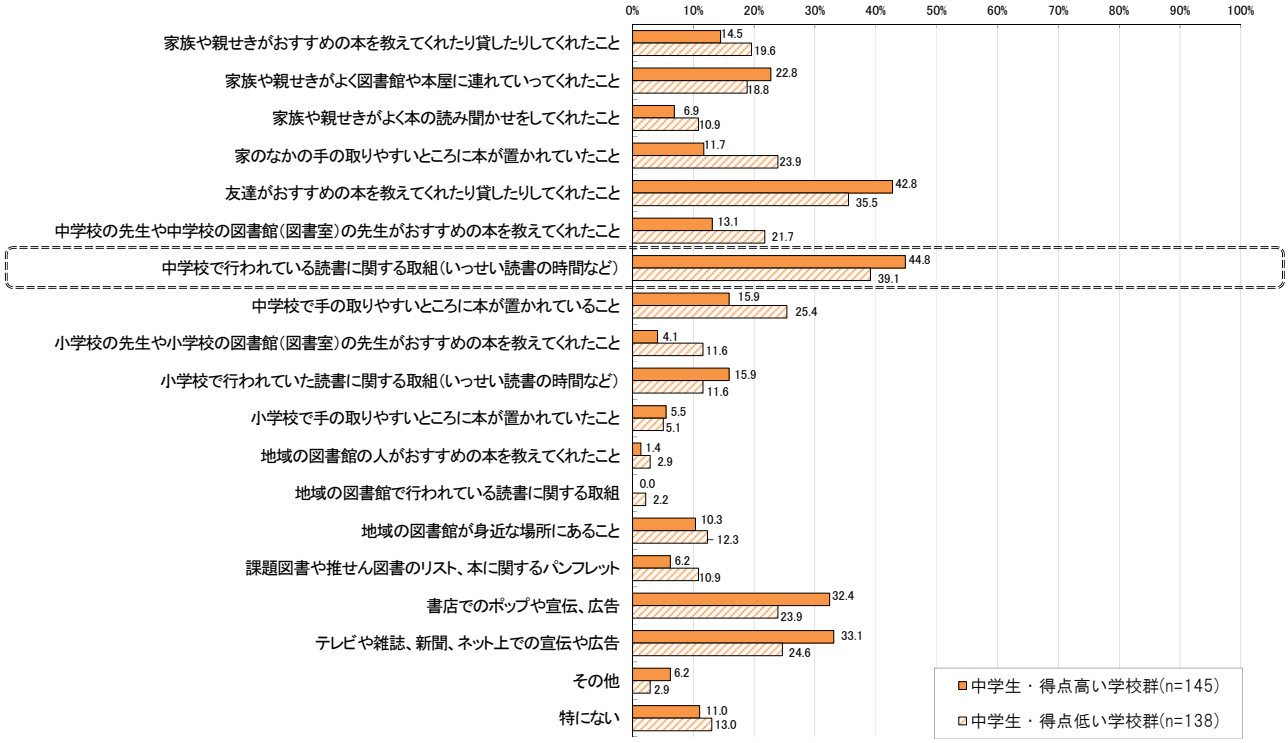
②一斉読書の時間など、読書に関する活動状況との関係

- 本を読むことについてこれまでに影響を受けたと思う出来事等について、学校が「一斉読書の時間など、読書に関する活動に力を入れている」として肯定的な回答の得点が高い学校群と、低い学校群とに分類してみると、小学生・中学生・高校生のいずれについても、肯定的な回答の得点が高い学校の場合に、「学校で行われている読書に関する取組（いっせい読書の時間など）」「中学校で行われている読書に関する取組（いっせい読書の時間など）」「高校で行われている読書に関する取組（一斉読書の時間など）」について、それぞれ回答割合が高くなっている。

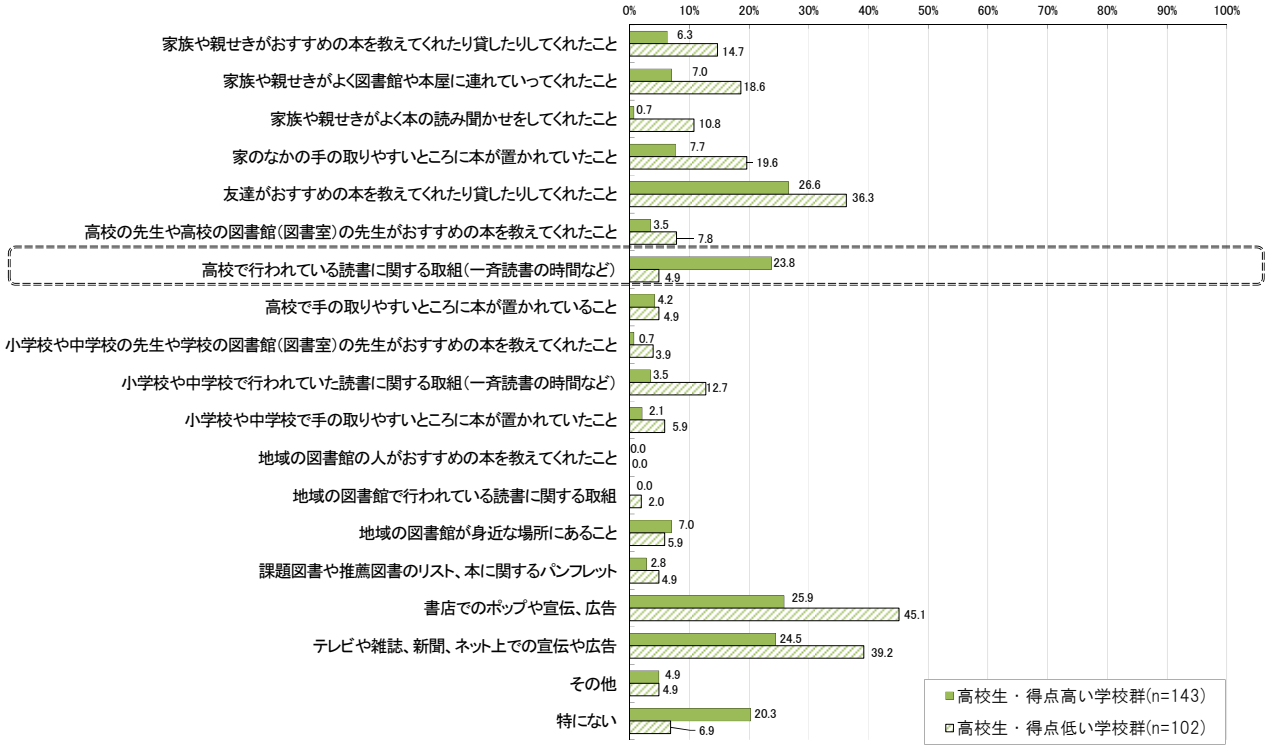
図表 3-2-16　一斉読書の時間など、読書に関する活動状況と本を読むことについて影響を受けたと思う出来事等との関係（小学生、複数回答）



図表 3-2-17　一斉読書の時間など、読書に関する活動状況と本を読むことについて影響を受けたと思う出来事等との関係（中学生、複数回答）



図表 3-2-18　一斉読書の時間など、読書に関する活動状況と本を読むことについて影響を受けたと思う出来事等との関係（高校生、複数回答）



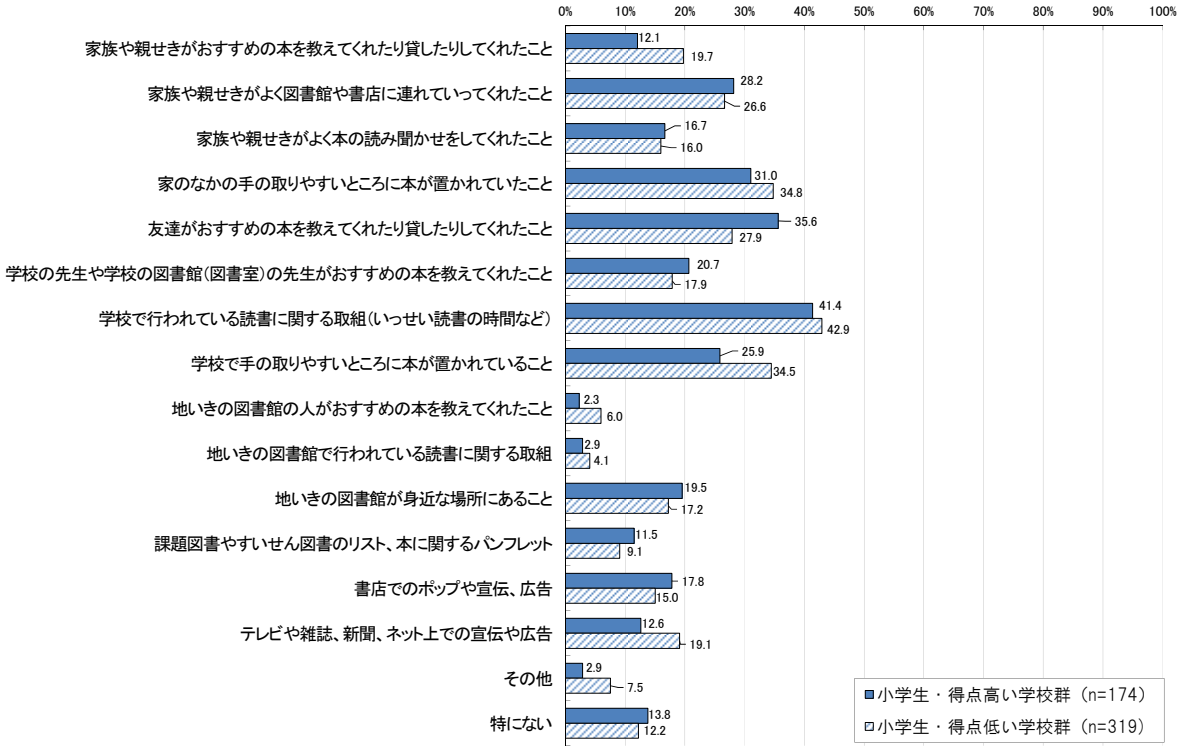
《読み取れること・ポイント》

★ 小学生・中学生・高校生ともに、学校が読書に関する活動に力を入れていることが、本を読むことに関して及ぼしている影響が大きい可能性がある。

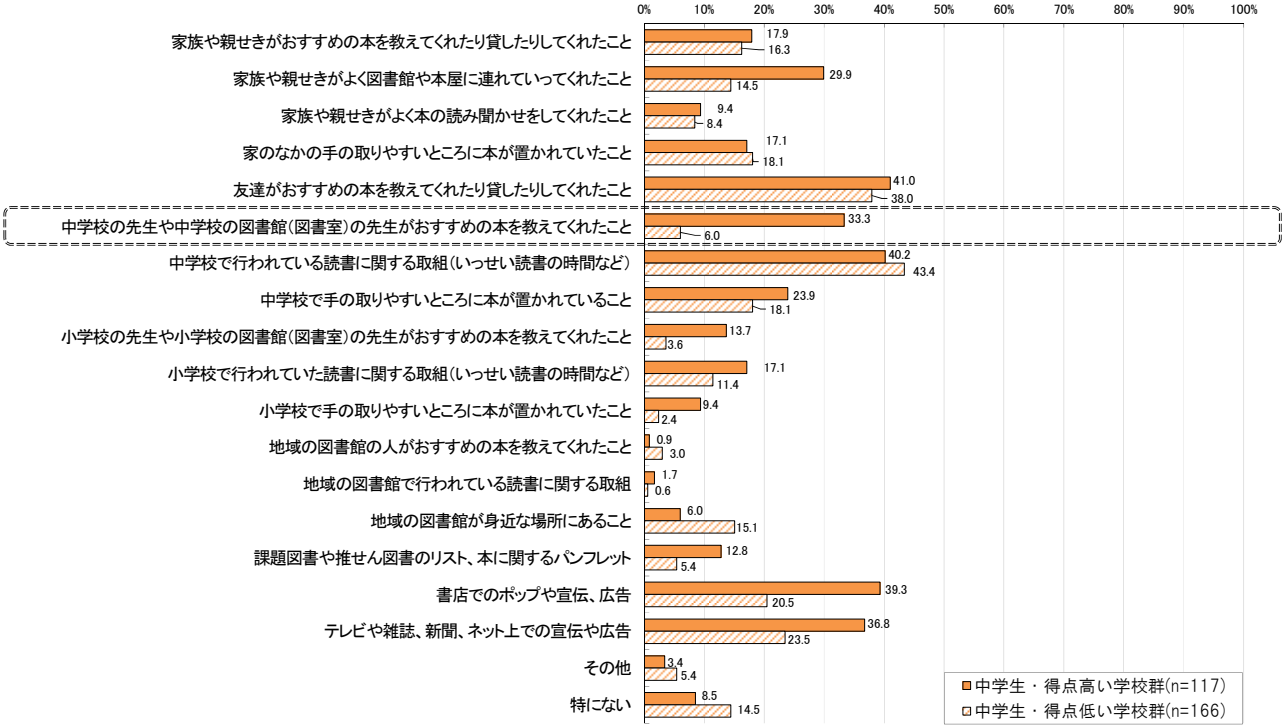
③学校図書館（図書室）の授業での活用状況との関係

- 本を読むことについてこれまでに影響を受けたと思う出来事等について、「学校図書館（図書室）を授業で利用する」として肯定的な回答の得点が高い学校群と、低い学校群とに分類してみると、特に中学生に関して、肯定的な回答の得点が高い学校の場合に、「中学校の先生や中学校の図書館（図書室）の先生がおすすめの本を教えてくれたこと」の回答割合が高くなっている。

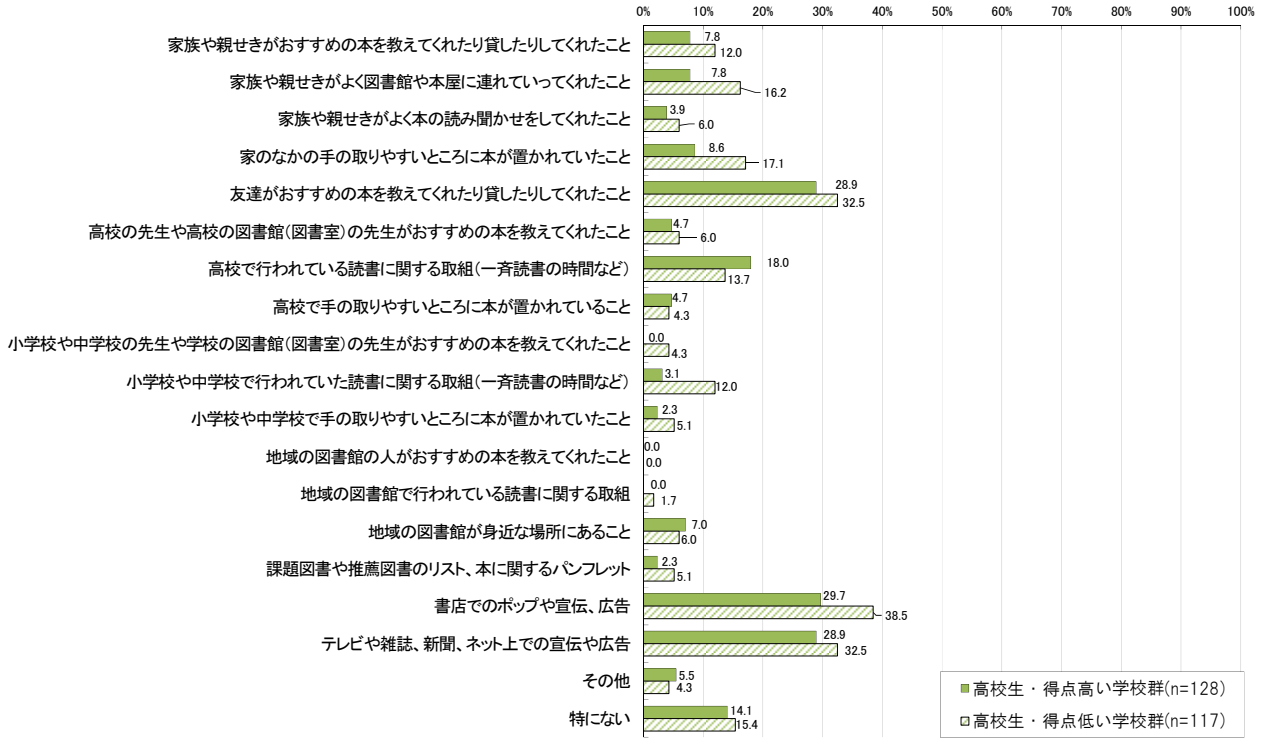
図表 3-2-19　学校図書館（図書室）の授業での活用状況と本を読むことについて影響を受けたと思う出来事等との関係（小学生、複数回答）



図表 3-2-20　学校図書館（図書室）の授業での活用状況と本を読むことについて影響を受けたと思う出来事等との関係（中学生、複数回答）



図表 3-2-21　学校図書館（図書室）の授業での活用状況と本を読むことについて影響を受けたと思う出来事等との関係（高校生、複数回答）



《読み取れること・ポイント》

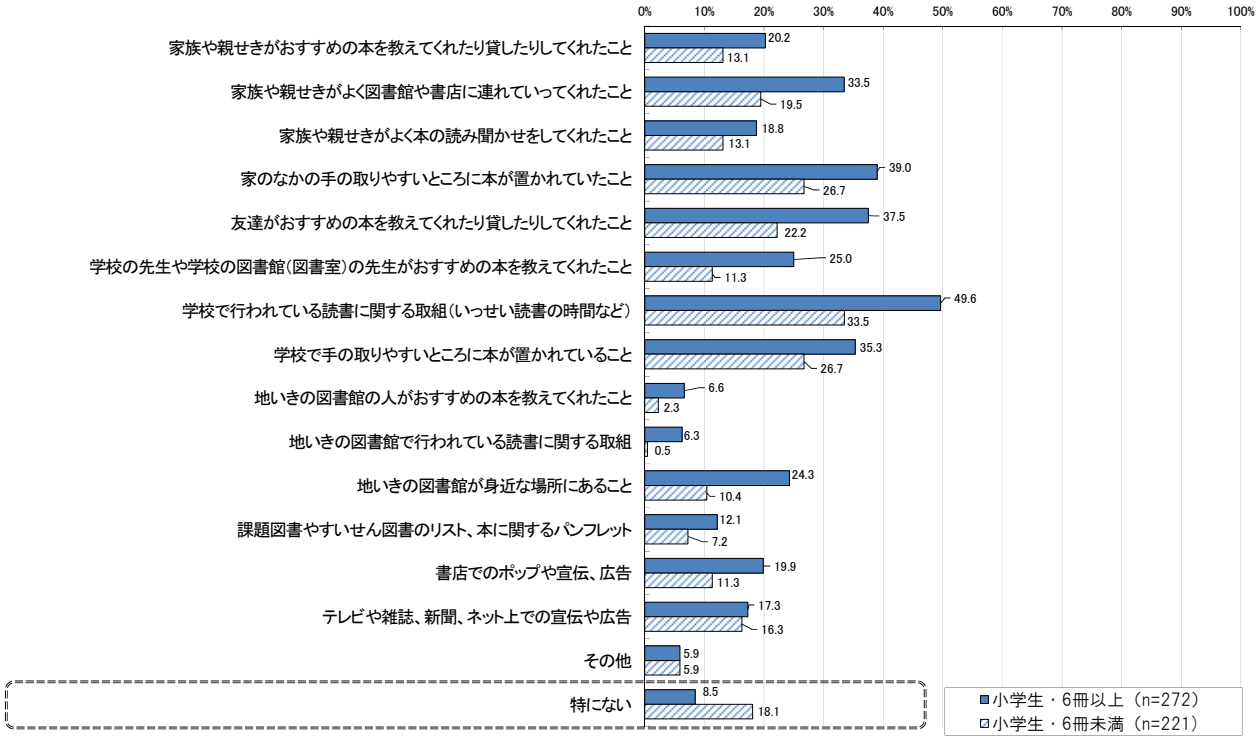
★ 学校図書館（図書室）を授業でよく利用することは、特に中学生に関して、本を読むことに関して及ぼしている影響が大きい可能性がある。

（５）読書習慣等との関係の特徴

①読書量との関係

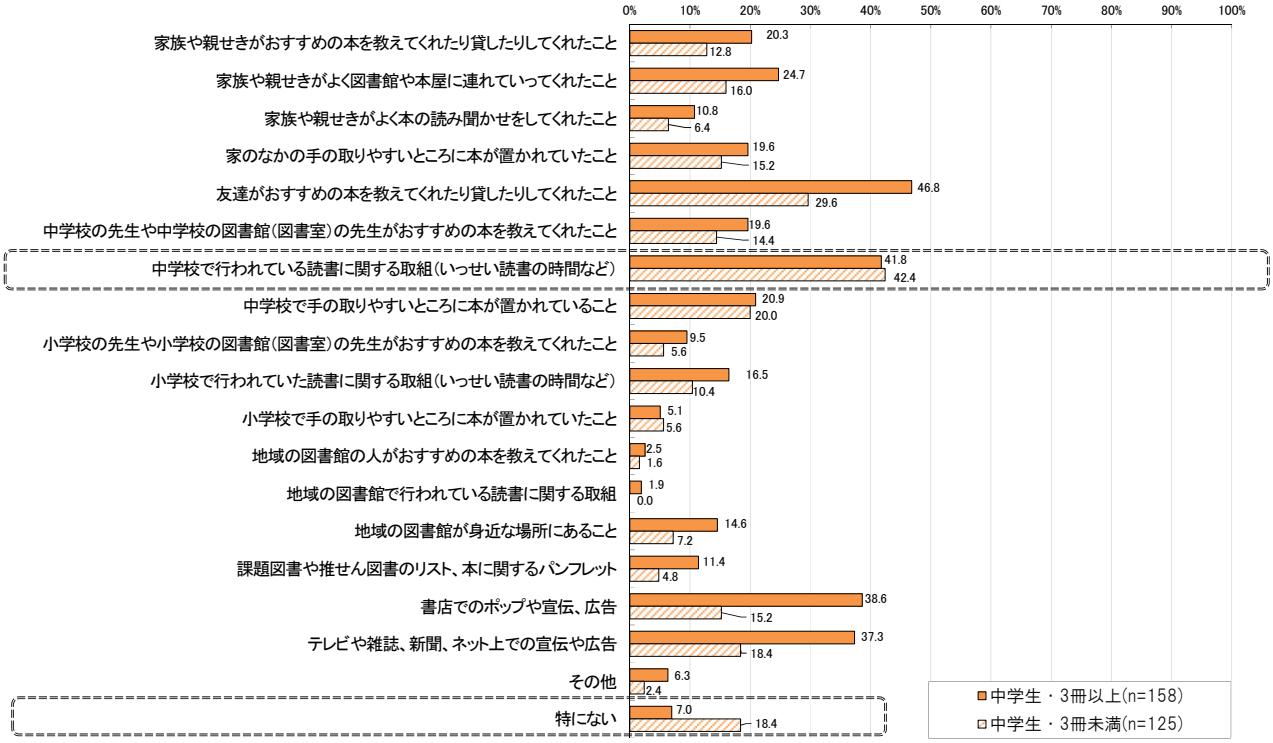
- 小学生・中学生・高校生のそれぞれについて、１か月あたりの読書冊数が相対的に多い群と、少ない群とに分類して[22]、本を読むことについてこれまでに影響を受けたと思う出来事等の回答をみると、相対的に読書冊数が多い群のほうが、ほぼ全ての項目について回答割合が高く、読書冊数が少ない群では、「特にない」の回答割合が高くなっている。
- なお、中学生に関して、１か月あたりの読書冊数が相対的に少ない群では、「中学校で行われている読書に関する取組（いっせい読書の時間など）」について、読書冊数が相対的に多い群よりも回答割合が高くなっている。高校生についても、「高校で行われている読書に関する取組（一斉読書の時間など）」に関しては、読書冊数が相対的に多い群と少ない群とで、回答割合の差が小さくなっている。

図表 3-2-22　１か月あたりの読書冊数と本を読むことについて影響を受けたと思う出来事等との関係（小学生、複数回答）

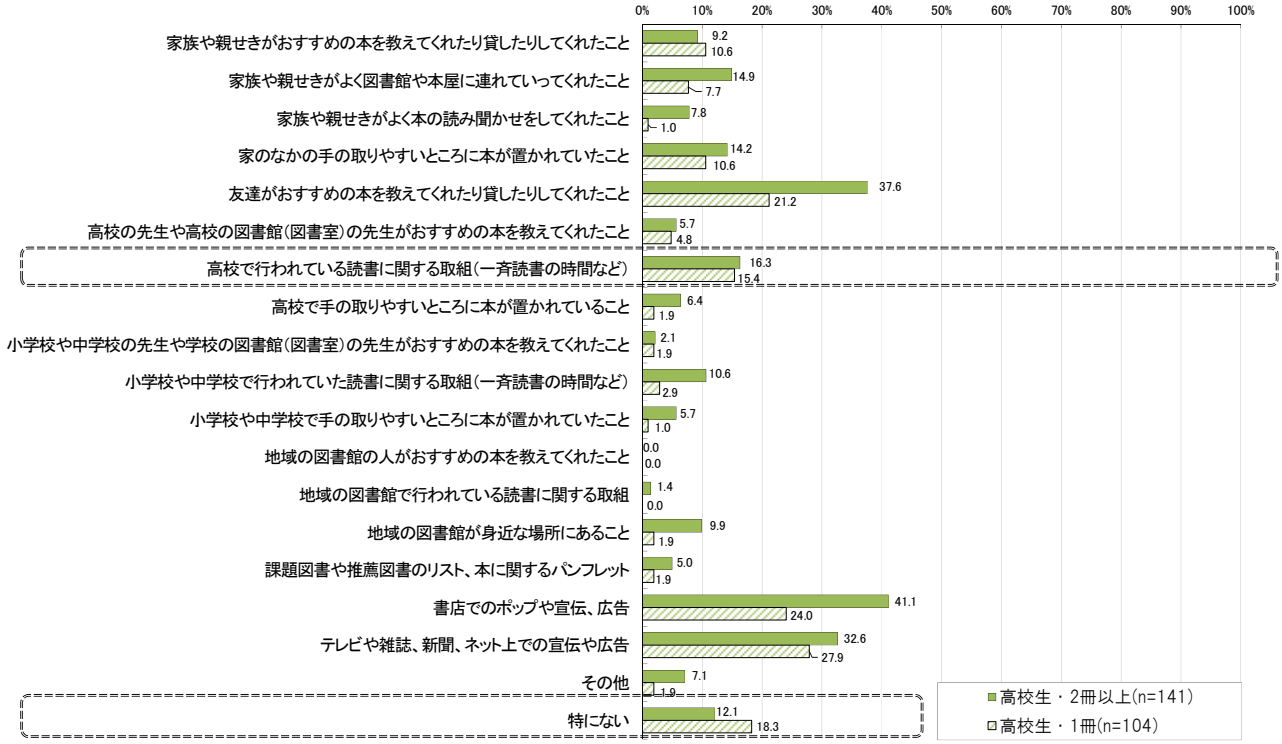


[22] １か月の間に１冊以上本を読んでいる児童・生徒のなかで、小学生・中学生・高校生のそれぞれに関し、人数が概ね半数ずつになるように分類した。小学生に関しては「6 冊以上／未満」、中学生に関しては「3 冊以上／未満」、高校生に関しては「2 冊以上／未満（1 冊）」で区分した。

図表 3-2-23　１か月あたりの読書冊数と本を読むことについて影響を受けたと思う出来事等との関係（中学生、複数回答）



図表 3-2-24　１か月あたりの読書冊数と本を読むことについて影響を受けたと思う出来事等との関係（高校生、複数回答）



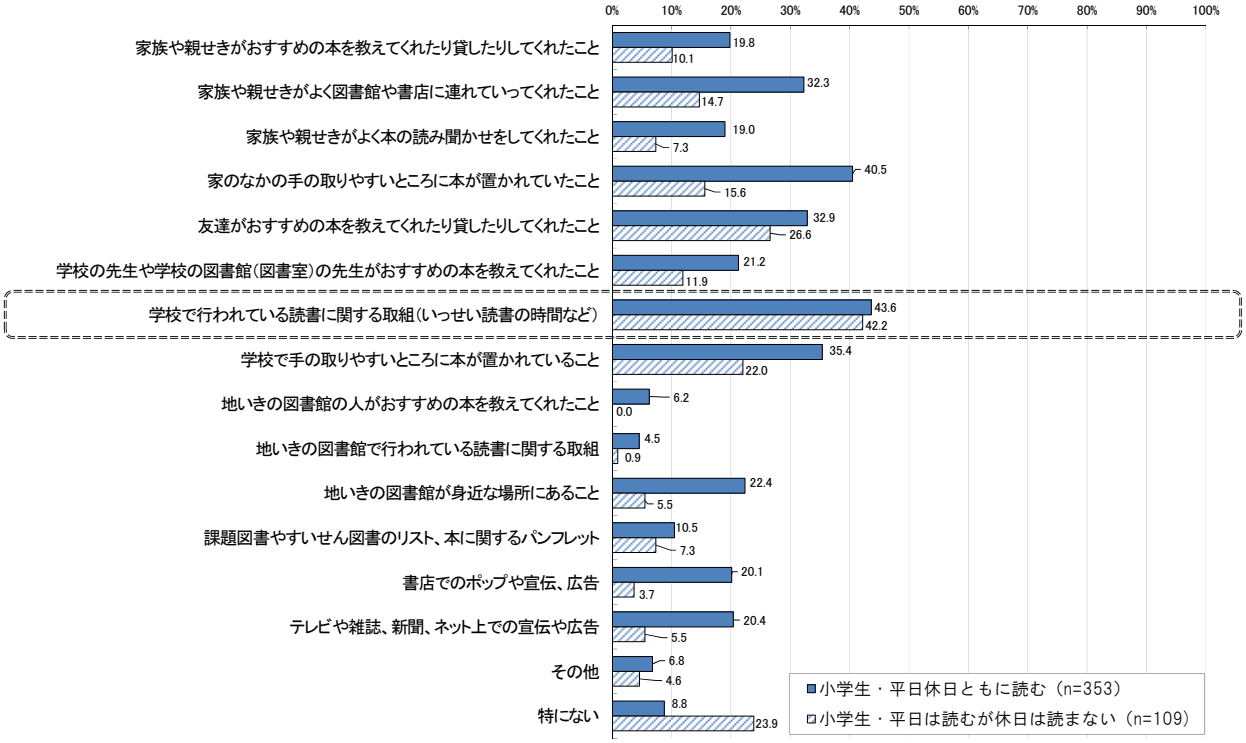
《読み取れること・ポイント》

★ 中学生・高校生に関して、読書冊数が相対的に少ない群に関しては、一斉読書の時間など、学校で行われている読書に関する取組が、本を読むことに関して及ぼしている影響が大きい可能性がある。

②平日・休日の読書時間との関係

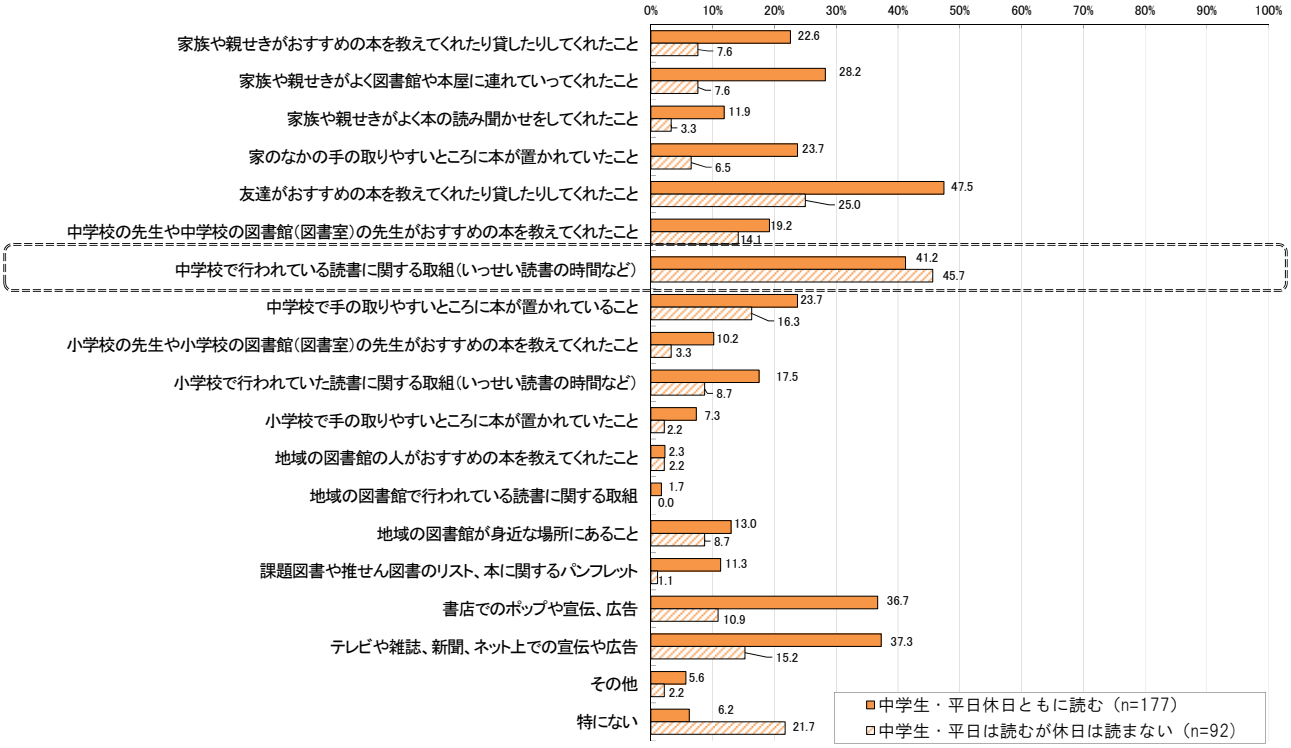
- 小学生・中学生・高校生のそれぞれについて、「平日・休日ともに本を読む」群と、「平日は読むが休日は読まない」群とに分類し[23]、本を読むことについてこれまでに影響を受けたと思う出来事等の回答をみると、「平日・休日ともに読む」群のほうが、ほぼ全ての項目について回答割合が高く、「平日は読むが休日は読まない」群では、「特にない」の回答割合が高くなっている。特に「書店でのポップや宣伝、広告」「テレビや雑誌、新聞、ネット上での宣伝や広告」などで回答状況に差が見られ、「平日・休日ともに読む」群では多様な手段で情報の収集が行われていることが見て取れる。
- 他方、中学生・高校生に関して、「平日は読むが休日は読まない」群では、「中学校で行われている読書に関する取組（いっせい読書の時間など）」「高校で行われている読書に関する取組（一斉読書の時間など）」について、「平日・休日ともに本を読む」群よりも回答割合が高くなっている。小学生についても、「学校で行われている読書に関する取組（いっせい読書の時間など）」に関しては、「平日・休日ともに本を読む」群と、「平日は読むが休日は読まない」群とで回答割合の差が小さくなっている。

図表 3-2-25　平日・休日の読書時間と本を読むことについて影響を受けたと思う出来事等との関係（小学生、複数回答）

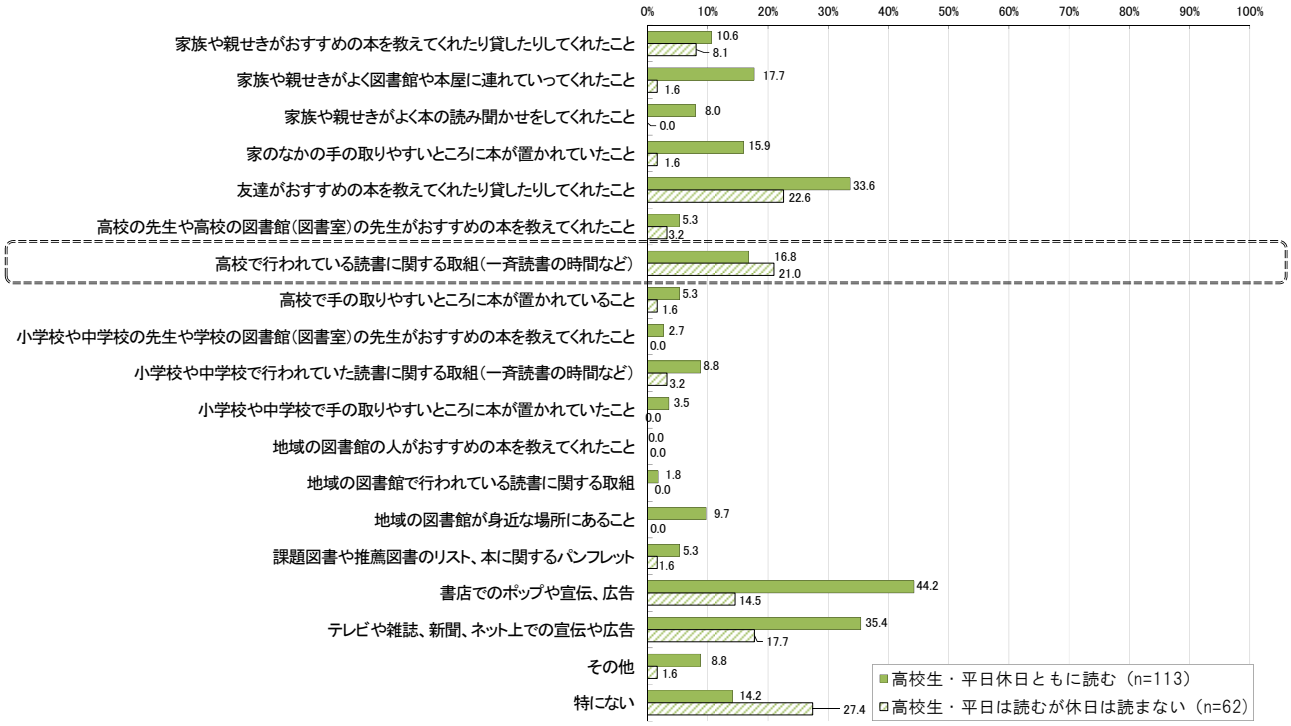


23 「普段学校がある日」「学校がない休みの日」の１日あたりの読書時間について、「全くしない」か、「30 分未満」以上の回答かで分類した。なお、特に高校生については、「平日は読まないが休日は読む」者が比較的多く見られたが、ここでは集計の対象外とした。

図表 3-2-26　平日・休日の読書時間と本を読むことについて影響を受けたと思う出来事等との関係（中学生、複数回答）



図表 3-2-27　平日・休日の読書時間と本を読むことについて影響を受けたと思う出来事等との関係（高校生、複数回答）



《読み取れること・ポイント》

★ 小学生・中学生・高校生ともに、平日は本を読むが休日は読まない群に関しては、一斉読書の時間など、学校で行われている読書に関する取組が、本を読むことに関して及ぼしている影響が大きい可能性がある。

３．子供の読書習慣等の実態に関する課題認識

（１）保護者の課題認識

①子供の読書習慣等の状況に関する課題認識

- 小学生・中学生・高校生のそれぞれの保護者に対して、「子供の読書の状況について課題であると考えていること」についてたずね、自由記述により回答を得た。
- 様々な回答が得られたが、そのなかでも、「読書をしない背景」として、なぜ読まない（読めない）のかの要因について、いくつかの観点から、若干内容の異なる回答が得られている。なお、勉強・習い事・学校行事・塾・部活動等による多忙を要因と考える回答は、子供の学校段階が上がるほど多く見られた。
- また、子供がある程度本を読んでいても、読む本のジャンル等が限られていることを課題と考える回答も比較的多く見られている。

図表 3-3-1　保護者が子供の読書に関する状況について課題と考えていること（回答例）

大分類	小分類	回答内容（要約・抜粋）
読書をしない背景について	勉強・習い事・学校行事・塾・部活動等で多忙で、読書をする時間がないことについて（152 件）	■高学年になり、スポーツ少年団や勉強などで読書の時間がほとんどとれなくなった。 ■小・中学生の時は休み時間や家庭でも小説を暇さえあれば読んでいたが、今では休み時間も勉強時間、帰宅しても課題に追われ、休日でさえもそんな時間がなく、本人はとても残念がっている。
	子供に読書をする習慣がないことについて（140 件）	■字を読むのが嫌い。 ■親があまり読書をしないので、子供も同じになっている。
	ゲーム・テレビ・インターネット等に費やす時間が多いことについて（73 件）	■携帯電話でのメールや LINE でのやりとり等で、じっくり読書する時間がない。
	子供がマンガ・雑誌等しか読まないことについて（34 件）	■マンガ、週刊誌しか読まないので、読書するように勧めることから解決していかなければならないと思っている。
読書はするが、読むジャンル等が限られていることについて（52 件）		■好きな作家の本しか読まない傾向があるので、もう少し色々な本を読んでほしい。 ■推理小説などの物語文を読んでいることが多いので、もっと社会問題について焦点をあてた新書等の評論文にも興味を持ってほしい。

《読み取れること・ポイント》

★ 本を読まない背景として、「字を読むのが嫌い」等の理由のほか、勉強等で「時間が取れない」といった回答が見られ、学校段階が上がるにつれて「読書をする時間がない」という主旨の回答が比較的多く見られる。

★ また、読書をしている場合であっても、読む本のジャンル等に偏りがあることが課題として認識されている。

②地域における子供の読書に関する環境面に関する課題認識

- 小学生・中学生・高校生のそれぞれの保護者に対して、「地域における子供の読書に関する環境面で課題があると考えていること」についてたずね、自由記述により回答を得た。
- 様々な回答が得られたが、特に、自宅や学校の近隣（徒歩・自転車圏内）に図書館や書店等がないことを課題と考える回答が多く見られた。
- また、地域の図書館の設備や蔵書、サービスの内容に関すること、ならびに、学校図書館（図書室）の設備や蔵書の内容等に関することを課題と考える回答も比較的多く見られた。地域の図書館に関しては、幼少期の子供向けのコーナーだけでなく、中高生向けの蔵書やコーナー作り、イベントの開催等を望む回答が見られた。学校図書館（図書室）に関しては、司書の配置状況に関する回答も見られている。

図表 3-3-2　保護者が地域における環境面で課題があると考えていること（回答例）

分類	回答内容（要約･抜粋）
近隣（徒歩・自転車圏内）に図書館や書店等がないこと （183 件）	■市立図書館に子供達だけで行かせられない距離なので、徒歩でいける区民館で本を借りられるシステムがあるとよいなと思うことがある。 ■地域のコミュニティセンターなど子供だけでいける距離に貸し出しができるところがあるといいなと思う。 ■昔は図書館まで行かなくても、町内の会館などに本があった。休みの日などそれを利用し読書できた。現在はそのような使われ方がないので「購入しなくても読める本」は学校に限られてしまう。 ■地域に書店の数が少ない。専門書や参考書などを買うのに車に 30 分～1時間かけて買いに行かないといけない。
地域の図書館の設備や蔵書、サービスの内容等に関すること （89 件）	■図書館の配置として、子供の読む本のすぐ隣に女性が読む趣味の本のコーナーがあれば、子供に目が行き届く気がする。 ■図書館のイベント等は就学前の子供や小学生対象のものがほとんど。中学生が本、読書に興味を持つようなイベントもあるとよいと思う。 ■夏休み友達と図書館に行ったが、中高生が多く座る場所がなかった･･･とすぐ帰ってきたことがあった。座る場所を多くしてほしい。 ■子供向けの本ばかりが子供の読みたい本とは限らない。専門書等も置いて良いと思う。
学校図書館（図書室）の設備や蔵書の内容等に関すること （29 件）	■夏休みの学校の図書館利用日を設けてほしい。 ■少人数の小学校はどうしても図書室の規模も小さくなるが、少人数の小学校の児童もたくさんの本に接する機会を増やしてほしい（蔵書を定期的に他校のものといれかえるなど）。 ■学校図書館の司書の雇用が不安定と聞いたことがあるので、ちゃんと資格を持った方をきちんとした形で雇っていただきたいと思う。 ■学校司書が配置されている学校とたまにしか来ない学校があって不公平。全校配置してほしい。

《読み取れること・ポイント》

★ 地域における環境として、「子供だけで行くことのできる距離」に、図書館や書店等、本が読める施設等が十分にないことが課題として認識されていることがうかがえる。
★ 地域の図書館に関しては、幼少期の子供向けのコーナーだけでなく、中高生向けの蔵書やコーナー作りの充実が必要であるとの意見が見られる。

（２）各学校・教育機関における課題認識

①幼稚園

- 幼稚園、小学校、中学校、高等学校のそれぞれに対して、子供の読書の状況について課題であると考えていることについてたずね、自由記述により回答を得た。
- 幼稚園からは、「家庭での読み聞かせができていない保護者がいる」という主旨の回答が多く見られた。各幼稚園から家庭への本の貸し出し等が行われても、そのまま返却されたり、子供だけで読まれたりするということが課題として挙げられている。

図表 3-3-3　幼稚園における課題認識（回答例）

段階	分類	回答内容（要約･抜粋）
幼稚園	家庭での読み聞かせ （19 件）	■テレビ･DVD･スマートフォンが普及し、絵本を見る機会が少なくなっているように感じる。乳児からスマートフォンを使ってアプリを見ていることもあり、保護者の読み聞かせも少ないのではないか。 ■毎日親子での読書を啓蒙しているが、時間がない保護者があり定着しない。子供自身が一人で借りていった絵本を読んでいる実態もある。 ■園児に対し絵本の読み聞かせをすることの重要性を伝えているが、子供自身に読ませる保護者が、年齢が高い子には増えてくる。

※全回答件数は 24 件である。幼稚園に関しては、課題として回答があった内容のほぼ全てが家庭での読み聞かせの状況に関することであった。

②小学校

- 小学校からは、「家庭で本を読まない児童が多い」という主旨の回答が多く見られた。一斉読書の時間の設定等により学校では読書時間が確保されているが、家庭での読書量が不足しているとの課題認識が示されている。
- また、小学生の段階で既に読書に親しんでいる子供とそうではない子供との差が大きくなってしまっているという主旨の回答も比較的多く見られている。

図表 3-3-4　小学校における課題認識（回答例）

段階	分類	回答内容（要約･抜粋）
小学校	家庭での読書 （43 件）	■毎日、朝読書の時間を 15 分設定していることで、学校生活の中で空いた時間に読書する子供は多い。しかし、家庭で読書の習慣がないことが学校評価アンケートからわかってきている。 ■学校では読書の時間が確保されているが、家庭での読書量が足りないと感じる。 ■読書に親しむための様々な取組を行っているが、児童の読書量の個人差は大きい。家庭の読書環境や読書に対する意識にも大きな違いがあるので、家庭への啓発も大きな課題である。
	読書時間･図書館利用頻度等の個人差 （31 件）	■図書館利用者が少ないわけではないが、「本が好きな子」に利用が集中している。 ■読書に親しんでいる子とそうでない子の差が大きい。そうでない子に対して、どう働きかけていくのかが課題である。 ■読書に親しむための様々な取組を行っているが、児童の読書量の個人差はいまだ大きい。

※全回答件数は 123 件である。

③中学校

- 中学校からは、「読書の状況の個人差が大きく見られる」といった主旨の回答が多く見られた。小学校においても個人差があることが指摘されているが、中学校段階ではさらにその差が大きくなっているとの課題認識が示されている。
- また、関連して、本を読んでいる場合であっても、「読まれる本に偏りが見られる」といった主旨のことも多く挙げられていた。

図表 3-3-5　中学校における課題認識（回答例）

段階	分類	回答内容（要約・抜粋）
中学校	読書時間・図書館利用頻度等の個人差 （15 件）	■中学校では読書時間や読書量に小学校以上にばらつきがみられ、その差が大きくなっている。朝の読書等で対応しているが、なかなか難しいのが現状である。 ■本が好きな生徒とそうでない生徒で図書館利用の頻度の差が大きい。 ■過半数の子の読書量が少ない。
	読むジャンル等が限られていること （12 件）	■特定のジャンルや作家しか読まない生徒が多い。 ■メディアミックスの本や話題の本に人気が集中し、純文学の本があまり読まれない。 ■朝の読書で生徒から用意されるものがケータイ小説などであることも多く、本来の読書活動につなげきれていないのではないかというところに課題を感じる。

※全回答件数は 56 件である。

④高等学校

- 高等学校からは、「読書の状況の個人差が大きく見られる」という主旨のことに加え、「勉強・部活動の影響やスマートフォン普及等の影響等で読書の時間が取れていない」といった主旨のことが課題として多く挙げられていた。

図表 3-3-6　高等学校における課題認識（回答例）

段階	分類	回答内容（要約・抜粋）
高等学校	読書時間・図書館利用頻度等の個人差 （62 件）	■読書時間が 0 時間という生徒もいる一方で、毎日読書する生徒もおり、読書量に個人差がある。 ■よく本を読む生徒とそうではない生徒との差が大きく、読書量の少ない生徒に本に関心を持たせる良い方策が見つからない。 ■各クラス数名、継続的に図書館に来る者はいるが、来ない者はほとんど来ない。
	読書をする時間がない （61 件）	■学習活動も部活動も盛んに行われており、生徒の図書活動（読書）時間確保が難しい。 ■生徒が忙しすぎて、じっくり読書する時間がない。 ■スマートフォンを見ている時間が長いため、読書にあてている時間が減少している。

※全回答件数は 228 件である。

《読み取れること・ポイント》

★ 幼稚園では、家庭での保護者による読み聞かせ等が推奨されているが、家庭により実施できていない保護者がいることが課題となっている。小学校でも、一斉読書の時間等により学校内での読書時間は確保できているが、家庭での読書が十分になされていないのではないかということが課題認識として持たれている。

★ 中学校・高等学校では、本を読む生徒と読まない生徒との差が広がっている状況にあることが課題認識として示され、読んでいる場合であってもジャンルの偏り等があることが指摘されている。また、これらの学校段階では特に、「時間が取れない」ことも課題認識として示されている。

第４章

子供の読書推進のための取組状況

第４章　子供の読書推進のための取組状況

第 2 章・第 3 章における分析により、子供の読書の実態や課題等について把握することができた。これらをふまえた上で、第 4 章では、まず第 3 章で分析を行った保護者を対象としたアンケート調査から家庭で行われている子供の読書を増やすための取組について整理し、さらに、本調査研究の目的Ｂとして設定した、「各自治体（都道府県、市区町村）で実施されている子供たちの読書推進に関する取組のうち、地方公共団体、学校、図書館、民間団体、ボランティア等の連携・協力により実施されている取組について、その連携・協力手法等に着目して調査・分析を行い、特徴等を明らかにする」に関して、得られた情報の整理等を行った。

１．家庭での取組状況（「a-2 保護者対象調査」より）

- 子供の読書量等を増やすための家庭での取組は、「図書館や書店に一緒に行くこと」「本を買ってあげたり本を贈ったりすること」「本を読むように声かけや指導をすること」など、子供が本を読む機会を増やそうとすることが中心となっているようである。また、「一緒に本を読む」ということも、意識的に行われている家庭があることがうかがえる。
- このほか、子供の読書推進に関する地域の取組への参加として、保護者自身が学校や地域における読み聞かせ講座に参加したり、ボランティア等として活動したりしているという回答が見られた。

図表 4-1-1　家庭で意識的に行っていることや参加等していること（回答例）

分類	回答内容（抜粋）
図書館や書店に一緒に行くこと（90 件）	■家族全員で図書館に行く習慣を持つようにしている。 ■なるべく書店に行き、話題の本に目を向けるようにして、興味を持ってもらえるようにしている。
本を買ってあげたり本を贈ったりすること（66 件）	■誕生日やクリスマスに本をプレゼントする。 ■最近は本の読みきかせをすることもなくなったので、本が欲しいといった時には、なるべく買ってあげるようにしている。
保護者から子供に本を薦めること（53 件）	■映画やテレビで放送されたものの原作本などをすすめてみる。 ■親が新聞の書評に目を通し、子供に興味がありそうな内容なら要約して子供に教える。
保護者と一緒に本を読むこと（41 件）	■日曜の夜は 30 分くらい、家族で同じ時間に本を読む時間を作っている。 ■子供が本を読む時は、必ず親も何か本を読む。親がテレビを見ないようにしている。
本を読むように声かけや指導をすること（39 件）	■「本を読みなさい」という言葉を意識的に発している。 ■毎月 10 日、20 日、30 日はノーテレビデーにして、1 日中 TV をつけないようにしている。時間が余れば本を読みなさいと言っている。

図表 4-1-2　家庭で意識的に行っていることや参加等していること（回答例、続き）

分類	回答内容（抜粋）
家の手に取りやすい場所に本を置いておくこと（27 件）	■気軽に本を手に取ることが出来るように、居間に本棚を増やして読書しやすい環境を整えている。 ■読みそうな本やおすすめの本を市立図書館で借りてきて、リビングに置いている。
保護者自身が読み聞かせ講座やボランティア等へ参加すること（22 件）	■市立図書館で行われている読み聞かせ講座に参加している。 ■学校で読み聞かせをしているので、本を何冊か借りてきた時に子供にも読んでもらって、どれを読み聞かせに持って行って読むかアドバイスしてもらう。
読み聞かせをすること（13 件）	■現在は放っておいても本を読むので特に何もしていません。これまで意識的に行ってきたことは、0 歳の時からの絵本の読み聞かせです。

《読み取れること・ポイント》

★ 家庭では主に、図書館や書店に子供と一緒に行く機会を増やしたり、子供に対して直接的に本・読書を勧めたりする取組が行われている。

２．学校・教育機関での取組状況

（１）幼稚園（「b-1 公立幼稚園対象調査」より）

- 幼稚園での子供の読書推進に関する取組について、内容別に件数をカウントし、また、それらが連携・協力により実施されているものであるかを把握した。
- 比較的件数が多かった取組に着目すると、まず、園児に対する「読み聞かせ・おはなし会」については、回答のあったほぼ全ての園で実施されている。また、それらがボランティアやサークル団体等と連携して実施されて割合も高い。なお、関連する取組として、「劇遊び、劇・紙芝居の鑑賞」等も半数程度の園で行われている。
- また、保護者・家庭に対して絵本等の貸し出しが比較的多くの園で行われている状況にある。保護者に対して、本や絵本の読み聞かせの大切さに関する講演会を開催するなどの取組事例も見られた。
- このほか、公立図書館との連携により、「団体貸出・巡回図書館・移動図書館等の活用」や「本・絵本コーナー等の充実」を図っているとの回答が、それぞれ約４割となっている。

図表 4-2-1　幼稚園における取組：回答状況

取組内容	回答件数 （全回収件数に占める割合）	うち、連携・協力による実施件数 （回答件数に占める割合）
読み聞かせ・おはなし会等の実施	22（91.7%）	18（81.8%）
家庭への本・絵本の貸し出し	16（66.7%）	6（37.5%）
劇遊び、劇・紙芝居の観賞	11（45.8%）	6（54.5%）
団体貸出・巡回図書館・移動図書館等の活用	10（41.7%）	10（100.0%）
本・絵本コーナー等の充実	9（37.5%）	4（44.4%）
職員の研修	5（20.8%）	5（100.0%）
家庭への啓発・親子での取組推進	5（20.8%）	3（60.0%）
校種間連携による取組	1（ 4.2%）	1（100.0%）
公立図書館見学・ガイダンス	1（ 4.2%）	1（100.0%）

※幼稚園の全回収件数は 24 件。
※1 つの園から同じ取組内容の回答が複数あった場合には、1 件とカウントした。
※連携・協力先として「PTA」等の回答もカウントした。

《読み取れること・ポイント》

★ 幼稚園では、ボランティアやサークル団体等と連携するなどして、「読み聞かせ・おはなし会」を開催することが多く行われている。
★ また、家庭への本・絵本の貸し出しのほか、家庭への啓発・親子での取組推進といった保護者を対象とした取組を行っている園もみられる。

（２）小学校（「b-1 公立小学校対象調査」より）

- 小学校での子供の読書推進に関する取組について、最も多く行われているのは児童に対する「読み聞かせ」であり、またこれらに取り組む学校の多くが、ボランティア等との連携・協力により「読み聞かせ」を行っている。
- また、必ずしも連携・協力による取組ではないが、「一斉読書の時間の設定」が行われている学校が多く、関連して「読書量の目標設定や多読者に対する表彰」が行われている学校も少なくない。
- 連携・協力による取組としては、公立図書館との連携・協力により、図書の定期的な貸し出しや、蔵書・コーナーの充実、調べ学習等の際に必要に応じた図書の提供等が行われている学校が見られる。
- このほか、「家庭への啓発・親子での取組推進」を実施している学校が、約３割で見られた。

図表 4-2-2　小学校における取組：回答状況

取組内容	回答件数 （全回収件数に占める割合）	うち、連携・協力による実施件数 （回答件数に占める割合）
読み聞かせ	111（89.5%）	108（97.3%）
一斉読書の時間の設定	71（57.3%）	5　（7.0%）
読書量の目標設定や多読者に対する表彰	54（43.5%）	2　（3.7%）
図書館を活用した授業・調べ学習の実施	51（41.1%）	17（33.3%）
学校図書館環境整備、蔵書・コーナーの充実	49（39.5%）	20（40.8%）
図書委員会・文芸部等の活動充実	48（38.7%）	0　（0.0%）
団体貸出・巡回図書館・移動図書館等の活用	47（37.9%）	47（100.0%）
本の紹介・PR の強化、図書便り等の発行	37（29.8%）	0　（0.0%）
家庭への啓発・親子での取組推進	36（29.0%）	6（16.7%）
読書週間・読書月間等の企画実施	32（25.8%）	4（12.5%）
読書感想文等コンクールへの参加	26（21.0%）	0　（0.0%）
読書会、ブックトーク、ビブリオバトル等の実施	25（20.2%）	12（48.0%）
図書館ガイダンス・オリエンテーション実施	19（15.3%）	4（21.1%）
児童による選書	4（ 3.2%）	4（100.0%）
その他	8（ 6.5%）	2（25.0%）

※小学校の全回収件数は 124 件。
※1 つの学校から同種の取組内容の回答が複数あった場合には、何件の回答があっても 1 件とカウントした。従ってここでの回答件数は該当する取組を行っている学校数である。

《読み取れること・ポイント》

★ 小学校においても、ボランティアやサークル団体等と連携するなどして、「読み聞かせ」がほとんどの学校で実施されており、家庭への啓発等も比較的多くの学校で行われている。
★ また、学校内での取組としては、一斉読書の時間が設定されている学校が多く、読書量の目標設定や多読者への表彰を行うなどして、児童の読書量増進が目指されている。

（３）中学校（「b-1 公立中学校対象調査」より）

- 中学校での子供の読書推進に関する取組について、最も取り組んでいる学校が多かったのは、必ずしも連携・協力による取組ではないが、「一斉読書の時間の設定」である。
- 次いで、「図書館環境整備、蔵書・コーナーの充実」を挙げる学校が比較的多くなっているが、これらの取組を公共図書館や保護者・ボランティア等との連携・協力により行っている学校は４割を超えている。
- このほか、連携・協力により実施されている取組として、公立図書館からの図書の定期的な貸し出し等のほか、「読み聞かせ」が挙げられるが、「読み聞かせ」については、聞く側ではなく、小学生や幼稚園児等に対して実施する側としての取組も見られている。

図表 4-2-3　中学校における取組：回答状況

取組内容	回答件数（全回収件数に占める割合）	うち、連携・協力による実施件数（回答件数に占める割合）
一斉読書の時間の設定	38 (65.5%)	1 (2.6%)
学校図書館環境整備、蔵書・コーナーの充実	35 (60.3%)	15 (42.9%)
本の紹介・PR の強化、図書便り等の発行	28 (48.3%)	2 (7.1%)
図書委員会・文芸部等の活動充実	27 (46.6%)	0 (0.0%)
図書館を活用した授業・調べ学習の実施	22 (37.9%)	7 (31.8%)
読み聞かせ（注１）	20 (34.5%)	14 (70.0%)
読書感想文等コンクールへの参加（注２）	19 (32.8%)	2 (10.5%)
団体貸出・巡回図書館・移動図書館等の活用	17 (29.3%)	17 (100.0%)
読書量の目標設定や多読者に対する表彰	15 (25.9%)	0 (0.0%)
読書会、ブックトーク、ビブリオバトル等の実施	14 (24.1%)	2 (14.3%)
図書館ガイダンス・オリエンテーション実施	14 (24.1%)	0 (0.0%)
読書週間・読書月間等の企画実施	7 (12.1%)	1 (14.3%)
家庭への啓発・親子での取組推進	4 (6.9%)	3 (75.0%)
生徒による選書	2 (3.4%)	2 (100.0%)
その他	8 (13.8%)	2 (25.0%)

注１「読み聞かせ」のうち９件は、中学生が実施する側としての取組である。
注２「読書感想文等コンクールへの参加」に関して、コンクール主催者を連携・協力先に挙げている場合も、「連携・協力による実施件数」としてカウントした。
※中学校の全回収件数は 58 件。
※1 つの学校から同種の取組内容の回答が複数あった場合には、何件の回答があっても 1 件とカウントした。従ってここでの回答件数は該当する取組を行っている学校数である。

《読み取れること・ポイント》

★ 中学校では、必ずしも連携・協力により取り組まれているわけではないが、一斉読書の時間が設定されている学校が比較的多い。
★ 小学校と比較して校内での読み聞かせを実施している学校は少ないが、学校図書館の環境整備、蔵書・コーナーの充実等の面では、外部との連携・協力による取組事例が見られる。

（４）高等学校（「b-1 公立高等学校対象調査」より）

- 高等学校での子供の読書推進に関する取組については、「本の紹介・PR の強化、図書便り等の発行」を行う学校が最も多い。以下「読書感想文等コンクールへの参加」「学校図書館環境整備、蔵書・コーナーの充実」「図書館ガイダンス・オリエンテーション実施」と続いている。
- また、小学校や中学校と比較して、「一斉読書の時間の設定」と回答した学校の割合は低く、公立図書館との連携・協力による「団体貸出・巡回図書館・移動図書館等の活用」についても、回答が見られたのは全体の５分の１程度となっている。
- 他方で、「読書会、ブックトーク、ビブリオバトル等の実施」については、小学校や中学校と比較して回答した学校の割合が高くなっている。

図表 4-2-4　高等学校における取組：回答状況

取組内容	回答件数（全回収件数に占める割合）	うち、連携・協力による実施件数（回答件数に占める割合）
本の紹介・PR の強化、図書便り等の発行	163（70.3%）	3　（1.8%）
読書感想文等コンクールへの参加（注）	110（47.4%）	35（31.8%）
学校図書館環境整備、蔵書・コーナーの充実	96（41.4%）	24（25.0%）
図書館ガイダンス・オリエンテーション実施	96（41.4%）	2　（2.1%）
読書会、ブックトーク、ビブリオバトル等の実施	76（32.8%）	11（14.5%）
一斉読書の時間の設定	76（32.8%）	1　（1.3%）
図書委員会・文芸部等の活動充実	71（30.6%）	2　（2.8%）
図書館を活用した授業・調べ学習の実施	56（24.1%）	15（26.8%）
団体貸出・巡回図書館・移動図書館等の活用	49（21.1%）	49（100.0%）
読書週間・読書月間等の企画実施	32（13.8%）	1　（3.1%）
読書量の目標設定や多読者に対する表彰	23　（9.9%）	1　（4.3%）
読み聞かせ（注）	22　（9.5%）	18（81.8%）
関連するテーマの講演会・講座等の開催	17　（7.3%）	7（41.2%）
文化祭での取組実施	14　（6.0%）	2（14.3%）
古本の活用・バザー等	12　（5.2%）	2（16.7%）
生徒による選書	4　（1.7%）	3（75.0%）
家庭への啓発・親子での取組推進	3　（1.3%）	3（100.0%）
その他	24（10.3%）	5（20.8%）

注「読書感想文等コンクールへの参加」に関し、コンクール主催者を連携・協力先に挙げている場合も「連携・協力による実施件数」としてカウントした。また「読み聞かせ」のほとんどは高校生が実施する側としての取組である。
※高等学校の全回収件数は 232 件。
※1 つの学校から同種の取組内容の回答が複数あった場合には、何件の回答があっても 1 件とカウントした。従ってここでの回答件数は該当する取組を行っている学校数である。

《読み取れること・ポイント》

★ 高等学校で、最も多く行われている読書推進のための取組は、本の紹介等の情報提供となっており、小学校・中学校と異なっている。
★ また、「読書会、ブックトーク、ビブリオバトル等」も小学校・中学校に比べて取り組む学校の割合が高くなっている。

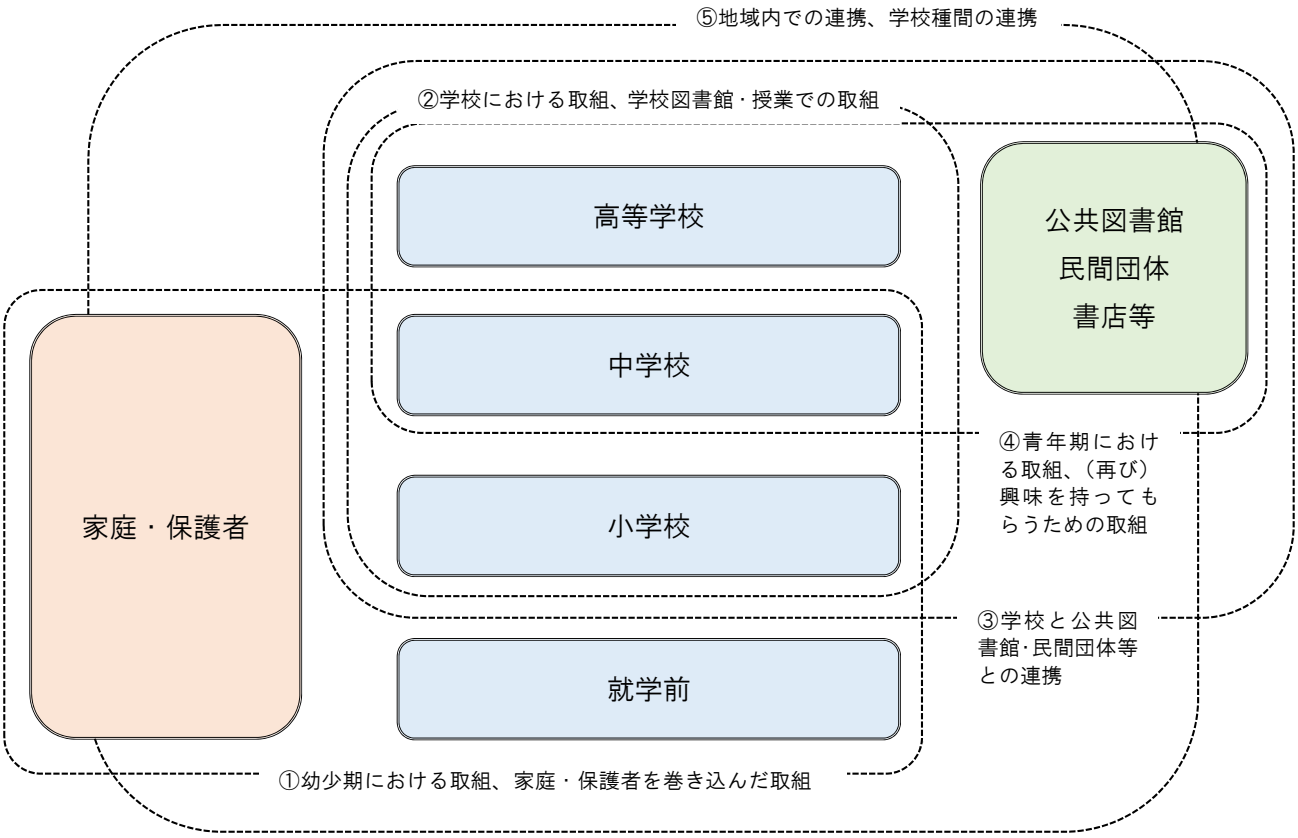
３．内容・テーマ別の取組の詳細状況

上記にて、家庭での取組、ならびに、幼稚園・小学校・中学校・高等学校における取組状況の概略を整理したが、これらの回答結果をふまえつつ、以下の図表 4-3-1 のように、子供の教育段階別に、対象範囲・領域の想定をし、「①幼少期における取組、家庭・保護者を巻き込んだ取組」「②学校における取組、学校図書館・授業での取組」「③学校と公共図書館・民間団体等との連携」「④青年期における取組、（再び）興味を持ってもらうための取組」「⑤地域内での連携、学校種間の連携」の内容・テーマ別に、いくつかの取組事例に関して「詳細調査」を実施した。

詳細調査によって得られた情報については、取組の概要及び、実施に至る経緯・背景、必要とした資源（費用、人的資源、ノウハウ）、成果、課題等について一覧にして整理し、さらに、一部の取組に関しては、ヒアリング調査を実施し、「事例紹介」として、より詳細な情報について整理した。

なお、詳細調査、ならびに、ヒアリング調査については、「効果がある」「よい取組である」という点に関して検証等した上で実施をしたわけではなく、できるだけ「多様な取組を取り上げる」という主旨のもとで実施した。したがって、本報告書に掲載した取組事例等が、必ずしも全国的にみて先進的であるというわけではない点には留意が必要である。他の地域で同様の取組等を実施しようとした際に課題になることや、参考になること等の情報を得ることを主な目的として、調査の実施及び情報の整理を行った。

図表 4-3-1　子供の読書推進のための取組の内容・テーマ別の対象範囲・領域イメージ



①幼少期における取組、家庭・保護者を巻き込んだ取組

- 「幼少期における取組、家庭・保護者を巻き込んだ取組」として、詳細調査により、「a. 職員・PTA による園文庫の絵本整理・修理」「b. PTA 主催の読み聞かせ講習会」「c. 読書ボランティア養成講座」「d.『わくわくブック事業』」「e.『満点カード』『読書通帳』等の子供向け企画の充実」の５つの事例について情報が得られた。
- a～c は主に保護者を対象にした取組であり、d と e は、幼少期の子供自身を対象とした取組である。このうち、高知県において実施されている「c. 読書ボランティア養成講座」、潟上市図書館で実施されている「d.『わくわくブック事業』」に関しては、ヒアリング調査も実施した。

a. 職員・PTA による園文庫の絵本整理・修理（幼稚園）

取組の目的・概要	○園文庫に保護者からも関心を持ってもらい、親子で絵本に親しむこと等を目的に、年数回、PTA による絵本修理を行う。
経緯・背景、必要とした資源・ノウハウ等	○親子で絵本により親しんでほしいという思いから、園文庫の貸し出しが行われているが、みんなで見る絵本をみんなで大切にするという考えのもと、PTA の活動のひとつとして位置づけられてきた。 ○「絵本分類のルールについての共通理解」や「古い絵本の処分についての判断」についてノウハウが必要であり、職員が保護者の方に修理の方法や分類の仕方を伝授しながら作業をしている。
成果・課題等	○大きな活動ではないが PTA 活動のひとつとして意味があり、作業しながらの親睦の場にもなっている。 ○園児が減少して保護者数も少なくなっていることで、活動も少しずつ見直しを図らなければならない時期にある。

b. PTA 主催の読み聞かせ講習会（小学校）

取組の目的・概要	○家庭や子供への読書推進を図ることを目的に、PTA 主催の読み聞かせ講習会を開催する。
経緯・背景、必要とした資源・ノウハウ等	○PTA からの要望等により開催され、学校図書館の司書経由で、公立図書館司書との連携により実施。 ○図書館司書が講師となり、保護者に読み聞かせの仕方について講義する。
成果・課題等	○読み聞かせボランティアの養成につながり、読み聞かせボランティアが各教室で読み聞かせができるようになった。 ○PTA 保護者が主体であることから、子供が卒業することにより人の入れ替えがあり、教室での読み聞かせの実施などについて、人員を確保するための予想をすることが難しい。

c. 読書ボランティア養成講座（高知県）

取組の目的・概要	○子供の読書推進にかかわる人材を養成するとともに、既存の読書ボランティアの資質向上を図ることを目的に、テーマ別の地区別講座や、全体講演会、出張講座等を開催する。
経緯・背景、必要とした資源・ノウハウ等	○県内の中山間地域に住む子供たちが本と触れ合う機会が少ない状況にあるということを背景に、学校を中心とした読書環境づくりにとどまらず、地域や社会全体で子供の読書文化の定着と風土作りを推進していく必要があるとの考えのもと、具体的方策として、読書ボランティアの養成が推進された。 ○「NPO 法人高知子どもの図書館」に業務を委託して実施。子供の読書活動に関する専門知識と多様な読書活動の技術、県内の読書ボランティアとの連携が必要な中で、ノウハウを有し、業務を遂行できる団体であった。
成果・課題等	○小中学校において読書ボランティアを活用している割合は増加している。 ○参加者同士の実践交流や課題等の意見交換をすることで、現在の活動内容や思い等を共有することができ、今後の活動への意欲化の向上につなげることができている。 ○既存の読書ボランティアの資質の向上は見られるが活動している人数は減少している。 ○同様の取組を行う場合には、専門的知識等を有する講師の確保や読書ボランティア団体との連携が必要。また、講座開催に係る財源の確保が必要になる。

⇒ヒアリング調査実施、事例紹介Ｂ　106～108 ページ参照

d.「わくわくブック事業」（小学校入学時に児童に希望図書を配付）（潟上市図書館）

取組の目的・概要	○ブックスタートのフォローアップ事業として、児童生徒の図書館利用促進等を目的に実施。 ○小学校就学時健診時、対象となる児童に、学校図書館職員・図書館員らが選書したおすすめ図書リストを配布し、１人１人から希望を取り、児童の希望図書を入学説明会時に図書館職員が手渡しでプレゼントする事業。
経緯・背景、必要とした資源・ノウハウ等	○ブックスタートの事業として、「妊娠時、母子手帳交付時に母親と胎児を対象に図書をプレゼント」「出産時、母親と赤ちゃんを対象に図書をプレゼント」を行ってきたが、図書館として児童サービスに力を入れていくことから、事業の枠組みを変更して実施した。 ○教育委員会と図書館との連携・打ち合わせ等が必要となる。また、対象児童人数分の図書の購入費が必要になる。
成果・課題等	○児童自身が選書することになることから、とても喜ばれ、自分で選んだ本なので大切にしているという声がある。また、保護者の立場から見ると、子供の読書傾向が把握できるという利点がある。 ○入学時、ひとりひとり手渡しでプレゼントするため、児童の心へ残る事業となっているが、読書推進の面から、どのように図書館利用へ繋げていくのかが課題となっている。

⇒ヒアリング調査実施、事例紹介Ｃ　108～109 ページ参照

e.「満点カード」「読書通帳」等の子供向け企画の充実（横手市立図書館）

取組の目的・概要	○子供の読書活動を推進するため、市立図書館全館で「満点カード」「読書通帳」の取組を実施。 ○「満点カード」は、小学生以下の希望者を対象にし、貸出図書１冊につき１点、100ページを超える図書については 100 ページにつき１点を読書満点カードに付与し、100 点に達した子供には、賞状及び副賞を授与する。 ○「読書通帳」は、利用者自身で日付・資料名を記載するもので、読書記録として活用することができる。
経緯・背景、必要とした資源・ノウハウ等	○市町村の合併に伴い、先んじて実施していた図書館にあわせて市立図書館全館で実施。 ○特別な人的資源等は必要ないが、副賞等についての購入費が必要になる。
成果・課題等	○楽しく読書活動に取り組むきっかけとなっており、満点に達しないとしても、挑戦しようという子供たちが増加傾向にある。 ○財源の面から、副賞の確保が課題となる。

《読み取れること・ポイント》

★ 幼稚園や小学校では、保護者に読書に関する取組に関わってもらうことで、家庭での読書推進等を図っていこうとする動きがあることがうかがえる。
★ また、小学校段階等においては、保護者が読み聞かせボランティアとして、子供の読書に関する取組に関わる機会があり、そのことを推進している状況にあることがうかがえる。
★ 公立図書館においても、ブックスタートをはじめ、幼少期の子供を対象とした取組が推進されていることがうかがえる。

②学校における取組、学校図書館・授業での取組

- 「学校における取組、学校図書館・授業での取組」として、詳細調査により、「a. 食育と読書のコラボレーション企画『ブックメニュー』」「b. 学校図書館を活用した授業の実施」「c. 読書会・討論会の実施」「d. 読書会・ビブリオバトルの実施」「e. 図書館教養講座」「f. 読書週間」の６つの事例について情報が得られた。
- a は小学校、b は中学校、c～f は高等学校における取組である。なお、c や d に関しては、取組自体は他の学校等でも行われているものであるが、ここでとりあげたのは、全学年・生徒全員を対象として実施されている事例である。
- 潟上市立天王小学校で実施されている「a. 食育と読書のコラボレーション企画『ブックメニュー』」と豊後大野市立朝地小・中学校での「b. 学校図書館を活用した授業の実施」に関しては、ヒアリング調査も実施した。

a. 食育と読書のコラボレーション企画「ブックメニュー」（潟上市立天王小学校）

取組の目的・概要	○給食指導の一環として、また、子供の興味・関心をかき立てる本を紹介し、読書意欲を喚起するとともに、本で得た知識と実際の体験を結び付ける場の一つとすることを目的として実施。 ○子供たちに伝えたい食材の特徴や食文化について、各学年の発達段階や実情に応じテーマを決め、テーマに沿った献立と本を準備し、学校サポーター（学校司書）によるブックトークや読み聞かせや、学校栄養士による栄養と調理についての講話を行う。
経緯・背景、必要とした資源・ノウハウ等	○子供たちの食に対する興味･関心をどう高めていくかが課題となっていたなかで、「食への意欲を高める読書体験」と、「読書を通して得た知識と実体験としての給食とを結び付ける」取組を行うことで、課題の解決につなげることができるであろうし、学校栄養士と学校サポーターとのコラボレーション企画として、学級担任等の協力を得て実施することになった。 ○学校サポーター、学校栄養士の両方にノウハウや知識等が必要であり、アイデアを実現するための、日頃からの教職員間の連携が必要であった。 ○授業や学級の活動に負担をかけぬよう、各学年部と相談し、朝活動の時間や読書タイムを利用して実施した。
成果・課題等	○「物語絵本」「科学絵本」「統計データ」等、幅広いジャンルの本を取り上げることで、普段なかなか手に取られない本の貸出の機会も増えた。 ○国語単元でも扱う内容について意図的に触れるようにし、教科等と関連付けることで横断的な学びができるという点でも効果があった。 ○学校サポーターが非常勤職員であり、学校栄養士も異動の可能性があるため、次年度の運営体制が確定しない。

⇒ヒアリング調査実施、事例紹介Ｄ　110～111 ページ参照

b. 学校図書館を活用した授業の実施（豊後大野市朝地小・中学校）

取組の目的・概要	○「①豊かな心と感性を培い、広い視野に立って考えることのできる力を身につける」「②図書資料を効果的に活用し、自ら考え、課題を解決していこうとする態度を養う」ことを目的に実施。 ○朝地中学校では、全ての教科・学年において、学校図書館を活用した授業を実施。
経緯・背景、必要とした資源・ノウハウ等	○市の教育委員会がすすめる事業に朝地小・中学校が連携して取り組むことになった（市の取組としては３年目）。 ○学校内で組織された図書館活用推進委員会を中心にして進められており、教職員は全員、図書館活用推進委員会のもとの３組織（読書センター推進部・学習情報センター推進部・ふれあいセンター推進部）に所属。 ○小中の９年間を見通した目標や指導内容の見直し、組織づくり、活用授業と校内研究テーマとのすり合わせ等が必要になる。
成果・課題等	○子供たちに図書館の本を活用できたと実感させることができた。 ○また、図書館活用・読書といったことを、教職員が意識しながら活動に取り組むことができた。 ○他の教育活動との整合性を図りながら、意図的・計画的な取組を推進していくことが必要である。 ○学校司書や司書教諭等の人的配置や、他の図書館との緊密なネットワークの構築などの面では、市教育委員会のバックアップが必要である。

⇒ヒアリング調査実施、事例紹介Ｅ　112～113 ページ参照

c. 読書会・討論会の実施（高等学校）

取組の目的・概要	○読書・討論を通じ、クラスの友人と深く理解しあうと同時に、あらためて読書の喜びを実感できるようにすることを目的に実施。 ○各クラスで本を選書し、クラス毎に購入。クラス全員が同じ本を読み、テーマを決めて、討論する。さらに、討論の記録をまとめ、小冊子を発行する。（1 年生・2 年生全員を対象に実施）
経緯・背景、必要とした資源・ノウハウ等	○学校独自の取組として、継続的に実施してきている。 ○各学年音担任・副担任、図書館課職員がサポートするが、あくまで生徒主体で運営している。 ○生徒のなかでも図書委員会の実行委員が指導的役割を果たし、1 年生と 2 年生との交流の場としても機能している。2 年生の図書委員が事前に 1 年生にオリエンテーションを行い、討論のノウハウ等についても伝達する。
成果・課題等	○普段読書をしない者も確実に 1 冊本を読むことになる。 ○グループワークを経てクラス討論に進む過程で議論が深まり、友人同士の関係も深いものになる。 ○生徒同士で討論ができるという土壌ができていないと実施は難しい。また、生徒のなかで意識の高い者ばかりとは限らず、運営が滞ることもある。

d. 読書会・ビブリオバトルの実施（高等学校）

取組の目的・概要	○「読書体験を共有し、意見交換をすることで相互理解を深め、自己表現能力を養う」「考える読書をとおして豊かな読書活動への契機とする」「発言力・思考力を養う」「プレゼン力の向上」を目的に実施。 ○1･2 年生では読書会（班ごとに話し合い、発表）、３年生ではビブリオバトル（班予選後、班代表による決勝戦をおこない、クラスのチャンプ本を決定）を実施。
経緯・背景、必要とした資源・ノウハウ等	○学校での取組として、継続的に実施。 ○会を成功させるため、係によるプレ読書会の実施をしたり、班で話し合う際の「助言役」を設置したりするなど工夫。 ○一度プレ読書会を経験している係を「助言役」として話し合いが盛んでない班を回らせることで、係と参加生徒の一体感がうまれる。
成果・課題等	○一時的にではあるが、図書の貸し出しが少量増える。また、継続して本を借りに来る生徒がでてくる。 ○読書会で、決まった解答がでるのではなく、生徒が自由に発言できる・考えるようにできるようになるものにするための工夫が必要。 ○職員・生徒どちらにもモチベーションの差がある中で、いかに楽しくかつ有意義な時間とするかについて、さらなる検討が必要である。

e. 図書館教養講座（高等学校）

取組の目的・概要	○図書館の利用者の増加をはかるとともに、知識・教養を得る情報発信の場所としての役割を持つことを目指し、学校図書館において、教職員が自らの研究分野や社会での経験を題材として講演を行う。また、関連分野の図書を紹介する。
経緯・背景、必要とした資源・ノウハウ等	○年に１回、教職員による講義が継続的に実施されている。 ○図書委員の意見をもとに、図書部教職員が講師の選定および講義の依頼を行う。宣伝広報活動および当日の司会進行は、図書委員が担当する。なお、学校の教職員が講師を務めるため、謝礼等は発生しない。 ○当日の参加者から意見や感想を聞き、会の運営等で反省点があれば次年度以降に活かされる。講義の概要は、年度末に発行される「図書館報」に掲載され、実施要項とともに記録として残される。
成果・課題等	○講座に関連する図書の展示・紹介を実施することにより、当日の参加者以外にも、図書館の利用者は増加している。また、高校生にとって有益な知識・情報を発信する場所としての役割も果たせている。 ○図書委員の生徒に運営の大部分を任せることで、生徒が主体的に活動する機会を増やすことができる。 ○部活動や課題研究と重なるため、参加を希望しても叶わない生徒がいる。日程等を可能な限り調整していくことが課題である。 ○講師を務める教職員の負担が大きいため、なかなか講師が決まらない年もある。講師の負担を軽減することが課題である。

f. 読書週間（高等学校）

取組の目的・概要	○生徒・教職員に図書館を知ってもらうことを目的として実施。 ○読書習慣に期間中に図書館に来れば貯まるポイントカードの配付や、部活動とのコラボ企画（美術部の作品を図書館に展示する等）を実施。
経緯・背景、必要とした資源・ノウハウ等	○学校図書館の活性化に、地区の学校図書館協議会とともに取り組んでおり、他校の実践例などを参考にして実施。 ○実施には図書館司書・生徒図書委員の活動が必要であるだけでなく、クラス担任の協力・連携等が必要になる。 ○また、独自の予算はないため、ポイントカードの景品等は地元の観光課などからの協力を得る。
成果・課題等	○読書習慣の期間中は貸し出しが増えるが、読書習慣が終わった後も継続して借りに来るような仕組みが必要。 ○部活動とのコラボ企画により、普段あまり図書館に来ない生徒が来館する。 ○全体の協力を得るため、図書委員などを活発に動かしていくなどの、学校司書の力量が求められる。 ○予算の制約が課題となる。

《読み取れること・ポイント》

★ 必ずしも外部の機関・団体等と連携・協力により実施されているものばかりではないが、学校図書館・授業で実施されている取組のなかにも、強く子供の読書推進を意識されている事例が見られる。

★ これらの取組に関しては、主に学校内部で実施されているものであることから、実施にあたっては、教職員間の連携・協力や、図書委員などの児童・生徒による主体的な活動が重要であることがうかがえる。

③学校と公共図書館・民間団体等との連携

- 「学校と公共図書館・民間団体等との連携」として、詳細調査により、「a．公共図書館の団体貸出・協力貸出等の計画的な利用」「b．書店との連携による選書会」「c．民間の学校図書館アドバイザー派遣」「d．中学生向けビブリオバトルの実施支援」の４つの事例について情報が得られた。
- a は、取組自体は比較的多くの学校で事例が見られるものであるが、学校と公共図書館との連携・協力に関する取組事例である。b についてもいくつかの学校での取組事例が見られたが、書店との連携・協力の事例となっている。
- 小学校の学校図書館を対象とした大分県の「c．学校図書館アドバイザー派遣」、公共図書館による学校支援の事例である清須市立図書館の「d．中学生向けビブリオバトルの実施支援」に関しては、ヒアリング調査を実施した。

a．公共図書館の団体貸出・協力貸出等の計画的な利用（高等学校）

取組の目的・概要	○学校の蔵書の不足を補って、授業や、生徒・教職員の様々な活動に必要な資料を提供するために実施。 ○学期ごとに県立図書館の団体貸出文庫から借り受けるほか、総合学習で生徒の研究に使う本を中心に、学校司書および関係の教職員計３～4 名で、選んで借りてくる。
経緯・背景、必要とした資源・ノウハウ等	○総合的な学習の時間の研究活動のテーマが多岐にわたるため、学校内の蔵書だけでは十分に対応できず、県立図書館の団体貸出資料を利用することになった。 ○団体貸出で、ある程度利用に応える事ができるが、なお不足する場合や、生徒と話をしていく中でより適切な資料が見つかったときは、協力貸出の制度を活用する。 ○本の借り受け・返却作業や、搬出入の際には、複数の教職員の協力のもと実施している。
成果・課題等	○蔵書不足を補うことができるほか、学校にいながら県立図書館の本が利用できることを知り、実際に利用体験をすることで、生徒が図書館の仕組みや役割についての理解を深め、公共図書館に親しむきっかけにもなっている。 ○実施・推進のためには、学校全体の理解と協力が必要になる。

b. 書店との連携による選書会（中学校、高等学校）

取組の目的・概要	○「本に親しみ、直接本を手にしてお気に入りの本を見つける」「読みたいと思える本に実際に触れることによって、本に興味を持たせ読書量の向上を図る」等を目的に実施。 ○体育館・図書館等に書店から借り受けた本をジャンル別に展示し、選書し、アンケート等で希望を取って購入図書を決定する。
経緯・背景、必要とした資源・ノウハウ等	○生徒が、図書館をもっと利用し読書量を増やすためにはどうしたらいいかという課題に対し、たくさんの良書に触れ、読書をしたくなる環境を作るために実施。 ○また、普段、部活で忙しかったり、大きな書店に行けなかったりする生徒にも希望の本を見つけてもらいたいという考えを背景に実施。 ○書店との連携・協力により、学校の年間計画の中で日程を決め、実施する。 ○図書の購入費が必要になる。
成果・課題等	○初めて図書館で本を借りた生徒がいたなどの成果が見られた。 ○場所の確保や、効率的なスケジュールの設定、ならびに、書店との連携が必要になる。

※「書店との連携による選書会」については、複数の取組事例をもとに情報の整理を行った。

c. 学校図書館アドバイザー派遣（大分県）

取組の目的・概要	○学校図書館を「読書センター」、「学習・情報センター」として活性化し、学力向上と豊かな心の育成を図るため、全ての小学校において学校図書館の昼休み・放課後の開館体制を整備するとともに、計画的に学校図書館活用教育の充実に取り組む市町村を支援することを目的として実施。 ○司書教諭と学校司書が連携して学校図書館活用教育の充実を図るため、専門的知見を有する学校図書館アドバイザーを小学校に派遣している。
経緯・背景、必要とした資源・ノウハウ等	○県の子供読書活動推進にあたり、子供にとって一番身近な図書館である学校図書館の環境の充実と授業活用が課題であるとの考えのもと実施。 ○小学校の司書配置を推進することや、研修機会が少ない学校司書のスキルアップを図ることも目的としている。 ○アドバイザー派遣は、手を上げた市町村の教育委員会や小学校において、連絡調整・進捗管理等の調整のもと実施。 ○市町村教育委員会では、アドバイザー派遣の事業効果を市町村全体へ普及するための「普及研修会」も開催する。
成果・課題等	○学校図書館の利用者、授業活用、貸出冊数の増加が見られる。 ○各学校図書館の分析にあわせて助言するため、弱い部分を的確に改善することができた。 ○学校図書館の改善を助言できる人材が少ないという点は課題である。 ○学校司書の専任配置校でないと、アドバイスに伴う学校図書館改善が難しい。また、学校全体の機運が高まらないと、図書館活用につながらない。

⇒ヒアリング調査実施、事例紹介Ｆ　114～115 ページ参照

d. 中学生向けビブリオバトルの実施支援（清須市立図書館）

取組の目的・概要	○「学校との連携強化」「中学生の読書活動推進」を目的に実施。 ○ビブリオバトル開催に向けて、教職員と図書館スタッフで行った模擬ビブリオバトルをビデオ撮影するなどし、授業３コマを使ってビブリオバトルを実施。
経緯・背景、必要とした資源・ノウハウ等	○中学校から、ノウハウがないため協力してほしいと要請され、ビブリオバトルの模擬ビデオの作成や、ビブリオバトルで紹介された本の図書館内での展示等を実施。 ○図書館でもビブリオバトルをイベントとして開催したことがなかったため、ノウハウを知るために、図書館スタッフ内でビブリオバトルを実施した。 ○ビブリオバトルの模擬ビデオ撮影に図書館スタッフ３名、教諭１名が参加。授業は教諭１名が担当、図書館スタッフがビブリオバトルのバトラーとして１名ないし２名が参加して実施した。
成果・課題等	○ビブリオバトル開催にあったって、しっかり本を読んで準備している生徒が多く、適切な指導をすることで読書を促すことができるのではないかと実感できた。 ○中学校で行ったビブリオバトルについて図書館内で紹介することで、中学校以外の市民にもビブリオバトルを知ってもらう機会を作れた。 ○実際に授業の中に組み込むことを考えたときに、担当教諭や学校への負担が生じることが予想でき、その点が課題となる。学校および担当教諭のビブリオバトルへの理解が条件として必要にある。 ○図書館主催のイベントとして開催することを考えた場合に、ビブリオバトルの認知度が低いことから、バトラーを集めるのに苦労するだろうということが予想できる。

⇒ヒアリング調査実施、事例紹介Ｇ　116～117 ページ参照

《読み取れること・ポイント》

★ 自治体・図書館と、学校図書館との連携・協力のあり方に関して、団体貸出等は比較的多く行われているのではないかと考えられるが、このほか、学校図書館アドバイザー派遣や、ビブリオバトル等の具体的な取組実施支援という形での関係性のあり方があることが把握された。

★ また、書店との連携・協力による取組として、選書会の取組事例が把握された。

④青年期における取組、（再び）興味を持ってもらうための取組

- 「青年期における取組、（再び）興味を持ってもらうための取組」として、詳細調査により、「a. 学校図書館での本の展示の工夫・柔軟な蔵書選定」「b.『よむよむ５（ファイブ）』」「『てこぽん（ティーンズコーナーポイント Get 大作戦！）』」「d.『こころときめく贈り物（著名人等による本の推薦・リーフレットの作成）』」「ｅ.『ヤングアダルトサービス連絡会』」の５つの事例について情報が得られた。
- これらはいずれも主に高校段階における不読率の高さについての課題意識等に基づき実施されている取組であると考えられ、a と b は学校独自の取組となっている。c~e は自治体・図書館による取組であり、特に、e は「ヤングアダルト」層に対するサービス等充実を目的とした、連携・協力の事例となっている。
- なお、これらに関しては、いずれもヒアリング調査にて、より詳細に情報の収集等を行った。

a. 学校図書館での本の展示の工夫・柔軟な蔵書選定（愛知県立緑丘商業高等学校）

取組の目的・概要	○書籍・図書館への「抵抗感をなくす」ことを最大の目的として実施。 ○「ビジュアル感をなるべく重視した展示（図書館マスコットキャラクターの設定等）」「本を探す手間をはぶくコーナーづくり（「平積み」コーナーに、「新着図書」「笑える本」「気楽に読める短編集」「ボーカロイドの本」等を設置）」「生徒が手に取る本を主体とした選書（マンガ・ライトノベルなどの分野をむしろ主体として選書）」「図書館の空間演出（メダカ・ザリガニの飼育、ぬいぐるみやフィギュアなどの展示等）」の取組を実施。
経緯・背景、必要とした資源・ノウハウ等	○図書館を敬遠している生徒や、「本」「文章」を人生とは無縁のものと決め付けて生きてきた生徒等の目を少しでも豊かな知へ向かわせ、世界を開かせたいという考えのもと、司書教諭が主体となって実施。 ○図書の購入費用が必要であるほか、生徒の世代の興味・関心・感性に対するアンテナを研ぎ澄ますように努めることと、その感性と教育者・本の専門家としての見識のバランス感覚が必要になる。
成果・課題等	○図書の貸出者数・貸出冊数・利用者数は、取組以前より確実に増加している。 ○他方、少なくとも全校の３分の２の生徒は、図書館と無縁な３年間を過ごしており、「活字と無縁で生きてきた」層の取組がいまだ不十分である。 ○選書に関して、生徒のニーズ（リクエストなど）によりそいすぎてしまう傾向がある。 ○予算の制約が課題になる。

⇒ヒアリング調査実施、事例紹介Ｈ　118～119 ページ参照

b.「よむよむ５（ファイブ）」（大分県立佐伯豊南高等学校）

取組の目的・概要	○「いろいろな本と出会うきっかけをつくり、生徒に主体的な読書姿勢を身につけさせる」ことを目的に実施。 ○各自のカードに読書予定の本をエントリーし、１冊読み終わるごとに感想を星の数で記入する（おもしろさ、読みやすさ、感動、おすすめ度）。記入したら１ポイント獲得し、５ポイント獲得ごとに図書館からプレゼントがもらえる。
経緯・背景、必要とした資源・ノウハウ等	○授業での調べ学習での図書館活用は行われていたが、本は授業中に「使う」ものでしかなく、楽しみながら、あるいはじっくり考えながら読むというような形の主体的な「読書」をしている生徒の姿が少ないという課題があった。 ○近隣校の取組を参考にして開始し、少しずつ改善をしながら続けてきた。 ○当初は図書館から提案した企画であるが、現在は学校教育目標を達成するための取組のひとつとして位置づけられており、授業や学年・ホームルーム・生徒図書委員会等の、様々な協力により実施されてきた。 ○予算はなく、プレゼントは生徒や教職員からの寄付や雑誌の付録等でまかなう。
成果・課題等	○取組実施前に比べて、貸し出しの冊数が２倍近くに伸びた。 ○生徒も教職員も同じ内容で実施しているため、本の情報交換の材料にしやすい。 ○予算の制約が課題になる。

⇒ヒアリング調査実施、事例紹介Ｉ　120～121 ページ参照

c.「てこぽん（ティーンズコーナーポイント Get 大作戦！）」（愛知県図書館）

取組の目的・概要	○「ティーンズコーナー（中学・高校生向けの図書等を集めたコーナー）」の利用者の読書意欲を喚起し、一層の利用促進を図るために実施。 ○利用者がお薦め本のＰＯＰを書くと、その枚数によってポイントがたまって図書館オリジナルグッズと交換できる利用者参加型の企画として実施。 ○提出されたＰＯＰは掲示され、一部はホームページにも掲載される。更に、集まったＰＯＰの中から利用者の投票によって「てこぽん大賞」を決めている。
経緯・背景、必要とした資源・ノウハウ等	○ティーンズコーナーで子供たちの興味を引くような本の案内をしたらどうかということが課題となった際に、大学生協等で実施されている読書マラソン等も参考にして、ＰＯＰ募集という利用者参加型の企画として実施された。 ○特別な財源はないためポイントカードやスタンプ、景品用図書館オリジナルグッズ等のデザイン、製作は全て職員が行っている。 ○企画運営は職員が行い、POP 掲示等の作業は嘱託職員（1 名）が行っている。
成果・課題等	○当初は多くの POP が集まり、また推薦本の貸出率もティーンズコーナーの平均貸出率よりも高くなり、一定の利用促進の効果が見られた。 ○「てこぽん」のキャラクターとして誕生したキャラクターが、ティーンズコーナーのキャラクターに成長して、宣伝等で活躍している。 ○今後は、POP 参加数が増加するよう広報に力を入れていく必要がある。また、新たなグッズの検討など来館者の関心を高めるための工夫が必要になる。

⇒ヒアリング調査実施、事例紹介Ｊ　122～123 ページ参照

d.「こころときめく贈り物（著名人等による本の推薦・リーフレットの作成）」（愛知県）

取組の目的・概要	○高校生の不読率の改善を目的とし、県内の国立・公立・私立高等学校、特別支援学校（高等部）、中等教育学校（後期課程）の図書館担当者、愛知県にゆかりのある著名人及び県内高校生からおすすめ本を推薦してもらい、それをリーフレットにまとめ紹介するとともに、各学校においても活用を促す。
経緯・背景、必要とした資源・ノウハウ等	○高校生の不読率の改善を実行するための具体的な事業の１つとして実施。 ○リーフレットの作成のほか、一人でも多くの高校生に推薦本の情報を届けるために、高校生向けフリーペーパーに、「高校生が友だちにすすめる 10 冊」や図書館担当者からのおすすめ本等の情報を掲載した。 ○愛知県ゆかりのある著名人から推薦本を掲載することで、高校生に少しでもリーフレットに興味を持ってもらう工夫をした。
成果・課題等	○おすすめ本を参考にして、各校図書館におすすめ本コーナーを設けるなど、学校図書館の環境づくりに貢献している。 ○リーフレットを題材に、各校学校図書館担当者等との情報交換をする機会が増えた。 ○予算制約があるなかで、生徒一人一人にどのように推薦された本の情報提供を行うかが課題となる。

⇒ヒアリング調査実施、事例紹介Ｋ　124～125 ページ参照

e.「ヤングアダルトサービス連絡会」（愛知県図書館）

取組の目的・概要	○愛知県公立図書館長協議会（県内公立図書館 69 館の館長を構成とする団体）に、ヤングアダルトに対するサービスに関する情報を広く収集し周知することを目的に、委員会（年２回程度）、総会・研修会（年１回）、ブックガイドの発行等を実施。
経緯・背景、必要とした資源・ノウハウ等	○愛知県公立図書館長協議会定例会での「ヤングアダルトサービス担当者の研究会や情報交換会を作ってほしい」という要望に対応する形で設置を決定。 ○委員会開催は日程調整が困難なため、開催はほぼ年に２回であるが、意見伺いや事項の決定等、メールで密な連絡が取られている。
成果・課題等	○研修会では講演や事例発表、情報交換会を行い、他館のサービス状況の情報を得たり、自館で抱える課題等の解決策を探ったりする場となっている。 ○ブックガイドは、各図書館で印刷して配布したり、掲載図書の展示コーナーづくりや POP として掲示されたりするなど活用されている。 ○同様の取組を実施する場合は、取りまとめ役としての事務局の設置が必要である。 ○課題を認識した後、実際に何をどうすればよいのかという対策について学ぶ研修会の開催が求められる。

⇒ヒアリング調査実施、事例紹介Ｌ　126～127 ページ参照

《読み取れること・ポイント》

★ 高校生の不読率の高さを課題認識とした取組について、高校内で実施されているもの、自治体・図書館により実施されているもののそれぞれについて事例が把握された。
★ 一部成果も見られているとされているが、多くの不読者が存在するなかで、取組の改善や更なる推進が課題となっていることがうかがえる。

⑤地域内での連携、学校種間の連携

- 「地域内での連携、学校種間の連携」として、詳細調査により、「a. 保育所・幼稚園・小学校・中学校における図書館ガイダンス」「b. 大学との連携による図書館教養講座の開催」「ｃ.『学校図書館教職員向け研修会』」「d.『学校図書館担当職員研修会』」「e.『愛知子ども読書活動推進大会』」「ｆ.『読書活動推進会』」「g.『大分県子ども読書活動推進連絡会議』」の 7 つの事例について情報が得られた。
- a は、保育所・幼稚園から中学校まで、同様の枠組みのなかで実施されている取組であるが、「村」という地域内で実施されている取組として、ヒアリング調査も実施した。b は高校と大学の連携・協力の事例である。
- c~g は、各自治体で実施されている、子供の読書推進のための研修会や連絡会議等の開催に関して、関係者間での連携・協力の事例である。なお、芸西村の「a. 保育所・幼稚園・小学校・中学校における図書館ガイダンス」は、「ｆ.『読書活動推進会』」による連携・協力とも関連して実施されている取組である。

a. 保育所・幼稚園・小学校・中学校における図書館ガイダンス（芸西村）

取組の目的・概要	○幼児及び児童生徒が地域の図書館に親しみ、その利用方法を知ることを目的に実施。 ○保育所・幼稚園では、参加日に親子で来館し、村立図書館の司書より図書館の利用方法等を聞いた後、本を借りる（保育所は 2 歳児と保護者、幼稚園は 4 歳児と保護者が対象）。 ○小中学校では、村立図書館の司書より、図書の配架及び分類、利用方法等の話を聞いた後、実際に本を借りている（全学年の児童生徒対象）。
経緯・背景、必要とした資源・ノウハウ等	○来館率向上や、図書館の正しい使い方の伝達を目的とし、村内の幼児及び児童生徒の読書活動推進の一環として実施が決定。新聞・資料の活用力が必要であることもガイダンス実施のきっかけとなっている。 ○年度当初の取組であるため、前年度の段階で、実施目的と時期を確認しておく。４月に入ったら、教育委員会がガイダンスについての要項を配付し、村立図書館との日程調整を行う。 ○村立図書館への引率は担任で、保育所、幼稚園は保護者も付き添う。ガイダンスの進行は村立図書館の司書が行う。
成果・課題等	○ガイダンス後の児童の図書館の利用状況がよい。 ○数値としては出していないが、親子（幼児と保護者）での来館率増加のきっかけとなっていると考えられる。 ○他の地域で同様の取組を実施するとすれば、中心となる機関が必要と考えられる。

⇒ヒアリング調査実施、事例紹介M　128～129 ページ参照

b. 大学との連携による図書館教養講座の開催（高等学校）

取組の目的・概要	○「幅広い知識と教養を身につけ、視野を広める」ことを目的に実施。 ○図書館教養講座として、大学教授により「どのような POP が効果的か」などに関する講座を開催。
経緯・背景、必要とした資源・ノウハウ等	○予算が全くないなかで、大学が無料で出張講座をしてくれたことから開催することができた。 ○学校図書館館長と大学教授が連絡を取り合い、生徒図書委員会活動のひとつとして実施。 ○図書館便りで生徒に参加を呼びかけ、開催した。
成果・課題等	○商業高校における普段の授業とは違う視線から、商業活動を捉えることができた。 ○一般の希望生徒の参加が少ない（部活動があり、参加しづらい）。 ○予算制約があり、他の講師を招くことができない。

c.「学校図書館教職員向け研修会」（秋田県立図書館）

取組の目的・概要	○高等学校・特別支援学校については、「学校図書館、図書委員会活動の活性化」、小中学校については、「学校図書館職員の資質向上、職員同士の交流の場づくり、市町村図書館と学校図書館の接点づくり」を目的として実施。 ○高等学校・特別支援学校については、「図書館運営やサービスに関する具体的な技術についての講義や情報交換」、小中学校については、「市町村図書館・公民館図書室が開催する研修会へ県立図書館職員の講師派遣」を実施。
経緯・背景、必要とした資源・ノウハウ等	○高等学校・特別支援学校向けは、「“元気アップ”Ｌ３４０事業」の実施に伴い、学校図書館支援を拡充したため（セット資料の貸出、研修会の実施等）で、小中学校向けは、「第２次県民の読書活動推進計画」において、学校図書館支援をさらに強化する方針が打ち出されたことにより実施。 ○県立学校・特別支援学校向けは、秋田県立図書館が中心となって研修会の企画・運営を行い、小中学校向けについては、県立図書館からの講師派遣により実施している。
成果・課題等	○高等学校・特別支援学校向けについては、生徒自身が参加することで、図書館運営のノウハウの習得や、自校の委員会活動の振り返りが可能となり、図書委員会活動の活性化につながっている。 ○小中学校向けについては、職員同士の交流や、市町村図書館と学校図書館の接点を持つことにつながっている。 ○実施にあたっては、図書館運営やサービスに関する具体的な知識や技術を備えた人材が必要であり、また、関係機関との連携が必要になる。 ○また、参加校間の図書館整備状況の差があるなかで、できるだけ多くの学校で成果が得られるような研修を実施する必要がある。

d.「学校図書館担当職員研修会」（能代市）

取組の目的・概要	○「読書指導、学校図書館運営に関する実践的な研修を実施し、様々な知識を得たり、技術を身に付けたりできるようにする」「市内小中学校と市立図書館等との連携を強化し、公立図書館の有効利用を促進する」「読書活動における市内小中学校の実践の共有化を図り、市全体としての読書指導、学校図書館の充実を図る」ことを目的として実施。 ○例年、年に１回開催し、当年度の市の読書活動推進計画の説明、研修（講話、実習）、担当職員同士の情報交換会を行う。
経緯・背景、必要とした資源・ノウハウ等	○当初は、市立図書館が主催で、主に学校図書館担当の教員、学校図書館で勤務する支援員を対象に市立図書館の事業説明やスキルアップ研修、情報交換を実施していた。 ○学校教育課でも読書活動についての研修会を実施しており、対象者や内容が重複することが多かったため、共催として研修を実施。研修を前後半に分け、前半の学校図書館業務の課題解決、スキルアップ等をテーマとして行う研修を市立図書館が担当し、後半の市の読書活動計画の説明等は学校教育課（教育研究所）の担当で実施している。 ○共催にしたことで、担当教員の出席も増え、支援員も交えての情報交換を行うことができ市の読書活動推進について方針や各校での事例、課題を共有できている。
成果・課題等	○市内の小中学生の不読率が低下している。 ○全市で統一的な学校図書館の運営及び子供の読書活動推進が図られており、学校図書館と市立図書館との連携が強化された。 ○実施にあたっては、学校図書館と市立図書館をつなぐ橋渡し役の部署が必要となる。

e.「愛知子ども読書活動推進大会」（愛知県）

取組の目的・概要	○子供の読書活動を推進するために、県内の子供の読書活動に関わる団体、図書館、学校等の関係者、子供の読書活動に関心のある方に対する研修の機会を設け、地域や学校等での活動の核となる人材の育成及びネットワーク化を図ることを目的として実施。 ○年に１回、「基調講演」「事例発表」「来場者参加型ディスカッション」「交流会」「愛知県図書館探検ツアー」からなる会議を開催。
経緯・背景、必要とした資源・ノウハウ等	○「愛知県子ども読書活動推進計画」の策定に基づき、開催が開始された。 ○学校・図書館関係者、読み聞かせ活動グループ等の関係者、教育事務所及び市町村教育委員会担当職員、子供読書活動に関心のある方等が参加。 ○年度ごとのテーマを設け、大会全体が一貫性あるものになるようにしている。基調講演と事例発表を関係あるものにし、参加者の視点がぶれない実施を心がけている。
成果・課題等	○参加者は学校関係者約 50%、市町村職員（図書館含む）約 20%、読み聞かせグループ約 20%であり、様々な場での活動の核となる人材の資質向上に寄与している。 ○参加者の約 50%が２回以上の参加であることから、本大会がネットワーク作りの一助となっていると考えられる。 ○参加者のさらなる資質向上とネットワーク作りのために、より専門的な分野別の研修や情報交換の場を設定するなど、大会全体の構成の検討が必要である。

ｆ．「読書活動推進会」（芸西村）

取組の目的・概要	○芸西村立図書館と学校図書館が連携を図りながら、芸西の子供の読書活動を推進していくための手立てを考えることを目的として実施。 ○年に 4～5 回、保育所・幼稚園・小中学校の図書担当者（各 1 名）、地域代表者（2 名）、村立図書館司書（1 名）、芸西村教育委員会（２名）が参加する会議を開催。
経緯・背景、必要とした資源・ノウハウ等	○「第二次高知県子ども読書活動推進計画」が策定される際に、保育所・幼稚園・小中学校及び村立図書館が連携して取組を行うことを目的に読書活動推進会が発足した。 ○年度当初に読書活動推進会において年間計画を確認し、計画に沿って取組を進めていっている。保幼小中の会員は、各機関と本会のパイプ役となり、取組内容や会での決定事項を伝達している。 ○実施日の調節のために各機関の行事を把握しておくことなどの対応が必要である。
成果・課題等	○各機関での図書館ガイダンス実施や「お薦めの１冊」の取組を連携して行うことで、村立図書館の利用率が高くなった。 ○読み聞かせや辞書引き指導等、講師招聘により、幼児・児童の意欲が高まっている。 ○保護者も巻き込んで、読書の楽しさや必要性をさらに啓発することが必要である。 ○他の地域で同様の取組を実施するとすれば、会議の運営にあたって、中心になる機関が必要であると考えられる。

⇒ヒアリング調査実施、事例紹介Ｎ　130～131 ページ参照

g.「大分県子ども読書活動推進連絡会議」（大分県）

取組の目的・概要	○子供の読書活動推進のための連携協力と、県計画の進捗についての検討・評価を行うことを目的として実施。 ○年に３回程度、学識経験者、図書館・学校・PTA・民間団体（読み聞かせグループ）・市町村行政・報道・保育所・幼稚園関係者等の委員からなる会議を開催。
経緯・背景、必要とした資源・ノウハウ等	○「第１次大分県子ども読書活動推進計画」策定により発足。 ○連絡会議の下で、こども子育て支援課、私学振興・青少年課、義務教育課、高校教育課、特別支援教育課、教育財務課、社会教育課、県立図書館の各担当者をもって構成される担当者会を開催し、協議事項を調整している。
成果・課題等	○いろいろな立場の子供読書関係者が協議することで、子供読書推進のために連携を強化することにつながっている。 ○担当者会による県の子供読書関係部署の連携体制と情報共有が、互いに連携して子供読書推進計画へ取り組む体制作りにつながった。 ○長期継続するためには、委員の旅費の確保など、継続して予算化が必要である。

《読み取れること・ポイント》

★ 各地域で関係機関・団体間の連携・協力の推進を意識した研修・会議の開催等がされており、情報共有等、一定の成果が出ていることがうかがえる。
★ ただし、小中学校対象の取組と高等学校対象の取組の枠組みが異なるなど、学校種によって異なる連携・協力の体制になっていることもあることがうかがえる。
★ なお、これらの連携・協力の推進のためには、中心となる機関が必要であるとの回答が見られている。

４．事例紹介

Ａ　複数部署の連携による、家庭での読書活動推進（秋田県庁）

＜取組の概要＞

庁内横断的な複数部署の連携による読書活動の推進

○秋田県では平成 22 年に「秋田県民の読書活動の推進に関する条例」を制定し、子供だけでなくすべての県民を対象として、読書活動の推進に取り組んでいる（巻末資料参照）。県知事を本部長とした「秋田県読書活動推進本部」のもと、教育委員会だけでなく、全庁一丸となって県民の読書活動推進に取り組んでいく体制構築を行った。

○県では「家庭での読書」を重点的なテーマとして取り上げ、家族で読書の楽しさを共有し、子供の頃から読書習慣を身に付けていくような環境を作っていくことを目的として、複数の部局が連携して家庭における読書活動を推進する取組を行っている。

○家庭での読書を推進する取組の例として、子育て支援課（健康福祉部）では子育て支援情報サイト「いっしょにねっと」上で絵本に関する情報を紹介したり、読み聞かせにおすすめの絵本を集めた「マザーズタッチ文庫」など保護者に向けた情報発信を行ったりしている。また、生涯学習課（教育庁）では「生涯にわたる読書の姿」（各ライフステージにおける、特徴的な読書の様子をまとめたリーフレット）を作成し、就学前施設の職員への研修会、親子を対象とした研修会等で活用している。総合政策課（企画振興部）でも「家族で読書おすすめ 50 選」という冊子を作成・配布するなどの取組を行っている。このほか、地域における子供の読書活動推進のため、県民から寄贈された児童書や絵本を収めた「スギッチリサイクル文庫」を空港や公共施設、医療機関など子供が集まる場所に設置するという取組も行っている。

○県立図書館でも、各市町村との連携による取組が進められている。県立図書館では、担当司書が市町村を訪問して読書環境づくりのノウハウや情報の提供等を行うなど、図書館を拠点とする読書推進や市町村間の格差を解消するためのフォローを行っている。

＜取組の経緯＞

読書推進条例の制定がきっかけとなり庁内の連携が始まる

○平成 13 年に「子どもの読書活動の推進に関する法律」が制定されたことに伴い、県教育委員会は「県民の読書活動推進計画」（計画期間：平成 15～19 年度）を策定し、子供を含めた全年齢の県民を対象に、全国に先駆けて読書活動の推進に取り組んできた。「第２次県民の読書活動推進計画」（計画期間：平成 20～24 年度）の期間中であった平成 22 年、県条例制定を受け、平成 23 年度に同計画を内包する形で「秋田県読書活動推進基本計画」が策定され、現在に至っている。

○なお、県が読書推進条例を定めたきっかけは、県議会における議員の発議であった。「秋田県を読書で盛り上げていこう」という意見に全議員の賛成が得られ、条例化が決まった。条例が制定される以前は読書に関する計画の推進担当は教育委員会であり、知事部局は推進メンバーに含まれていなかったが、条例化に伴って運営体制の充実・拡大が図られた。

＜取組に関する工夫や特徴等＞

読書活動推進本部（総合政策課）を県立図書館内に設置し連携体制を強化

○県庁が一丸となって読書活動推進に取り組んでいることがまず一番の特徴である。その上で、例えば、読書活動推進基本計画の進行管理と関連事業の連携を業務とする「秋田県読書活動推進本部（総合政策課県民読書推進班）」のオフィスを県庁から県立図書館内に移すなど、読書活動推進に関与する様々なセクション間の連携を図りやすくするための工夫がなされている。

○また、「県民読書の日」にちなんだ読書イベントを集中開催する「秋田県読書フェスタ」を県内すべての市町村で実施するほか、県の読書活動だより「むすぶ」による県内市町村の取組事例の紹介、県内の高校生を対象としたビブリオバトルの地区大会・全県大会の開催など、市町村を含んだ（巻き込んだ）全県での取組となるよう、工夫を行っている。

＜体制・組織、実施主体、連携の仕方等＞

読書活動推進本部を軸に部門横断的な体制を構築

○先述のとおり、秋田県では部門横断的な推進体制を構築しており、施策の総合的な推進のため、読書活動推進本部（総合政策課）が計画の進行管理や企業・民間団体等との協働、県民の読書活動に関する調査・研究を行っている。

＜成果・改善された点等＞

協働による取組体制の整備により、それぞれの得意分野を合わせた取組が可能に

○庁内で各課が互いに協力して読書活動を推進する体制を整えたことにより、各課がそれぞれの得意分野を合わせた取組ができるようになった。例えば、イベントを開催するにあたり、生涯学習課単体では小さな規模のものしかできなかったが、他のセクションと組むことで全県を対象とした大規模なものまで拡大できるようになった。「家族で読書おすすめ 50 選」の冊子についても、総合政策課の協力により、全県の小学校 1 年生を対象に配布することができるようになっている。

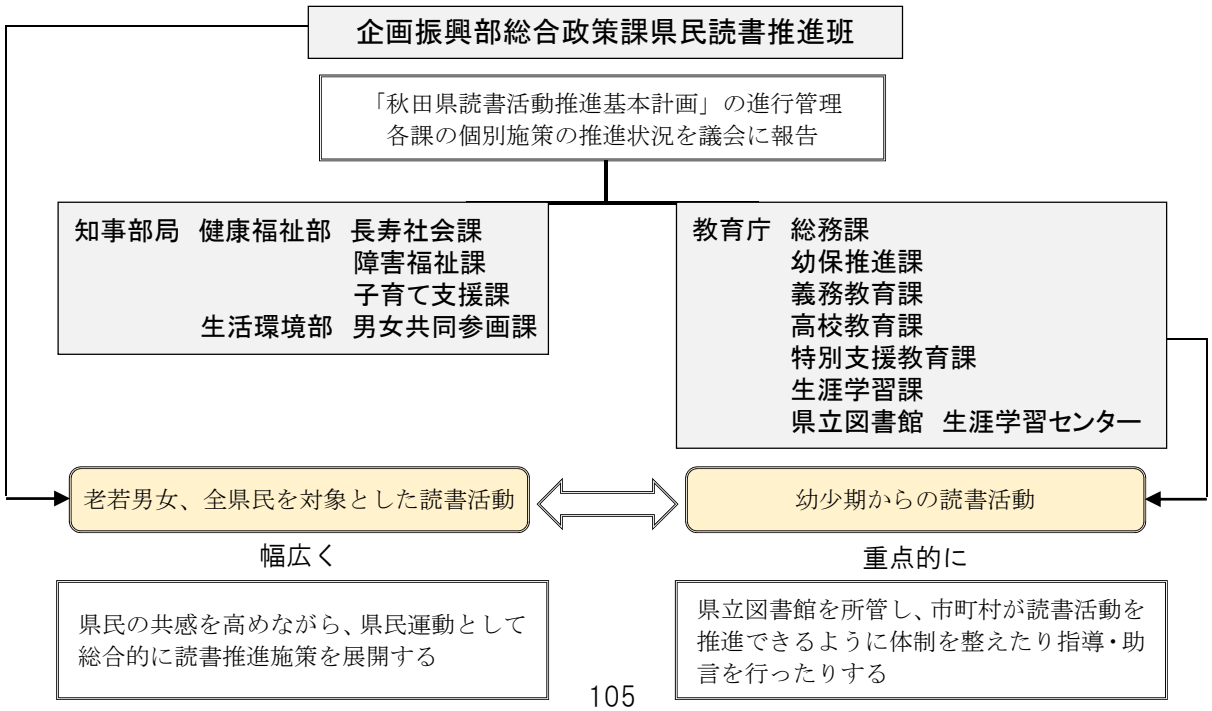
○県内の市町村に対する計画策定支援等の結果、平成 27 年度に県内全市町村で「子ども読書活動推進計画」が策定された。また、県内のすべての公立図書館で読書活動の推進に関するイベントを開催するようになっており、県内に多数の読書推進の拠点ができるなど、県全体として取り組むための土台が整ってきている。

＜今後の課題・展開の可能性＞

県の取組を市町村独自の取組として推進していく

○県では、今後の取組について「県が音頭を取らなくても、各市町村で自主的に取組を進めていくことができるようになっていくことが望ましい」と考えている。市町村が自主的な取組を実施できるよう、他の市町村における取組状況や取り組むに当たっての工夫などの情報提供を、継続的に行うほか、意見交換を通して司書確保や図書購入費等の共通課題の解決を図っていく。

図表 4-4-1　　秋田県庁における読書活動推進体制図



※秋田県教育庁提供資料を基に浜銀総合研究所作成

B　読書ボランティア養成講座の実施

（高知県教育委員会）

＜取組の概要＞

読書ボランティア養成講座で読書活動推進に関わる人のすそ野を拡大

○高知県では読書活動推進のための取組の一環として[24]、子供の読書活動推進に関わる人材の養成と既存の読書ボランティアの資質向上のため、読書ボランティア養成講座を実施している。

○読書ボランティア養成講座は、「地区別講座」、「全体講演会」、「出張講座」の３種類の講座で構成されており、読書ボランティアとしてすでに活動している人及び今後活動を希望する人を対象として実施されている。「地区別講座」は県内を３ブロック（東部・中部・西部）に分け、各ブロックで３回実施しているもので、平成27年度には「ボランティアの資質と役割」、「選書の方法」、「読み聞かせの方法」、「ボランティアの交流」をテーマに実施した。「全体講演会」では、全国的にも著名な講師による子供の読書活動にかかる講演を行い、また「出張講座」は読書ボランティア団体の求めに応じて、講義や実技指導などを行っている。

＜取組の経緯＞

子供が本と触れ合う機会を増やすために読書ボランティア養成の取組が始まる

○高知県には34の市町村があるが、そのうち公立図書館があるのは23市町村にとどまる。また、公立図書館のある市町村であっても、合併により市域が拡大している自治体もあり、公立図書館へのアクセスに課題を抱えている人が少なからず存在する。特に、中山間地では公立図書館の設置率が低く、子供が本とふれあう機会が少なくなっているという課題がある。

○子供の読書活動推進には、地域や社会全体で子供の読書文化と風土づくりを推進していくことが急務であり、そのための具体的方策として各地域で読書活動を推進していくための読書ボランティアの養成が必要であるという認識を持った。

○そこで、「第一次高知県子ども読書活動推進計画」に基づき、「子ども読書地域フロンティア事業」（平成19～20年度に実施：文部科学省委託事業）が実施され、このなかで地域の読書ボランティア養成のための講座を計画、実施したことにより、読書ボランティア養成講座が始まった。

○その後、平成21年度に「読書ボランティアリーダー養成講座」（文部科学省委託事業）として読書ボランティアの養成講座として、平成22年度からは「子どもの読書活動推進総合事業」（県の一般財源事業）を活用し、実施の継続を図っている。

＜取組に関する工夫や特徴等＞

続けて参加してもらうことで、スキルアップを図る

○年間３回の地区別講座は、「続けて参加してもらうことで、スキルアップを図る」ということを念頭にプログラムの作成を行っている。また、参加者のニーズに沿い、講座の中身のアレンジも実施している。

○受講者には既にボランティアに取り組んでいる方に加え、新規にボランティアを始めようとする人もいるが、県内には既に多くの読書ボランティア活動拠点があり、講座で習得した内容の実践が、すぐに行えるような仕組みが整っている。また、小中学校における読書ボランティア活用事例も多い。

○地理的な問題などで地区別講座への参加が難しい人のために、平成27年度から読書ボランティア団体の要請に応じて出張講座も行っている（出張講座の講師は、NPO法人高知こどもの図書館の理事及び職員が担当）。

○養成講座に直接関係するものではないが、高知県では「第二次高知県子ども読書活動推進計画」において、子供の読書活動を総合的に推進する体制の確立のために「読書活動推進のための熟議」という、市町村の教育委

[24] 『第二次高知県子ども読書活動推進計画』において、子供の読書活動を支える環境を整備するための推進の方策として「子どもの読書活動推進のための人材育成」が挙げられており、読書ボランティア養成講座は人材育成の具体的な取組として位置付けられている（巻末資料参照）。

員会や公立図書館、学校図書館、読書ボランティア等を対象とした研修会を実施した。多様な主体が一堂に会する場を持つことで、互いの情報共有や理解の促進、地域課題の共有といった効果を得られた。

＜体制・組織、実施主体、連携の仕方等＞

実績豊富で地域とのつながりのあるNPO法人に委託し事業を実施

○ボランティア養成講座の開催場所、日時や内容の調整、広報・参加者募集や諸所の事務処理、講座の運営などをNPO法人高知こどもの図書館に委託し実施している。同法人は保育所や幼稚園、学校での読み聞かせや読書ボランティアの養成講座などを行っており、実績豊富で地域とのつながりができていることなどを理由に、養成講座の委託先として選定している。

○また、県立や市町村立の図書館については、ボランティア養成講座の会場提供や職員が講座の講師となるなどの協力を得ている。

＜成果・改善された点等＞

中学校で読書ボランティア活用に改善傾向が見られる

○養成講座以外の取組の効果も合わせ、県内の読書活動を推進する環境づくりが進んできている。

○小中学校における読書ボランティアの活用について、平成26年度は小学校では70.1%、中学校では27.1%となっている。小学校については全国平均より低い値となっているが、中学校では以前より改善が見られ、全国平均に近い値となっている。

＜今後の課題・展開の可能性＞

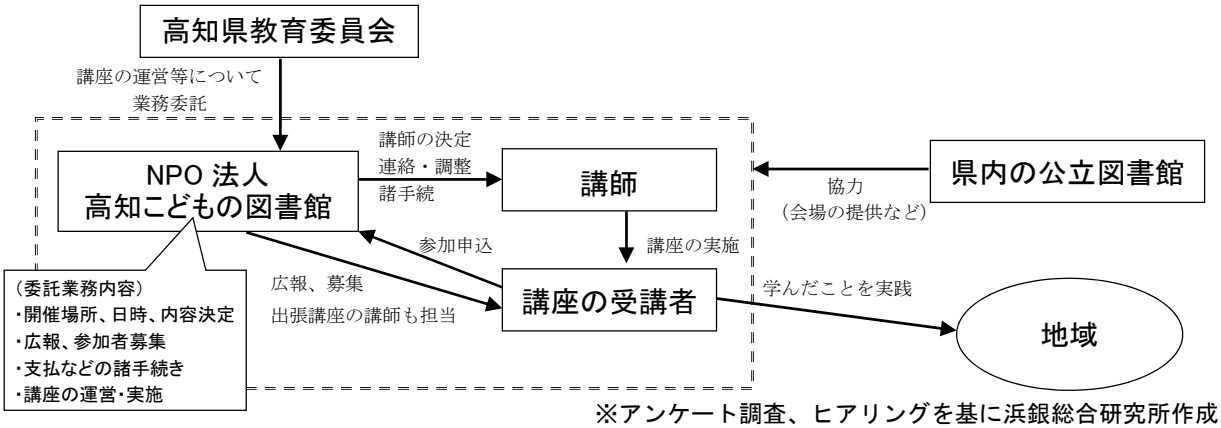
講座の実施方法の更なる改善

○ボランティア養成講座の参加者の減少、及び参加者の顔ぶれが固定化してきていることが課題となっている。高知県としては、読書ボランティアを増やしていきたいという意向を持っており、講座の実施方法などの改善を図っていく必要があるのではないかといったことが指摘されている。

○読書活動の推進について学校や図書館、ボランティアなどが単体で取り組むのには限界があり、互いの連携を図っていくことが重要である。様々な団体との連携、情報共有が必要だが、実際には個々の取組になっていることが少なくない。今後は個々の活動をまとめていくことが望ましく、地域の取組をまとめることのできる人材（行政、もしくは図書館など）が必要である。

○なお子供の読書推進については、平成24～28年度を計画期間とする「第二次高知県子ども読書活動推進計画」に基づき取組が進められている。県内市町村をみると、平成27年度末現在34市町村中５市町村で「子ども読書推進計画」が未策定であるが、策定にむけ準備を進めている。

図表 4-4-2　読書ボランティア養成講座に関する各主体の連携・協力のイメージ図



※アンケート調査、ヒアリングを基に浜銀総合研究所作成

Ｃ 子供に本を手渡す取組（ブックスタート・わくわくブック）（潟上市図書館）

＜取組の概要＞

小学校に入学する児童にリストの中から自身で選んだ本をプレゼント

○潟上市図書館では、保護者や小学生の図書館利用を促すために、「ブックスタート」と「わくわくブック」という取組を行っている。いずれも特定のタイミングで本や絵本を配布するというものであり、本のプレゼントをきっかけに、読書や図書館の利用につなげることを目的としている。

○「ブックスタート」は、４ヶ月集団検診の機会を利用して、保護者に対して絵本のセット（ブックスタートパック）をプレゼントするものである。月に一度実施されており、潟上市図書館から２名を検診会場に派遣し、本の手渡しと、読書や図書館に関する簡単な説明を行っている。

○「わくわくブック」は、これから小学校に入学するという児童全員に本を配布するという取組であり、小学校就学時健診（10 月）において児童に学校図書館職員・図書館員らが選書した推薦図書のリストを配布し、児童が希望する本をプレゼントするというものである。本は潟上市図書館の職員が保護者に手渡しており、その際には「ブックスタート」と同様に、家庭での読書や図書館利用に関する簡単な説明を行っている。

＜取組の経緯＞

図書館がブックスタート事業を引き継ぎ、より読書推進に効果的な方法に

○保護者や子供に対して本を配布する取組として、以前は潟上市教育委員会と潟上市福祉課（現在の社会福祉課）によって「ブックスタート１・２・３」が実施されていた。「ブックスタート１・２」は母子手帳の交付と同時に本を１冊、「ブックスタート３」は出産届を市役所に提出したときに１冊、それぞれ本をプレゼントする事業であった。

○しかしながら、教育委員会が定めた子育てに関する保護者向けの本の提供となっており、読書推進に直接的に繋がらない懸念があったことから、「ブックスタート１・２・３」の実施方法を見直し、また教育委員会から図書館が取組を引き継ぐこととなった。事業の見直しの結果、平成 26 年度から「ブックスタート１・２」に該当する部分が「ブックスタート」、「ブックスタート３」に該当する部分が「わくわくブック」として実施され、現在に至っている。

＜取組に関する工夫や特徴等＞

読書実態の把握もかねて、図書館員が直接本を手渡し

○「ブックスタート１・２・３」においては、配布する本の選書を教育委員会が行っていたが、平成 26 年度以降は「ブックスタート」で配布する本は NPO 法人ブックスタートが推薦するリストをもとに、児童書に対してより知識の深い図書館が選ぶかたちに改めた。「わくわくブック」については、図書館や市内の学校図書館の職員が作成するリストから希望するものを選べるようになっている。

○また、「ブックスタート１・２・３」では福祉課の職員が本を渡していたため、本を受け取る側の実態が図書館からは見えず、図書館の利用促進や読書推進に繋がっていなかった。そこで配布も図書館職員が直接本を手渡すような方式に改めた。

○なお、「わくわくブック」は、ブックスタートのフォローアップ事業という位置付けである。

＜体制・組織、実施主体、連携の仕方等＞

教育委員会、学校、図書館が連携して事業を実施

○「ブックスタート」は、NPO 法人ブックスタートとの連携・協力のもとで実施している。

○「ブックスタート」は月に１回、潟上市図書館から 2 名の職員を検診会場に派遣し、本の手渡しを行うとともに、保護者に家庭における読書のあり方と図書館利用に関する説明を実施している。

○「わくわくブック」に関しては、就学時健診（10 月）の際に図書館職員が各学校に伺い、事業について保護者への説明を行うとともに本のリストを配布。その後欲しい本に関する希望を取り、２月頃に市内各小学校にて開催される入学説明会において、図書館職員が保護者に直接本を渡している。なお、「わくわくブック」事業は教育委員会２名、図書館職員２名、図書サポーター５名で運営している。

○「ブックスタート」、「わくわくブック」ともに、他課や民間事業者と連携して行う事業なので、事前の連絡調整が重要である。

＜成果・改善された点等＞

保護者や児童のニーズに合った本のプレゼントが可能に

○配布する本の選書を図書館が担うようになったことにより、「ブックスタート１・２・３」のときよりも、保護者や児童のニーズに合った本をプレゼントすることができるようになった。

○「わくわくブック」は児童自身が選書するという仕組みを取っていることから、児童に非常に喜ばれている。保護者からも「子供の読書傾向がわかる」、「自分で選んだ本なので大切にしている」といった好意的な声が寄せられている。

＜今後の課題・展開の可能性＞

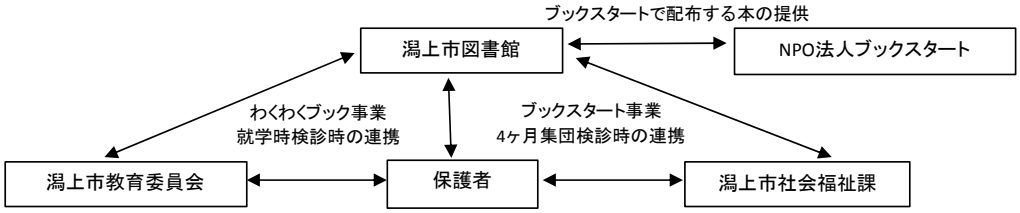
図書館の認知度の高まりを土台とした、図書館の利用促進

○読書推進の面から、「わくわくブック」を図書館利用にどのようにつなげていくかという部分が課題となっている。潟上市図書館の担当者からは、「わくわくブック事業では現状では保護者に本を手渡しているが、できれば子供たちに直接渡してみたい」という意見があった。

○「ブックスタート」や「わくわくブック」を通じ、児童や保護者のなかで図書館の認知は高まっていると考えられるが、あまり図書館に来ないような家庭に対してどのようにアプローチしていくかが課題である。早い段階から、図書館のよいイメージをつけていくことが重要であり、子供向けの読書推進活動以外に、子育て世代に向けた取組を行っていく必要がある。

○現在図書館に職員は複数いるが、ベテラン職員は一人であり、人事異動などによりノウハウが伝承されず、現在と同じような仕組みで取組が続けていけなくなるのではないかという懸念がある。

図表 4-4-3　ブックスタート及びわくわくブックの実施体制図



※ヒアリングを基に浜銀総合研究所作成

D 読書推進と食育を融合した校内連携の取組（ブックメニュー）（潟上市立天王小学校）

＜取組の概要＞

読書推進と食育を融合したブックトーク

○天王小学校では、平成 26 年度より「ブックメニュー」という取組を行っている。これは「食への意欲を高める読書体験」と「読書を通して得た知識と実体験としての給食とを結び付ける」ことで日頃から子供たちの食に対する興味･関心を高めるという目的を持って始められた取組である。

○ブックメニューでは、子供たちに伝えたい食材の特徴や食文化について、各学年の発達段階や実情に応じテーマを決め、テーマに沿った献立と本を準備し、学校サポーター（学校司書）によるブックトークや読み聞かせを行った後、学校栄養士が栄養と調理についての講話を行う。また、給食でブックメニューの題材となった食材や料理を実際に食べることにより、実体験を通じた学習ができるような仕組みになっている。

＜取組の経緯＞

給食を残す児童への対応策として学校サポーターと栄養士が発案

○天王小学校では、かねてより給食を残す児童が多いという問題があった。その中で、職員室での学校サポーターと栄養士との何気ない会話からブックメニューのアイデアが生まれ、県内の他の小学校における取組からヒントを得て、二人の間で「これならできるのではないか」という自信に至ったことから、ブックメニューの実施に向けた検討・準備が始まった。

○平成 26 年 4 月に最初のブックスタートを実施したときには、全学年の中でも特に給食を残す割合が高く、食に対する関心が薄いのではないかと思われる 2 年生を対象とした。2 年生の担任にブックメニューの実施について相談を持ち掛けたところ、賛同が得られ、実施の運びとなった。

○平成 27 年度からは、全学年に対象を拡大して実施している。

＜取組に関する工夫や特徴等＞

授業内容や給食メニューと連動するなど興味を持てるよう内容を工夫

○最初に 2 年生に対して実施したときは、4 時間目が終わって給食準備を行う前の時間に行った。その後においても、ほかの教科の迷惑とならないよう、時間帯などには気を配っている。天王小学校では読書の時間がもともと時間割の中に位置づけられており、ブックメニューのような取組を組み込みやすい状態になっていた。

○児童の発育段階や学級の個性に応じて情報量やブックトークの内容を調整するなど、適切に実施できるように工夫している。また、4 年生の総合的な学習の時間において味噌づくりを体験することになっており、また、3 年生の国語の授業で「姿を変える大豆」を学習するため、3 年生に味噌に関するブックメニューを実施するなど、学習活動と連携した取組となるよう工夫している。

○ブックメニューの実施以前にも食材に関する説明などは行っていたが、それ以上の効果を引き出せるよう、子供たちが興味を持ちそうな本を題材として選ぶようにしている。最初のブックメニューで用いた「ハンバーグ・ハンバーグ」（ほるぷ出版）も、本の内容のおもしろさを重視して選ばれた経緯がある。

＜体制・組織、実施主体、連携の仕方等＞

学校サポーターの有効活用により関係者間のコミュニケーションが円滑に

○潟上市は、市内の小中学校において学習活動の支援等を行う「学校サポーター」[25]を雇用しており、「ブックメニュー」は、この学校サポーターと学校栄養士によって実施されている。

---

[25] 一人の学校サポーターが、中学校区内の３校（小学校２校と中学校１校）を兼務する体制となっている。

○学校サポーターは教員免許を有し、調べ学習や学校図書館に関する授業のほか、教科の授業でも TT 支援を行う等、幅広く児童に対して学習支援を行っている。また、教員から教科の学習に関する相談を受けることもある。ブックメニューを担当している学校サポーターは教員として勤務した経験を有しており、教員や児童とのコミュニケーションに長けた人材である。このことが、天王小学校におけるブックメニューをはじめとした様々な取組を円滑に進めることに有効にはたらいている。

○ブックメニューの準備のため、潟上市図書館の学校図書館向け団体貸出（Katato）を活用している。また、市内の他校の蔵書についても情報を共有しており、互いに資料を融通することもある。

＜成果・改善された点等＞

児童の「食」に関する興味関心を引き出し、給食の残量も減少

○ブックメニューを通じて児童の興味・関心を引き出すことができ、食べ物に注目してもらうよいきっかけとなった。結果として、児童の毎日の給食に対する考え方が変わり、給食を残す量も減るといった効果があった。

○学校栄養士だけでは教員に対して新しい取組を提案していくことが難しいが、教員としての実務経験があり学校現場を良く知る学校サポーターの協力が得られたことで、話を通しやすくなり、全校でブックメニューに取り組む体制を作ることができた。現在では「子供たちの身になることがしたい」ということで校内の教職員の想いが一致し、ブックメニューへの協力が得られている。

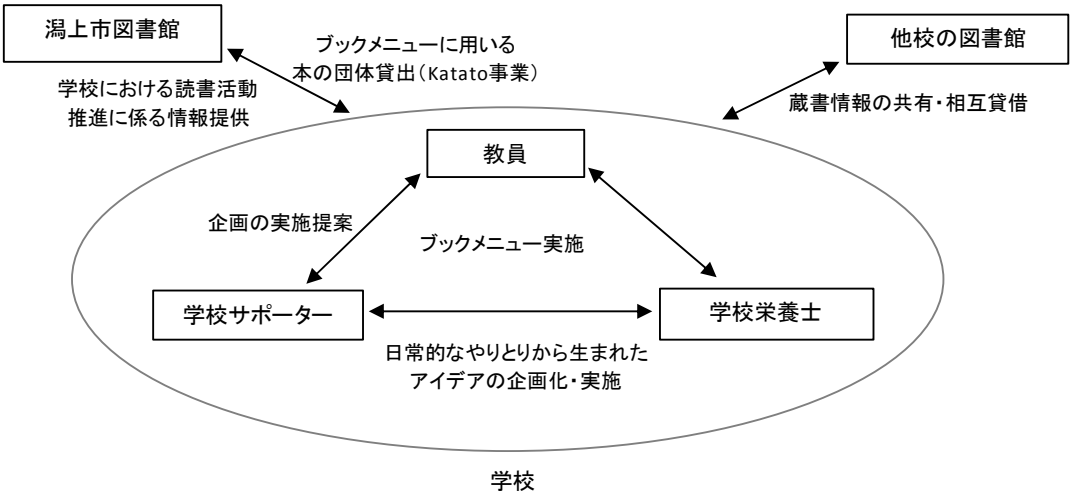
＜今後の課題・展開の可能性＞

人材の質に依存しないノウハウの横展開

○ブックメニューについて、ノウハウができ上がれば栄養士のいない学校でも実施できる可能性はあるが、現状においては、人材の質に依存しているところが大きい。

○学校サポーター、学校栄養士ともに人事異動があるため、今の恵まれた人員配置がいつまで続けられるかはわからない。現在の担当者が次年度も継続して天王小学校に勤務しているという保障がないため、次年度の活動計画の中にブックメニューを盛り込むことが難しいというのが現状である。

図表 4-4-4　ブックメニューの実施体制のイメージ図



※ヒアリングを基に浜銀総合研究所作成

E　学校図書館を活用した授業の実施

（豊後大野市立朝地小・中学校）

＜取組の概要＞

年間指導計画を定め、全学年・全教科で図書館を活用した事業を実施（全教科は中学のみ）

○連携型小中一貫校である豊後大野市立朝地小・中学校では、学校図書館を活用した授業を実施している。

○学校図書館を活用した授業の実施にあたり、まず年間指導計画を作成する。年間指導計画は学年ごとに作成され、学校図書館活用の目標を定めたうえで、教科ごとに「いつ」、どの「単元・題材」をテーマに、どのような「関連図書・関連コーナー」を活用するかをまとめる。なお、指導計画の策定は教員が主に行うが、学校司書は支援者として参加し、教員のアイデアの具現化の手伝いや必要となる情報や資料の収集を行っている。

○なお、教員と学校司書のコミュニケーションは「司書との連絡票」を用いて行われるほか、学校司書が常日頃からレファレンスインタビューを行い、教員のニーズ把握を行っている。

○学校図書館を活用した授業の内容は学年や教科ごとに多種多様であるが、多くの授業が学校図書館内のスペースを利用して行われる。小中一貫校であるため学校図書館のスペースにゆとりがあることと、クラスあたりの人数がそれほど多くないことから実現している。

○例えば、中学２年生の「国語」で実施された「『平家物語』主要人物小事典に加筆しよう」という授業は、授業のために揃えた 20 冊の様々な辞典を学校図書館に並べ、生徒が複数の辞典を参照しながら、求める情報を探し出して集めるという内容であり、課題解決能力や情報活用能力の育成を目指した授業構成となっている。

＜取組の経緯＞

学校図書館 TRY 事業の実践により、個別に取り組まれていた図書館活用授業を体系化

○豊後大野市教育委員会では、学校、家庭、地域が三位一体(Trinity:トリニティー)となって、それぞれの取組を改善・改革(Reform:リフォーム)し、子供たちの夢(ゆめ:Yume)の実現に向け、子供たちのがんばりを大人が支援する目的で平成 23 年度から「教育 TRY 運動」を実施している。

○この一環として市内の小中学校ごとにテーマを定め、「小規模校活性化 TRY」「食育 TRY」などと様々なテーマで教育推進事業を進めており、朝地小・中学校は学校図書館活用に特化した「学校図書館活用 TRY 事業」に平成 27 年度に指定された。

○同校では、「学校図書館活用 TRY 事業」の実践にあたり、これまで一部の教科や学年で取り組まれていた学校図書館を活用した授業を、体系的にかつ全校的に実施することとなった。特に朝地中学校では、全学年・教科において、学校図書館を活用した授業を実施することとなった。

＜取組に関する工夫や特徴等＞

授業準備等を通じ教員と学校司書とのコミュニケーションが活発に

○（「体制・組織」で後述するが）「学校図書館活用 TRY 事業」は学校全体で図書館を活用した取組となっており、また全ての教員が参加する形となっている。

○授業準備等を通じ、教員と学校司書とのコミュニケーションが活発となり、また学校司書が有効活用されている。また、学校司書が使う、学校や図書館を結ぶネットワークの広さや、その資料集めの的確さ・迅速さを改めて認識した教職員も少なくない。

＜体制・組織、実施主体、連携の仕方等＞

すべての教員が図書館活用教育に係る体制を整備

○同校には、豊後大野市の嘱託職員として、常勤の学校司書が１名配置されている。

○同校では、「学校図書館活用教育 TRY 事業」の拠点校指定をきっかけに、全ての教員が図書館活用教育にかかわる体制を校内で整備した。教務主任・研究主任・学校司書から構成される図書館活用推進委員会を中心的な組織とし、さらに「読書センター推進部（図書館整備部）」、「学習情報センター推進部（図書館活用授業部）」、「ふれあいセンター推進部（読書指導部）」の３つの教員組織を設置、全ての教員がいずれかの組織に所属するようにしている。

○情報・資料の収集にあたり学校司書は、学校図書館に蔵書が無いものについては他校の学校図書館や豊後大野市立図書館、大分県立図書館等から取り寄せる等、図書館間のネットワークを活用し、本や資料、情報の収集を行っている。

＜成果・改善された点等＞

教員間の連携に加え教員と学校司書との連携体制も改善

○年間指導計画に沿った学校図書館を活用した授業の実施率は２学期末までで、朝地小学校で 95%、朝地中学校で 75%。順調に計画通りに授業が行われている。

○本取組の振り返りの結果、「授業で図書館を上手く活用できましたか」という問いに対して、約９割の児童生徒が「とてもできた」または「できた」と回答。

○教員間の連携に加え、教員と学校司書との連携体制に改善が見られた。本取組が行われる以前は、図書館を活用した授業の実施にあたり前もって教員と司書が連絡を取ることが意識されておらず、授業が突発的に行われた結果、資料不足や著作権への配慮不足といった問題がみられていた。

＜今後の課題・展開の可能性＞

他校においても活用可能となるよう、授業や経験の記録作成

○学校図書館を活用した授業の記録（指導案・図書リスト等）をデータベース化するなど、他校においても活用可能な形にしていくことが検討される。

図表 4-4-5　朝地小・中学校における学校図書館を活用した授業の年間指導計画の例

小学校　第４学年　学校図書館活用　年間指導計画

		国語		総合		社会		理科	
		単元・題材	関連図書・関連コーナー	単元・題材	関連図書・関連コーナー	単元・題材	関連図書・関連コーナー	単元・題材	関連図書・関連コーナー
目標		○テーマに合った本や資料を探し、その必要なところを読むことができる。 ○辞典や百科事典などを使って調べることができる。 ○わかったことを選択してメモにとったり、絵や文を使って、新聞などにまとめることができる。							
4月									
5月				○野菜を育てて みんなで 食べよう ・野菜を 育てよう	6．農業 「そだててあそぼう」シリーズ 「やさいを育てて食べよう！」 シリーズ 「食育　野菜をそだてる」 シリーズ				
6月	○見学したこと を報告しよう	0．総記		○ごみの問題に ついて 考えよう	ポプラディア 「ごみとリサイクル」 「環境」 環境関連の本コーナー				
7月	○短歌の世界	8．言語 「短歌・俳句・川柳をつくって みよう」（ポプラ）　など						○星や月（1） ・星の明るさや 色	「四季の星座図鑑」 （４４３．フ） 「７月の星　七夕星まつり」 （４４０．フ）　など
9月				○野菜を育てて みんなで 食べよう ・冬野菜を 育てよう	6．農業 「そだててあそぼう」シリーズ 「やさいを育てて食べよう！」 シリーズ 「食育野菜をそだてる」シリーズ				
10月				○環境問題に ついて 調べよう	ポプラディア 「ごみとリサイクル」 「環境」 環境関連の本コーナー			○星や月（2） ・月の動き	
11月						○私たちの県の まちづくり	・県別歴史シリーズ４４ 「大分県」（ポプラ）　など		
12月	○読書発表会を しよう	「調べたことを発表しよう」 シリーズ（文研出版） 「①発表の方法や進め方を 考えよう」　など 0．総記							
1月	○ポスター セッションで 発表しよう	「調べたことを発表しよう」 シリーズ（文研出版） 「④みんなの前で発表しよう」 など 0．総記						○星や月（3） ・星の動き	「四季の星座図鑑（４４３． フ） 「１月の星　星はスバル」 （４４０．フ）　など
2月						○県の紹介 パンフを つくろう	・郷土資料コーナー		
3月									

※朝地小・中学校提供資料

F 学校図書館への専門的知識を有したアドバイザー派遣（大分県教育委員会）

＜取組の概要＞

学校図書館改善に向け専門的知識を有したアドバイザーを派遣

○大分県では、小学校の学校図書館に対し、専門的知識に基づいて学校図書館の改善プラン作成・アドバイス等を行う学校図書館アドバイザー（以下「アドバイザー」）を派遣する取組を平成 25 年度より実施している。一小学校につき 1 年間を期間として派遣され、平成 27 年度までの 3 年間で計 74 校にアドバイザーが派遣された。

○アドバイザー派遣の対象校は、派遣を希望する市町村の教育委員会の応募により決定されるが、アドバイザーの助言により学校司書を中心に改善を行うため、派遣校は学校司書が専任で配置されている小学校に限定される。

○具体的な実施方法は、まず 5 月に、派遣対象となった学校に担当アドバイザーが 2 日間かけて学校図書館を訪問。「学校図書館運営・管理」、「書架配置・本の並び方」、「蔵書冊数・構成」、「学校図書館を活用した授業支援」等の各観点から学校図書館を評価し、成果指標を含む『改善プラン』を作成、学校長、市町村主管課、県社会教育課に提案する。以後 7 月から翌年 2 月にかけ、毎月 1 回アドバイザーが訪問し、改善プランに掲げられた到達目標達成のために必要な助言・指導を、校長、司書教諭等図書館担当教員及び学校司書に対し実施する。また、概ね 4 ヶ月毎に改善プランの進捗状況を学校長、市町村主管課、県社会教育課に提出する。最後に、改善プランの終了に併せて評価項目を再評価し報告として取りまとめる。

○また、市町村教委は、アドバイザー派遣を受けた学校図書館の改善状況等を、派遣を受けていない学校にも事業効果を普及することを目的に、「普及研修会」を実施する。

＜取組の経緯＞

子供にとって一番身近な図書館である学校図書館の機能強化が必要

○大分県では、平成 25～27 年度の 3 カ年計画で、学校図書館を「読書センター」、「学習・情報センター」として活性化し、学力の向上と豊かな心の育成を図ることを目的に、「学校図書館活用教育支援事業」を実施している。

○地域の公立図書館が必ずしも全ての子供にアクセス可能な場所にない状況下において、子供にとって一番身近な図書館は学校図書館であるものの、小学校における学校司書の専任配置が進まないなか、「学校図書館活用教育支援事業」では、学校図書館の授業日開館の確保やボランティア活動の活性化を目指した「学校図書館ボランティア派遣支援」と、司書教諭と学校司書との連携による学校図書館活用教育の推進や学校司書の資質向上を目指した「学校図書館機能アップ支援」の 2 つの柱で事業を展開している[26]。

○国の制度を活用した「学校図書館ボランティア派遣事業」を進める一方、学校図書館の機能強化により学校図書館活用教育の充実を図るべく「学校図書館アドバイザー派遣」事業が実施されることとなった。

＜取組に関する工夫や特徴等＞

定期的な訪問により改善度合いを「見える化」

○学校図書館診断シート（管理運営・活用状況確認）、学校図書館整備・館内整備状況確認シートなどを活用し、客観的に自校の学校図書館の強み・弱みが把握できるような仕組みとなっている。

[26] この事業は、『第３次大分県子ども読書活動推進計画』の「計画の体系」のうち、３（2）「小学校・中学校・高等学校等における取組」の一環として位置付けられている。

○定期的な改善プランの進行管理を実施することにより、項目別の改善度合いが適宜把握できる仕組みとなっていること。また、学校図書館診断結果や改善プランの各項目の多くが数値化もしくは図示化され、いわゆる「見える化」されていることにより、容易に比較可能となっている。

○豊富な学校図書館運営に関するノウハウをもとにしたアドバイスが受けられる仕組みが構築されており、また訪問時以外におけるフォローも充分できている。

○さらに、学校図書館は組織的な運営が重要であるとの認識のもと、学校図書館診断の結果による事前評価から、改善プラン作成、各月の訪問時における助言・指導等のコミュニケーションを、司書教諭や学校司書のみならず、管理者である学校長をも交えて実施している。

＜体制・組織、実施主体、連携の仕方等＞

アドバイザーには大分県と学校図書館に熟知した人材を活用

○アドバイザーは選考・研修を経て各校に派遣される。選考要件として、大分県を熟知している者、司書または司書教諭の資格を持ち学校図書館の業務経験を持っている者などとなっている。

＜成果・改善された点等＞

利用者や貸出冊数の増加に加え、学校図書館の学校内での認知度もアップ

○県の調べによると、アドバイザーの派遣の成果として、学校図書館の利用者数、授業活用の頻度、貸出冊数の増加が挙げられる。本事業の振り返りの結果、アドバイザー派遣を受けた学校のうち、80.5%の学校で図書館利用が増加したとの回答がみられ、91.7%の学校で授業での活用が増加したとの回答が見られた。さらに、平成 25 年度にアドバイザー派遣を受けた 36 校では、年間累計 75,518 冊（1 校あたり約 2,000 冊）の貸出冊数の増加が見られた。

○また、評価から改善のプロセス全てに司書教諭及び学校司書のみならず校長や他の教科担当の教員が関与することで、学校図書館の運営について、組織全体で進むべき方向性を共通認識し、日々の図書館業務を遂行できるようになったとの声もあった。

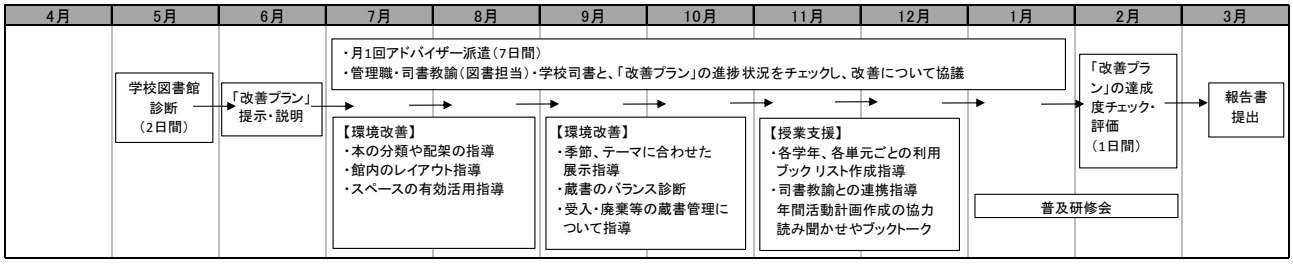
＜今後の課題・展開の可能性＞

事業を学校司書の配置促進につなげ、学校図書館の機能強化を目指す

○本事業により、学校図書館の環境整備や授業活用を促進してきたが、学校図書館の活用教育を促進するためには、その中心となる学校司書の配置の充実が不可欠である。学校司書の配置の充実に向けて働きかけを継続し、子供と本をつなぐ大人が図書館にいる状況をつくることから、学校図書館の機能強化を図っていくことが必要である。

○また、本事業は平成 27 年度で終了する。今後はアドバイザー派遣の成果を県内に普及し、全県的な学校図書館の機能強化を図ることが課題である。

図表 4-4-6　アドバイザー派遣の 1 年間のスケジュール



※大分県教育委員会提供資料を基に浜銀総合研究所作成

Ｇ　中学生向けビブリオバトルの実施支援

（清須市立図書館）

＜取組の概要＞

図書館員の参画による中学におけるビブリオバトルの開催支援

○清須市立図書館(（以下「市立図書館」）では平成 26 年 12 月に、清須市立春日中学校（以下「春日中学校」）の研究授業の一環として行われたビブリオバトルの実施支援を行った。

○ビブリオバトルとは、発表者（バトラー）が１人５分程度で自分の面白いと思った本を紹介し合い、最後に参加者全員の投票によって最も読みたい本（チャンプ本）を決める催しである。

○市立図書館では、春日中学校が研究授業として実施するビブリオバトルの実施にあたり、教材の作成と当日の実施支援を行った。教材は、生徒等の参加者にビブリオバトルの流れを理解してもらうため、図書館員と担当教諭とで行った模擬ビブリオバトルのビデオを作成した。また、春日中学校の 2 年生全員を対象とした研究授業に市立図書館スタッフ２名も参加し、中学生と一緒に 5～6 名のグループに分かれてビブリオバトルを行った。

○終了後、授業当日のビブリオバトルで選ばれた各グループのチャンプ本を市立図書館で購入し、図書館内に展示した。また、市立図書館で発行している『図書館だより』に春日中学校におけるビブリオバトルの様子を写真つきで掲載した。

＜取組の経緯＞

職業体験研修に来ていた教諭の申し出により事業がスタート

○ビブリオバトルの実施支援に取り組んだきっかけは、市立図書館が、教職員 10 年目研修の職業体験として受け入れた春日中学校の教諭からの申し出による。同教諭は、研究授業でビブリオバトルを行ってみたい、このため研修の一部として授業準備を実施したいという希望を持っていた。清須市立図書館としてもビブリオバトルの実施に関心があったため了承し、3 日間の研修日程のうち 1 日を用いて、ビブリオバトルの実施支援に取り組むこととなった。

＜取組に関する工夫や特徴等＞

ノウハウ習得のため事前に図書館内でビブリオバトルを実施

○ビブリオバトルについて知識のない生徒が多いため、具体的な事例として模擬ビブリオバトルのビデオ作成を行う等、分かりやすい教材の作成を行った。

○また、市立図書館においてもビブリオバトルをイベントとして開催したことがなかったため、ビブリオバトル運営のノウハウ習得を目的に、事前に図書館スタッフ内でビブリオバトルを実施した。

○ビブリオバトルの方法等の解説等の間接的な支援のみならず、春日中学校で実施されたビブリオバトルに図書館員が直接参加し実施支援を行った。

＜体制・組織、実施主体、連携の仕方等＞

授業当日はバトラーとして図書館員２名が参加

○模擬ビブリオバトルのビデオ作成等に、市立図書館スタッフ３名が参加した。また、授業当日は、教諭１名が進行を担当し、市立図書館スタッフがビブリオバトルのバトラーとして２名参加した。

＜成果・改善された点等＞

ビブリオバトル開催支援が中学校と連携を持つきっかけに

○中学校へのビブリオバトル実施支援を通して、市立図書館としても、中学生の興味のある本に関する情報収集や、学校と連携するきっかけ作りといった成果が見られた。

○ビブリオバトルの認知度について、市立図書館において来館者に対しアンケートを実施したところ、認知度は低かった。中学校で行ったビブリオバトルについて、館内展示や『図書館だより』によって紹介することで、中学校以外の市民にもビブリオバトルへの認知度を高める効果があったとみられる。

＜今後の課題・展開の可能性＞

ノウハウの蓄積・記録をし、他の中学校でも開催したい

○研究授業でビブリオバトルを実施した教諭が他校へ異動したこともあり、春日中学校へのビブリオバトル実施支援は現時点では継続的な取組とはなっていない。また春日中学校と市立図書館の間で、研修で作成した模擬ビブリオバトルのビデオや、ビブリオバトル当日の授業記録は共有されておらず、学校との情報共有等、連携を強化する必要があると考えられる。

○清須市内の４つの中学校のうち、ビブリオバトルの実施実績は春日中学校１校に留まっているが、市立図書館としては、いずれ清須市立中学校４校合同でビブリオバトルを行う等、取組を広げていくことが望ましいと考えている。ビブリオバトル実施支援以外の市立図書館と中学校の連携としては、清須市立中学校４校のうち２校の図書室に対し、市立図書館から毎月 100 冊本を団体貸出している取組があり、団体貸出制度を軸に連携を広げていく展開も考えられる。

図表 4-4-7　清須市立春日中学校におけるビブリオバトル実施の様子（平成 26 年 12 月）

※清須市立図書館提供資料

Ｈ　学校図書館での本の展示の工夫・柔軟な蔵書選定（愛知県立緑丘商業高等学校）

＜取組の概要＞

「本」や「図書館」への心理的ハードルを下げるため、手に取りやすい本を積極的に配架

○愛知県立緑丘商業高等学校では、平成 23 年度より、生徒の「本」や「学校図書館」への抵抗感をなくすことを目的とし、学校図書館における本の展示の工夫や生徒の嗜好や興味にあわせた柔軟な蔵書選定等を行っている。

○本の展示に関しては、本を平積みに展示するコーナーを設けることで、来館した生徒の目が本に向くよう工夫している（図表 4-4-8）。なお、展示コーナーには「新着図書」「最近の返却図書」のほか、例えば「笑える本」「気楽に読める短編集」「占い・心理テスト」「ケータイ小説」「ボーカロイドの本」等、気軽に手に取りやすい本を中心に配架している。また、映画化されたマンガや小説等に関しては、映画のチラシを組み合わせて紹介する等、視覚に訴えかける展示が心がけられている。

○学校図書館の空間作りに関しては、生徒がデザインした図書館マスコットキャラクターをマンガ研究部の協力を得てイラストに仕立て、学校図書館内のサインや広報に活用している。また、学校図書館内の各所に鉢植えや水槽、ぬいぐるみ等を配置し、生徒が立ち寄りやすい癒しの空間作りを行っている。

○蔵書選定に関しては、学校図書館としての選書に加え、生徒からのリクエストにも沿い、生徒が手に取りやすいと思われるものの学校図書館においては消極的に扱われがちであるマンガやライトノベル、コミックエッセイ、サブカル等の分野の本も積極的に選定・購入している。

○また、購入した新着図書の表紙のカラーコピーをポスター化し、よく生徒が利用する廊下等に展示する等、本そのものや図書館の動向に興味を持ってもらうための活動も行っている。

＜取組の経緯＞

読書習慣がついていない、日常的に本との関わりを持たない生徒が少なからず存在

○緑丘商業高等学校においては、読書習慣がついていない等、日常的に本との関わりを持たない生徒が少なからず存在する。平成 23 年度に現在の司書教諭が着任し、少しでも生徒が持ってしまっている「本」や「学校図書館」に対する抵抗感をなくしたいという想いのもと、本取組が開始された。当初は、書架のペンキの塗り替えといった基礎的な作業から、空間作りが開始された。

＜取組に関する工夫や特徴等＞

「来て」「見て」「手にとって」もらえるよう様々な工夫を実施

○図書館にまずは来てもらうきっかけを作る、そして来た生徒がつい手に取ってみようと思うような見せ方（展示）をすることにより、これまで本に親しみがなかった生徒に本に興味を持ってもらうという目的で様々な取組が行われている。図書室を見渡すと、マンガやライトノベルが平積みで並べられ、随所にぬいぐるみやキャラクターグッズが配される等、いわゆる「学校図書館」のもつ一般的なイメージとは異なる空間作りがされている（図表 4-4-9）。

○これは、緑丘商業高等学校では、学校図書館に対し、学習・情報センターとしての位置付けよりも、「ひとりでも、みんなでも、ほっとして穏やかにくつろげる場」という居場所としての位置付けをしていることによるものである[27]。

[27]書架には例えば文学全集や辞典等もみられ、学習・情報センターとしての機能を果たすに相応しい蔵書も揃えられている。また、会計学の専門書等、商業高等学校ならではの蔵書もみられる。

○一方、「図書館の中では静かにする」等、学校図書館において必要と考えられるルールに関しては、遵守するよう生徒指導を行っている。これは、学校図書館が癒しの空間であると同時に、他人を尊重することを学ぶ社会教育の場であるという側面を重視しているためである。

＜体制・組織、実施主体、連携の仕方等＞

意思決定と作業の迅速さを考慮し、司書教諭と学校司書が主体となって企画・実施

○本取組は教職員 6 名で構成される図書部員の理解と協力のもと、図書部主任である司書教諭と学校司書が主体となり、企画・実施している。緑丘商業高等学校の図書部は司書教諭を含め教職員 6 名で構成されているが、意思決定と作業の迅速さ等を考慮した結果である。

＜成果・改善された点等＞

貸出冊数・貸出利用者数ともに増加傾向に

○本取組により、学校図書館の貸出冊数・貸出利用者数に増加が見られた。取組開始以前は約 1500～2000 冊であった年間のべ貸出冊数は、約 3500～4500 冊にまで増加が見られた。また、取組開始以前は 150 人程度であった年間貸出利用者数は、取組開始後、全校生徒の約 3 分の 1 に相当する 200 人程度にまで増加が見られた。

＜今後の課題・展開の可能性＞

いまだ学校図書館との接点の少ない生徒への働きかけ

○取組開始以降、学校図書館を利用する生徒の数に増加は見られたものの、全校生徒の約 3 分の 2 は依然として学校図書館と無縁な 3 年間を過ごしていると思われる。学校図書館の利用について、司書教諭のみならず担任等に働きかけを行う等、学校全体の動きとしていくことが課題である。

○展示や空間作りに用いる消耗品・備品等、取組にかかる経費は所定の予算ではまかないきれない部分も多く、更なる取組の継続には図書部予算の増額が必要である。また、人事異動や学校の経営方針の変化等により、取組が継続できなくなる可能性がある。

図表 4-4-8　平積みに展示された新着図書コーナー

図表 4-4-9 緑丘商業高等学校図書館の全景

Ⅰ 「よむよむ５（ファイブ）」

（大分県立佐伯豊南高等学校）

＜取組の概要＞

多読者に対するポイント付与制度を実施

○大分県立佐伯豊南高等学校では全校生徒を対象として、本を読むとポイントを付与していく仕組みを通して読書を推進する「よむよむ５」が実施されている。

○「よむよむ５」とは、これから読む予定の本を５冊選んでエントリーカード（図表 4-4-10）に記入し（これを「エントリー」という）、実際に読むと１冊ごとに１ポイント獲得となり、５ポイントたまると図書館からプレゼント（図表 4-4-11）が贈られる、という内容の取組である。

○エントリーする５冊は学校図書館の本である必要は無く、自分の持っている本や、友達から借りた本でもよい。ただし、５冊のうち、３冊は大分県学校図書館協議会の『読書のしおり』から選ぶように薦められている。

○なお、５ポイントたまった際のプレゼントは教職員・生徒の持ち寄り品等（文房具等）でまかなわれている。

＜取組の経緯＞

図書館利用少なく、生徒の読書機会拡大を狙う

○佐伯豊南高等学校は、大分県南部に位置する総合学科の高校である。総合学科という特性上、授業における調べ学習の機会は多く、本を使って調べることは得意な生徒が多かったが、じっくりと本を読む生徒は少ないという課題があった。

○平成 20 年に新たに学校司書が着任した当時、学校図書館について授業以外における生徒の来館が少なく、平均年間貸出冊数も低迷していた。生徒の意欲を喚起し読書の機会を増やすことを目的として、平成 22 年度より「よむよむ５」の取組を開始した。

○なお、「よむよむ５」は、近隣の大分県立佐伯鶴岡高等学校の「ハッピーセブン」の取組を参考にして始められた。

＜取組に関する工夫や特徴等＞

生徒の状況に応じ柔軟な対応も、また、図書委員が中心的な役割果たす

○「5 冊も選べない」という生徒に対しては、まずは１冊から、あるいは５冊のうち１冊はマンガでも良いというように条件を緩和しているという工夫がみられる。

○一方、たくさん読む生徒の中には『読書のしおり』から 3 冊選ぶことに抵抗感を示す場合もあるが、それはそれで学校司書が「こんな本もどう？」というように声がけをする等、生徒とコミュニケーションをとるきっかけとなっている。

○なお、「よむよむ５」の取組を推進する上で、生徒による図書委員会活動は大きな位置を占める。図書委員は、まず自らが積極的に「よむよむ５」にエントリーすることからはじめ、図書館内に人気の本に関する POP を作成して展示したり、生徒が作成した「よむよむ５」のイメージキャラクターを活用したマンガを描いて掲示したりする等の広報活動を行っている。このほか「よむよむ５」では本を友人に「口コミ」で紹介することの効果が大きく、その「口コミ」の発端が図書委員であることも多い。

○図書委員には、大分県学校図書館協議会の主催する図書委員研修会の場において、他校の図書委員の生徒と交流する機会がある。ここで POP の作成スキルを学び、持ち帰って「よむよむ５」の広報活動等にも活用している。

＜体制・組織、実施主体、連携の仕方等＞

学校司書と教職員との連携により事業を推進

○もともと、総合学習等における図書館を活用した授業において、学校司書も調べ学習の補助に入る形で教員と連携する機会が多くあった。また、大分県立図書館から団体貸出を受ける際の選書も、学校司書と教員数名で図書館を直接訪問して行われるなど、連携・協力体制がとられている。

○授業の枠組みを離れた読書推進活動である「よむよむ５」の実施に際しても、教職員の積極的な協力がみられる。例えば、教職員自身も「よむよむ５」にエントリーするほか、ホームルーム等で「よむよむ５」に関する呼びかけを実施する教員もいるとのことである。また、2015 年度には、「よむよむ５」は学校の重点目標を達成するための取組の一つとして位置づけられるようにもなった。

＜成果・改善された点等＞

平均貸出冊数の増加に加え、読書をめぐる校内の雰囲気に変化も

○「よむよむ５」開始後、授業以外で図書館に来る生徒が増え、生徒の平均年間貸出冊数も２倍近くに伸びた。

○また、校内で本の話題が交わされる場面が増えるなど、読書をめぐる校内の雰囲気に変化が見られた。

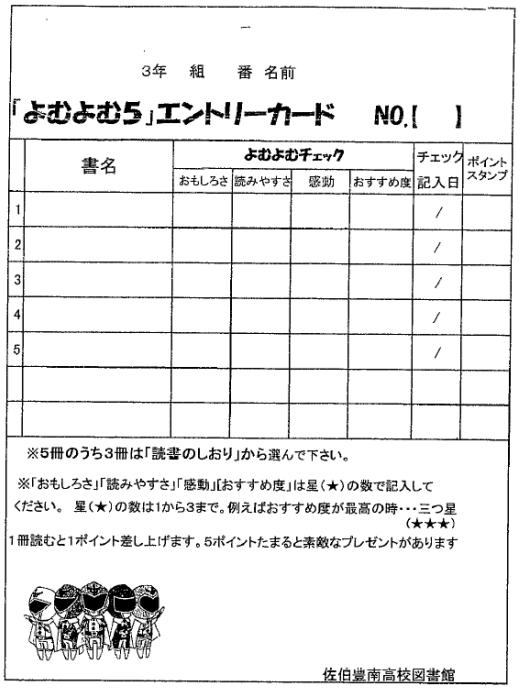
○図書委員の活動が活発になることで、読書に関する生徒同士の交流が深まっている。生徒の中には、図書委員から本を教えてもらったというケースも少なくない。また文化祭では図書委員による本の朗読等も行われている。

＜今後の課題・展開の可能性＞

オペレーションの改善

○貸出返却の際にエントリーカードへの記入を求めることは生徒の手間ともなり、また「よむよむ５」のエントリーカードへの記入を貸出手続きと勘違いして本を持ち出そうとしてしまう生徒もみられる等、オペレーション上の課題がある。

図表 4-4-10「よむよむ 5」エントリーカード



3年　組　　番 名前

「よむよむ5」エントリーカード　NO.[　]

	書名	よむよむチェック				チェック記入日	ポイントスタンプ
		おもしろさ	読みやすさ	感動	おすすめ度		
1						/	
2						/	
3						/	
4						/	
5						/	

※5冊のうち3冊は「読書のしおり」から選んで下さい。

※「おもしろさ」「読みやすさ」「感動」「おすすめ度」は星（★）の数で記入してください。 星（★）の数は1から3まで。例えばおすすめ度が最高の時・・・三つ星（★★★）

1冊読むと1ポイント差し上げます。5ポイントたまると素敵なプレゼントがあります

佐伯豊南高校図書館

※佐伯豊南高等学校提供資料

図表 4-4-11　5 冊読んだ際のプレゼント

Ｊ 「てこぽん（ティーンズコーナーポイント Get 大作戦！」（愛知県図書館）

＜取組の概要＞

利用者が YA おすすめ本の POP 作成、作成者には図書館オリジナルグッズを提供

○愛知県図書館では、ヤングアダルトサービスの一環として、平成 20 年度より「てこぽん（ティーンズコーナーポイント Get 大作戦！）」（以下「てこぽん」）を実施している。

○「てこぽん」は、利用者が推薦する本のＰＯＰを書いて愛知県図書館に提供すると、書いた枚数によってポイントが貯まり、ポイントを愛知県図書館オリジナルグッズ（しおり、クリアファイル、ブックカバー等）と交換できるという取組である。提供されたＰＯＰは愛知県図書館のティーンズコーナーに掲示し、その一部は愛知県図書館ホームページにも掲載されている。

＜取組の経緯＞

ティーンズコーナーで子供たちの興味を引くような本の案内をすべきとの意見をもとに設置

○愛知県図書館では、平成 17 年 3 月に、ヤングアダルト層（中学生・高校生等）へ向けた図書館サービスの一環として、児童書と一般書からヤングアダルト層向けの本を抜き出して別置するティーンズコーナーを設置した。ティーンズコーナーには、平成 27 年 4 月時点で約 6800 冊が配架されている。

○平成 19 年度の愛知芸術文化センター運営会議図書館専門委員会において、委員の一人より「ティーンズコーナーで子供たちの興味を引くような本の案内をしたらどうか」という旨の発言があったことをきっかけに、大学生協等で実施されている読書マラソン等を参考としつつ、本取組が開始された。

○「てこぽん」取組開始当初は、半年間（平成 20 年 3 月～9 月）の限定企画であったが、利用者から好評であったため、平成 21 年 7 月から現在まで取組を継続している。

＜取組に関する工夫や特徴等＞

POP 投稿を促すためにコンテスト開催

○ティーンズコーナーの書架の上や本の近くに POP を掲示する等（図表 4-4-12）、「てこぽん」を活用した、ティーンズコーナーの親しみやすい雰囲気作りが工夫されている。

○開始当初は半年間で 170 枚の POP が集まったが、その後減少傾向が見られたため、平成 25 年度より、集まったＰＯＰの中から利用者の投票によってベストＰＯＰを選ぶ「てこぽん大賞」を開始した（図表 4-4-13）。現在は平均年間 50 枚程度の POP が集まっている。

＜体制・組織、実施主体、連携の仕方等＞

提供する図書館オリジナルグッズの作製は職員が実施

○平成 27 年度は、職員 1 名と嘱託職員 2 名が、いずれも他の業務と兼務しつつティーンズコーナーを担当している。「てこぽん」に関しては、企画運営は職員が行い、POP の掲示等の作業は嘱託職員 1 名が行っている。「てこぽん」のための特別な財源はないため、ポイントカードやスタンプ、景品用図書館オリジナルグッズ等のデザイン、製作は全て職員が行っている。

＜成果・改善された点等＞

POP 推薦本の貸出率は、ティーンズコーナー全体の平均を上回る

○平成 20 年に限定企画として実施した際の取組の振り返りによると、POP で推薦された本の貸出率はティーンズコーナー全体の平均貸出率よりも高く、「てこぽん」に貸出利用促進の効果が見られた。

○「てこぽん」のキャラクターとして誕生したキャラクターが、現在ではティーンズコーナーのキャラクターとなり、愛知県図書館およびティーンズコーナーの広報等において活用されている。ポイントを貯めると交換できる愛知県図書館オリジナルグッズにもこのキャラクターを使用しており、利用者の「てこぽん」への参加意欲を喚起する一助となっている。

＜今後の課題・展開の可能性＞

参加者のより一層の拡大

○「てこぽん」の参加者が増加するよう広報に力を入れていく必要がある。また、新たなグッズの検討等、利用者の関心を高めるための一層の工夫が必要である。

図表 4-4-12　ティーンズコーナーの書架への POP 掲示

図表 4-4-13　「てこぽん大賞」に選ばれた POP

Ｋ　「こころときめく贈り物」

（愛知県教育委員会）

＜取組の概要＞

先生や生徒、愛知にゆかりのある著名人が推薦文を作成

○愛知県教育委員会では、平成 26 年度から、高校生への推薦図書をまとめたリーフレット「こころときめく贈り物」を作成・配布する取組を実施している。

○平成 26 年６月中旬に、県内の全ての国立、公立、私立高等学校、特別支援学校（高等部）、中等教育学校（後期課程）、合計 256 校の司書教諭や学校図書館担当職員等に対し、高校生への推薦図書 1 冊とその推薦理由を挙げてもらうよう依頼した。同時に生徒が選ぶ「友だちにすすめたい本」を各校３冊ずつ募集した。

○愛知県内 274 人の司書教諭や学校図書館担当職員等から推薦図書・推薦理由の回答があり、それを基に教育委員会でリーフレット「こころときめく贈り物」を作成した。司書教諭や学校図書館担当職員等からの推薦図書に関しては 2 名以上の推薦があった本をリーフレット「こころときめく贈り物」に掲載。生徒からの推薦図書は、回答の多かった上位 10 冊を掲載した。

○愛知県にゆかりのある著名人に高校生への推薦図書と推薦文を依頼し、リーフレット「こころときめく贈り物」の冒頭に掲載した。

○平成 26 年 12 月にリーフレット『「こころときめく贈り物」～高校生にすすめる１冊の本～』の第１号を発刊し、その後平成 27 年 12 月までに第４号まで発刊した。平成 27 年３月にはリーフレット『「こころときめく贈り物」～高校生が友だちにすすめる本 10 冊～』も発刊した。

＜取組の経緯＞

教員や友達など身近な人の薦める本なら普段読書をしない高校生も関心をもつのでは

○愛知県においては平成 25 年３月に「愛知県子ども読書活動推進計画（第三次）」を策定し、「高校生の不読率の改善」を課題の一つに掲げた（巻末資料参照）。その上で、教員や友達など身近な人の薦める本なら、読書をしない高校生も関心を持つのではないかという発想のもと、本取組が開始された[28]。

○愛知県にゆかりのある著名人の推薦図書を掲載するという発想は、平成 21 年に愛知県教育委員会義務教育課が小中学生向けに作成した推薦図書リスト『みんなにすすめたい一冊の本』を参考にした。

＜取組に関する工夫や特徴等＞

高校生に少しでも興味を持ってもらうために、幅広い分野の著名人を人選

○各校の司書教諭や学校図書館担当職員等に推薦文やキャッチコピーを依頼し、原則、手を加えずにそのまま全て掲載した。これは、学校図書館担当職員等が、自分達もこれに関わった一人であるという気持ちを持って読書指導に臨んでもらえるのではないかという意図による。

○女優、ミュージシャン・地元アイドルグループ、お笑い芸人等、幅広い分野の著名人からの推薦図書を掲載することで、高校生に少しでもリーフレット「こころときめく贈り物」に興味を持ってもらう工夫がなされた。

[28] 本取組は「愛知県子ども読書活動推進計画（第三次）」の「9 つの方策」のうち、「学校等における取組の推進」及び「優れた取組の奨励、優良な図書の普及」の一環として位置付けられている（巻末資料参照）。

＜体制・組織、実施主体、連携の仕方等＞

校長会経由で各校での印刷・配布を依頼、フリーペーパーとの連携も

○リーフレットの作成等は愛知県教育委員会生涯学習課で実施した。

○愛知県教育委員会では作成したリーフレット「こころときめく贈り物」を、校長会などの関係機関を通じて、各校で印刷し、校内に掲示してもらうように依頼をしている。また、愛知県教育委員会生涯学習課 Web ページにリーフレット「こころときめく贈り物」を pdf で掲載し、広報に努めている。なお、『「こころときめく贈り物」～高校生が友だちにすすめる 10 冊』に関しては、県内の国立・公立・私立高等学校、特別支援学校（高等部）、中等教育学校（後期課程）の各校クラスに 1 部ずつ、カラー印刷されたものを配布した。

○多くの高校生に推薦図書の情報を届けるため、事業者が作成した高校生向けフリーペーパーに、リーフレット「こころときめく贈り物」に関する情報を掲載した。また、事業者と協力をし、フリーペーパーが、県内の国立・公立・私立高等学校、特別支援学校（高等部）、中等教育学校（後期課程）の一学年生徒分が各校に配布された。

＜成果・改善された点等＞

「読書好き」が増加傾向に、また、書店での取組にも発展

○愛知県教育委員会が毎年実施している調査によれば、「読書が好き」と回答した生徒は、2013 年は 74.0%、2014 年は 75.1%、2015 年は 75.6%となり、取組開始以降、微増傾向が見られた。

○愛知県教育委員会からの働きかけではないが、リーフレット「こころときめく贈り物」が高校生向けのフリーペーパーに取り上げられ、それを契機として名古屋市内の書店がリーフレット「こころときめく贈り物」に載っている本の特設コーナーを期間限定で設けた。

＜今後の課題・展開の可能性＞

認知度の高まりをふまえた、より積極的な活用の促進

○愛知県教育委員会が、平成 27 年度愛知県学校図書館活性化事業フォーラムに参加した学校図書館関係者 49 名から回答を得たアンケートによれば、リーフレット「こころときめく贈り物」を知っていると答えた割合は 87.8%であり、学校図書館関係者からは一定の認知が見られた。

○また、このアンケートによれば、リーフレット「こころときめく贈り物」の活用方法としては学校図書館での掲示が多く、多くの生徒の目に触れる教室に掲示してもらえるケースが比較的少なかった。生徒一人一人に対し、推薦図書の情報をどのように提供していくかが課題となりうる。

○今後は、教育委員会の学校担当課や各学校との連携協力の充実を図りつつ、リーフレット作成時に収集した推薦文のデータやリーフレット「こころときめく贈り物」自体の活用を促していくことが課題である。

図表 4-4-14　『「こころときめく贈り物」～高校生にすすめる 1 冊の本～』第 4 号（平成 27 年 12 月発刊）

※愛知県ウェブサイト（https://www.pref.aichi.jp/uploaded/attachment/15615.pdf）より引用

L 「ヤングアダルトサービス連絡会」

（愛知県図書館）

＜取組の概要＞

県内の YA 担当者による横のつながりを強化、共同利用できるデータベース作成も

○愛知県図書館では、平成 20 年度より、愛知県公立図書館長協議会[29]に加盟している市町村立図書館との連携・協力によって、ヤングアダルトサービスに関する情報を広く収集し周知することを目的に「ヤングアダルトサービス連絡会」（以下「連絡会」）を設置し、活動をしている。

○連絡会では、年 2 回の委員会と、年 1 回の総会・研修会を実施。委員会は 4 名の委員と事務局で構成され、総会・研修会のテーマや会場等、連絡会の事業の計画・実施に関わる話し合いを行っている。年 2 回の委員会で決めきれない事項に関しては、メールで意見交換を行う。総会・研修会では、他県のヤングアダルトサービス担当者を招聘した講演会、事例発表会、情報交換会等を実施している。総会・研修会は、連絡会委員の所属館を会場として実施する場合もみられる。

○ヤングアダルトサービス連絡会の主な事業として、「ヤングアダルトブックレビュー共同データベース（以下「YADB」）」の整備がある。YADB は、愛知県公立図書館長協議会加盟館のヤングアダルトサービス担当者から、推薦したい本のデータ（書誌事項・あらすじ・紹介文等）の提供を受け、それらをエクセル形式でリスト化し各館で共有しているものである。現在、295 件のデータが収録されている。

○また、テーマを決めて紹介文を募集し、作成したヤングアダルト向けのブックガイド『ティーンのための Aichi Librarians’Choice　A・L・C あるく』を発行している。

○その他、ヤングアダルト向け情報リテラシーリーフレットの作成・提供、愛知県内のヤングアダルトサービスの現状を把握するアンケート調査を実施している。

＜取組の経緯＞

「ヤングアダルトサービス担当者の研究会や情報交換会を作ってほしい」という発言から

○平成 19 年 4 月の愛知県公立図書館長協議会定例会において、会員から「ヤングアダルトサービス担当者の研究会や情報交換会を作ってほしい」という要望が見られたことをきっかけとして、始まった取組である。

＜取組に関する工夫や特徴等＞

各館の YA 担当者がデータベースを活用

○YADB は、愛知県公立図書館長協議会加盟館の担当者がアクセスして閲覧することができる仕組みとなっており、連絡会に参加している各館におけるヤングアダルトサービスの参考となっている。

＜体制・組織、実施主体、連携の仕方等＞

県、及び地区ごとに委員を選出し運営にあたる

○連絡会は、愛知県公立図書館長協議会の下部組織として設置されている。連絡会の運営にあたっては、愛知県公立図書館長協議会加入館のうち、愛知県、名古屋市、尾張地区、三河地区から各 1 名ずつヤングアダルトサービス連絡会委員を選出し、計 4 名で運営にあたっている。愛知県図書館は、連絡会全体の調整等の事務局業務を担っている。

---

[29] 愛知県公立図書館長協議会は、愛知県内の公立図書館 69 館の館長を構成員とし、愛知県内の公立図書館相互の連絡を密にし、図書館活動の推進を図ることを目的としている団体である。

＜成果・改善された点等＞

他館の状況を知り、自館の課題解決に活かす

○総会・研修会は、愛知県公立図書館長協議会加盟館のヤングアダルトサービス担当者にとって、他館のサービス状況の情報を得たり、自館で抱える課題等の解決策を探ったりする場として有効に機能している。

○ヤングアダルト向けのブックガイド『ティーンのための Aichi Librarians’Choice　A・L・C あるく』は、愛知県公立図書館長協議会加盟館において、利用者への配布、掲載図書の展示コーナー作り、POP 等に活用されている。

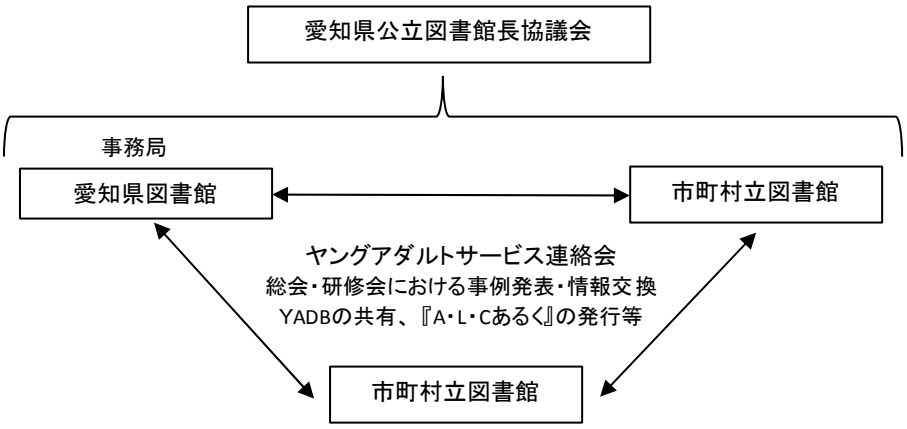
＜今後の課題・展開の可能性＞

リーダーシップを発揮できる連絡会委員の発掘が必要

○連絡会委員は愛知県公立図書館長協議会加盟館の持ち回りではなく、積極的な館に数年間お願いする形をとっている。引き続き有意義かつ継続的な連絡会運営を行うためには、経験を活かしてリーダーシップを発揮することの出来る人材を選び、連絡会委員に据えることが課題である。

○連絡会に参加している各館が抱える課題の解決につながるような総会・研修会を開催することが課題である。

図表 4-4-15　ヤングアダルトサービス連絡会に関する各主体の連携・協力のイメージ



※ヒアリングを基に浜銀総合研究所作成

M 村立図書館の利用促進のための取組（図書館ガイダンスの実施）（芸西村教育委員会）

＜取組の概要＞

保育所から中学校まで、全ての段階で図書館ガイダンスを実施

○芸西村では村立図書館の利用促進のため、保育所・幼稚園の児童とその保護者、及び小中学生を対象に、村立図書館の利用に関するガイダンス（図書館ガイダンス）を実施している。図書館ガイダンスを通じて幼児や小中学校の児童生徒が地域の図書館に親しみ、利用方法を知ることで、その後の利用を促すことがねらいである。

○保育所では２歳児とその保護者、幼稚園では４歳児とその保護者を対象に、図書館ガイダンスを年に１回開催している。村立図書館にて司書から図書館の利用方法についての説明を受け、実際に本を借りる体験をするところまでが、その内容となっている。

○小中学校では毎年 4～5 月に、小中学校の全学年を対象に、図書館ガイダンスを 1 回ずつ実施している。本の分類や図書館内での配置、図書館の利用方法などについて 15～20 分程度かけて説明を行い、その後、保育所・幼稚園を対象にした図書館ガイダンスと同様に、実際に本を借りるところまでがガイダンスの内容となっている。

＜取組の経緯＞

小中学生の図書館利用を促進、学校教育への寄与も目的に

○芸西村では、推進会が発足する以前は、村立図書館と学校図書館とがほとんど連携しておらず、また、小中学生の村立図書館の利用者が少なかった。そこで平成 23 年度に開催された「芸西村読書活動推進会」の準備会において「小中学生が図書館をもっと利用するようにしていこう」という話し合いがもたれた。

○準備会では、小中学生や幼児の保護者の来館率向上や図書館の正しい使い方の伝達を主な目的とした図書館ガイダンスを実施することを決定した。なお、実施のさらなる目的として、国語科の教科書に図書館活用についての内容が記載されていること、また学校教育において新聞・資料等の活用が必要であることなど、学校での教育に寄与する観点からも図書館ガイダンスが必要であるという意見も出された。

＜取組に関する工夫や特徴等＞

図書館との接点を必ずつくるため、及び、興味・関心の変化に対応するためにあえて毎年実施

○小中学校では毎年 4～5 月に、必ず村立図書館の利用に関するガイダンスを実施するようにしている。最低でも年に一度は図書館に足を運ぶ機会を作ることがその目的であるが、年齢が上がるごとに興味や関心の対象が変化することもあり、あえて毎年実施することとしている。

＜体制・組織、実施主体、連携の仕方等＞

教育委員会の図書担当が学校との連絡調整等を担当

○図書館ガイダンスについては、教育委員会の図書担当（1 名）が担当し、学校側と日程調整を行った上で実施している。ガイダンスの内容や、やり方の工夫などについては、村外の図書館を参考にしている。また実施にあたっては、村外の図書館など外部からのアドバイスをもらうこともある。

＜成果・改善された点等＞

学校の調べ学習や職場体験で図書館の活用が広がる

〇平成 24 年度から図書館ガイダンスが始まった。現在では、学校の調べ学習や職場体験などで図書館の活用が広がってきている。

〇ガイダンスを通じ、子供たちが図書館の使い方を理解し、自分で本を選ぶこともできるようになってきた。図書館が小学校の近くに位置することもあり、利用状況はよい。ただし、中学生は部活等で忙しく、普段の利用者はあまり増えていないのが現状である。

〇また、数値としての把握はされていないが、特に幼児とその保護者の来館が増えているように感じている。

＜今後の課題・展開の可能性＞

内容面でのより一層の充実

〇小中学生は毎年実施しているということもあり、特に学年が上がるにつれて、図書館の利用法など目新しい発見がガイダンス内にみられないことから、内容につき飽きられてしまう可能性がある。特に中学生は忙しい日程をやりくりして開催していたため、平成 28 年度からは中学 1 年生のみの実施へと変更することを予定している。

〇ガイダンスについては、内容面での充実等も図りたいところであるが、予算や人手の不足から、やりたいと思ってもなかなか実行できない部分もある。特に、人手に関しては普段の図書館の運営を実質的に一人の担当者が担っている状態であり、ガイダンスの内容拡充までは手がまわらないのが実態である。

Ｎ　読書活動推進会による村ぐるみの読書推進

（芸西村教育委員会）

＜取組の概要＞

「読書推進」を学力向上のための４本柱の一つに定め、各機関連携のもと取り組む

○芸西村では、子供の「確かな学力向上」をめざして、学力・読書活動・体力・食育の向上を４つの柱と定め、それぞれの向上・推進に向け、芸西村教育研究協議会内に委員会（推進会）を設置し、村内横断的な検討の場を設置している。このうち「芸西村読書活動推進会」（以下、「推進会」）は、教育委員会、村立図書館、保育所、幼稚園、小学校、中学校、読書ボランティアにより構成され、地域における子供の読書活動推進のための検討を、各機関の連携のもとに行っている組織である。

○推進会では、「芸西村子ども読書活動推進計画」に基づき、年間の活動計画の策定、アンケート調査を通じたこれまでの取組の成果と課題の整理などを行い、村立図書館と学校図書館、さらには保育所・幼稚園及び各校の教育・保育活動との連携を図りながら、読書活動推進の取組の方向性を定めている。

○平成 25 年度には、年度中に４回の会合を開き、「芸西村子ども読書活動推進計画」（平成 26～30 年度を計画期間とする）の策定、アンケート調査（取組の成果指標、及びニーズの把握を目的として実施）を通じた取組の成果の検証、取組の方向性の見直し、及び目標の設定などを行った。

＜取組の経緯＞

育ちの各段階における連携が不可欠との認識で、関係者が一堂に会し協議する場を設置

○芸西村では子供の確かな学力向上には、読書活動の推進が欠かせないとの認識のもと、「本に親しみ豊かな言葉と想像力を持つ子ども」、「情報や資料を活用し、自ら解決できる子ども」を目指しているが、子供の読書推進のためには、育ちの各段階における取組の連携が不可欠であることから、保育所・幼稚園・小中学校及び村立図書館の関係者が一堂に会し検討できる場を設けることとなった。

○そこで、平成 23 年度に読書活動推進会の準備会を立ち上げ、平成 24 年度より推進会による活動を開始した。なお、芸西村では先行して平成 22 年度から「食育」、「学力」、「体力」に関し、村内の各機関が連携して検討する場を設けていたが、当初は読書に関する専門の部会は無かった。平成 22 年度に着任した現在の教育長が「読書にも力を入れるべきである」と考えていたことも、推進会が発足する要因の一つとなった。

＜取組に関する工夫や特徴等＞

日程調整から課題の共有まで、連携した取組につなげる

○村内の子供の読書活動推進の関係者が一堂に会する場であり、各機関における取組の現状や抱える課題の共有が図られている。子供の読書活動推進は各機関の中だけではできないことも多いが、推進会での話し合いを通じ、複数の機関が連携した取組が行いやすくなっている。

○また、各機関の年間行事予定をあらかじめ把握しておくなど、関係者間の事前調整を行っている。

○推進会で決定した取組を確実に進めていくため、定期的に会合を持ち、メンバーの意識の統一を図っている。

＜体制・組織、実施主体、連携の仕方等＞

村の教育に携わる各機関と地域の代表者が運営

○推進会は、教育長、小中学校、幼稚園、保育所、村立図書館のほか、読書活動支援員[30]、研修指導員、地域代表によって構成されている。地域代表は２名おり、うち１名は小学校の元教頭、もう１名は地元の農業者で

[30] 平成 27 年度は欠員であった。

教育委員を務めている。総勢で 10 名程度の小規模な集まりであることもあって、集まり具合もよく、互いに自由な意見が言えるような雰囲気の会合となっている。

○推進会の事務局は教育委員会が担当し、研修指導員が全体の取りまとめを行っている。

＜成果・改善された点等＞

読書推進に向けた様々な連携した動きができつつある

○推進会があることで、読書推進に向けた様々な取組が実施できている。推進会を設ける以前は村内の保育園・幼稚園・小中学校の関係者が集まる会合はなかったが、推進会ができたことで、互いの理解が深まり、個別の取組が一つの流れとしてつながるようになってきている。

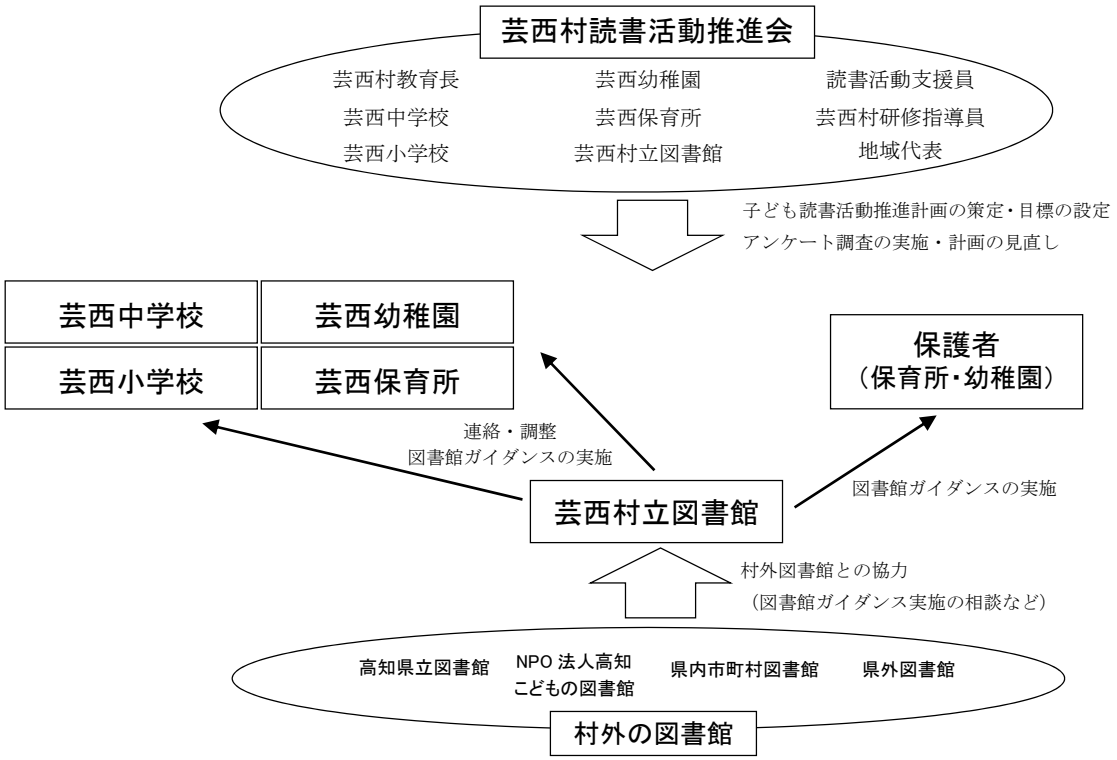
＜今後の課題・展開の可能性＞

推進会のメンバー以外への読書推進に関する意識の浸透が必要

○推進会のメンバー間では連携した取組の推進が行われるようになっているが、教員など推進会のメンバー以外との連携において、一部足並みが揃わないところがある。全村的な取組とできるよう、連絡・調整の方法等に改善を図っていく必要がある。

○子供が本を読むかどうかについては、個人差が非常に大きい。子供の読書状況には親の影響が大きいため、まずは保護者に対して働きかけていく必要があると認識しているが、家庭環境はそれぞれの家庭ごとに大きく異なり、家庭での読書を推進していく方法については頭を悩ませている。

図表 4-4-16　芸西村における子供の読書活動推進への取組体制のイメージ図



※芸西村教育委員会提供資料、及びヒアリングを基に浜銀総合研究所作成

第 5 章

まとめ・考察

第５章　まとめ・考察

（１）子供の読書の現状・課題

本調査研究では、調査目的の A として、「小学生、中学生、高校生の読書の実態や不読の背景・理由等を把握するための調査を実施し、課題を明確にするとともに、不読解消のための方策等について検討を行う」と設定し、小学生・中学生・高校生、及び、その保護者を対象とした質問紙調査を実施した。

＜全体状況の概要＞

調査の結果から、全体的な傾向として、小学生から中学生、高校生になるにつれて読書をする者の割合が減っていく状況にあることについて、あらためて把握をすることができた。高校生では 1 日あたりに全く読書をしない者が 5 割を超え（図表 2-2-1、図表 2-2-2）、同様に、1 か月に読んだ本の冊数が 0 冊の者も 5 割以上となっている（図表 2-3-1）。高校生では、学校図書館（図書室）や地域の図書館を利用しない者の割合についても小学生や中学生と比較して高く（図表 2-8-1、図表 2-8-2）、高校生になって以降、感動したり興味を持ったりした本に新たに出会っていない可能性がある者が多いこともうかがえた（図表 2-6-3）。

＜不読の背景＞

小学生・中学生に関しては、1 か月に読んだ本の冊数が 0 冊の者は高校生と比べると少ないが、一定割合では見られ、その理由として、TV やインターネット、ゲームなどの、読書以外の娯楽・趣味に時間がとられている者の割合が相対的に高くなっている（図表 2-4-1、図表 2-4-2）。また、中学生では、読書習慣が身についていないために本を読まなくなっている者も多いのではないかと考えられる。

なお、小学生・中学生については、ふだん学校のある日には本を読むが、学校のない休みの日には読まないという層が比較的多く存在することがわかる（図表 2-2-1、図表 2-2-2）。このような背景として、学校のある日に関しては、学校で行われている、一斉読書の時間などの取組の影響により本を読むようになっているものが一定程度いることがうかがえる（図表 2-5-1、図表 2-5-2、図表 2-10-1）。

高校生に関しては、学校で読書に関する取組が行われている度合いが低いと考えられる（図表 2-10-1、図表 2-10-2）ほか、勉強や部活動・生徒会活動等に時間がとられていること、読書習慣が身についていないことなどが、不読の理由として挙げられている（図表 2-4-3）。なお、本を読んでいる者のなかでも高校での取組に影響を受けたとしている者の割合は必ずしも高くなく、書店やテレビ、雑誌、新聞、ネット等から影響を受けている者の割合が高い（図表 2-5-3）。

＜本を読むことに影響を与えうる諸要因＞

高校生で不読率は高いが、必ずしも全員が本を読まないわけではない。その差異に影響を与えると考えられる要因として、性別の差が挙げられる（図表 3-1-1）ほか、保護者の読書習慣（図表 3-1-3）、家庭の蔵書数（図表 3-1-5）、学校図書館（図書室）の充実度（図表 3-1-9）、学校での読書に関する活動状況（図表 3-1-11）、学校図書館（図書室）の授業での活用状況（図表 3-1-13）がそれぞれ考えられる。なお、家庭の蔵書数や学校図書館（図書室）の充実度、学校での読書に関する活動状況については、小学生・中学生の不読率や読書冊数の多寡とも関連性があることがうかがえる。

また、これら保護者の読書習慣、家庭の蔵書数、学校図書館（図書室）の充実度、学校での読書に関する活動状況、学校図書館（図書室）の授業の活用状況等については、それらが行われている（充実している）場合においては、それだけ、児童・生徒自身が本を読むようになったことに影響を受けたと思うこととして認識されている割合が高くなっている（図表 3-2-4～図表 3-2-21）。特に、中学生にとっては、学校内でそのような取組があることによって、影響を受けるという者が多いのではないかということも把握された（図表 3-2-14、図表 3-2-20）。

このほか、友達同士でおすすめの本を紹介したり、貸し借りをしたりすることによって本が読まれるということもあるのではないかということがうかがえる（図表 2-5-1～図表 2-5-3、図表 2-7-1～図表 2-7-3）。また、小学生・中学生・高校生ともに、どのようにすればもっと本を読みたくなると思うかについて、「学校図書館（図書室）に好む本を置くようにする」の回答割合が最も高い（図表 2-12-1～図表 2-12-3）が、読みたいと思う本が必ずしも明確になっていないこと、もしくは、それらの本が身近な場所に十分に整備されていないことにより、読書の機会が制約されてしまっているという状況があるのではないかということも推察される。

＜課題認識等＞

児童・生徒の読書量を増やしていくこと等を考えた場合に、上記のように、家庭・保護者による取組の影響、及び学校での取組や学校図書館（図書室）の充実が及ぼす影響があると想定されるが、家庭・保護者による取組に関しては、就学前の段階から、取組が実施できている保護者と、そうではない保護者とに分かれている状況にあることがうかがえる（図表 3-3-3）。

また、高校生になるにつれて、スマートフォン・携帯電話に接する時間が長くなる者が増えるほか、勉強・部活動等で時間がとられることにより、本を読まなくなっているという課題認識は持たれながらも、なかなか対応が難しい状況にあるのではないかということがうかがえる（図表 3-3-1、図表 3-3-6）。このほか、学校以外の地域資源が必ずしも豊かであるというわけではなく、子供たちだけでアクセス可能な図書館や書店、施設等が十分にはないこと、また、学校図書館（図書室）に関しても、司書の配置状況等に課題があることがうかがえる（図表 3-3-2）。

（２）子供の読書推進のための取組状況、取組推進に関する課題

他方、上記のような現状･課題がある中で、各地域で様々な取組が推進されている。本調査研究では、調査目的の B として、「各自治体（都道府県、市区町村）で実施されている子供たちの読書推進に関する取組のうち、地方公共団体、学校、図書館、民間団体、ボランティア等の連携・協力により実施されている取組について、その連携・協力手法等に着目して調査・分析を行い、特徴等を明らかにする」を設定し、地域での取組状況について把握を行った。

＜全体状況の概要＞

全体的な状況としては、家庭において図書館や書店に子供と一緒に行く機会を増やしたり、子供に対して直接的に本･読書を勧めたりする取組が行われていることが把握された(図表 4-1-1､図表 4-1-2)ほか、就学前の段階及び小学校では、多くの場合、ボランティアやサークル団体等との連携・協力により、子供に対する読み聞かせが行われている（図表 4-2-1、図表 4-2-2)。また、必ずしも連携・協力によるものではないが､小学校･中学校では一斉読書の時間が設定されていることが多く(図表 4-2-2、図表 4-2-3)、そのことによって読書推進が図られていることがうかがえた。高等学校では一斉読書の時間についても必ずしも設定されている学校が多いわけではないが、他方で、読書会やブックトーク、ビブリオバトル等の取組については、小学校や中学校段階と比較して相対的に取組事例が多くなっている（図表 4-2-4)。

＜内容・テーマ別の取組状況、推進ための課題点等＞

上記のような主な取組のほか､地域で実施されている多様な取組について､「①幼少期における取組、家庭・保護者を巻き込んだ取組」「②学校における取組、学校図書館・授業での取組」「③学校と公共図書館・民間団体等との連携」「④青年期における取組、（再び）興味を持ってもらうための取組」「⑤地域内での連携、学校種間の連携」の内容・テーマ別に情報を把握した。

以下では、あらためて把握された取組事例の概要を整理するとともに、それぞれの取組事例から把握された、今後の取組推進にあたり課題となりうることを整理した。今後同様の取組を他の地域で推進していく際等には、これらの事例から把握された情報が参考になるのではないかと考えられる。

【幼少期における取組、家庭・保護者を巻き込んだ取組】

「①幼少期における取組、家庭・保護者を巻き込んだ取組」に関しては、保護者自身に子供の読書に関する取組に関わってもらうことで家庭での読書推進等を図っていこうとする動きがあることがうかがえ、高知県では、公共図書館等へのアクセスが難しい中山間地域等での読書活動を推進していくことを目的に、読書ボランティア養成講座が実施されている。また、潟上市では、「ブックスタート」のフォローアップ事業として、小学校に入学する者を対象とした「わくわくブック」の事業が実施されている。

読書ボランティア養成に関しては、今後いかにして取組への参加者・賛同者を増やしていくかが課題になるということがうかがえた。PTA との連携・協力により実施されている他の取組についても共通した課題が挙げられている。また､「わくわくブック」の事業は、子供たちに「喜ばれる」ものであるが、どのように図書館活用につなげていくかという点が課題として挙げられている。

【学校における取組、学校図書館・授業での取組】

「②学校における取組、学校図書館・授業での取組」に関しては、必ずしも学校外の機関・団体等との連携・協力により実施されているわけではないが、例えば潟上市立天王小学校で実施されている「ブックメニュー」では、「学校サポーター」と「学校栄養士」を中心に、教員間の連携・協力により、取組が実施されている。豊後大野市立朝地小・中学校の事例についても、学校司書をはじめ、各教員が読書推進に関する関係組織に所属し、取組が推進されている状況にあることがうかがえた。

このほかに詳細調査にて情報を得た事例に関しては、図書委員などの児童・生徒が主体的に活動することにより、全学年・全生徒を対象に読書活動の取組を実施している事例も見られ、これら教職員と児童・生徒間の関係性のあり方も重要になることがうかがえた。

【学校と公共図書館・民間団体等との連携】

「③学校と公共図書館・民間団体等との連携」に関しては、主に公共図書館・書店との連携事例が見られたが、団体貸出等による連携・協力だけではなく、専門人材を学校に派遣することによる読書活動推進事例について情報が得られた。

大分県で進められているアドバイザーの派遣事業では、その成果として、学校図書館の利活用の状況が改善されたとされているが、受け入れ側の学校に学校司書が専任で配置されている学校でないと取組が難しいことなど、人材等確保・配置の点が課題になることがうかがえた。清須市立図書館で実施された中学生向けのビブリオバトル実施支援の事例に関しても、取組には一定の成果があると認識されているものの、担当教諭の異動により継続的な取組が難しくなっているなど、組織間をつなぐ役割を担う人材を育成すること、あるいはノウハウを伝授していくこと等が課題となっていることがうかがえた。

【青年期における取組、（再び）興味を持ってもらうための取組】

「④青年期における取組、（再び）興味を持ってもらうための取組」に関しては、主に高校生の不読率の高さを課題認識とした取組について、例えば愛知県立緑丘商業高等学校では、読書習慣がない高校生にも読書に目を向けてもらうため、展示や蔵書選定等に関する工夫がなされている。大分県佐伯豊南高等学校での「よむよむ５」の事例についても、高校生がより本を読むようになるための取組であり、「読書マラソン」のような取組を、高校生段階でも実施することで一定の成果が見られているとされている。なお、これらの取組については、学校独自の取組であるがゆえに、取組にかかる費用等をどのようにまかなうかという点が課題になりうることがうかがえた。

このほか、愛知県・愛知県図書館では、自治体の取組として、高校生向け、「ヤングアダルト」向けの施策を展開しているが、これらの取組事例からは、それぞれ単独の取組のみならず、各関係機関との情報共有等を図っていくことも重要であることがうかがえた。

【地域内での連携、学校種間の連携】

「⑤地域内での連携、学校種間の連携」に関しては、各地で関係機関・団体間の連携・協力の推進を意識した研究・会議の開催等がなされているが、特に芸西村の事例では、図書館と幼稚園・保育所、小学校・中学校と情報交換・共有の場を定期的に持つことのほか、具体的な取組として、図書館ガイダンスが実施されており、保護者も巻き込みながら、地域内での連携が推進されている状況にあることがうかがえた。

これら地域内で多様な組織・団体等が関わりを持つ連携体制推進のためには、連携・協力を推進していく中心的な役割を果たす機関が必要であるとの課題認識が示されている。

（３）地域における読書活動推進のための体制整備に関する考察

本調査研究では、子供の読書の実態や不読の背景・理由等を把握し、また、各地域で実施されている子供のたちの読書推進に関する取組の状況について情報の整理を行った。

各種の調査の結果から、家庭、学校、自治体・図書館等、それぞれの立場から、子供たちの読書活動の現状について課題認識が持たれており、また、様々な取組が推進されている状況にあることを把握することができた。

他方、現状における課題として、家庭における取組状況については各家庭の事情等により差があると考えられ、調査結果として、保護者の読書習慣や家庭の蔵書数の多寡等についても状況の差があることが把握された。学校・学校図書館（図書室）に関しても、特に高等学校段階においては、必ずしも読書に関する取組が積極的になされている学校ばかりではないのではないかと考えられ、調査結果から、学校図書館（図書室）の整備・活用状況について、小学校、中学校、高等学校と学校段階が上がるにつれて、子供たちからの肯定的な認識の度合いは低くなっていることが把握されている。このほか、地域の公共図書館や書店等についても、子供たちが本に触れ、読むための場所として非常に重要な位置づけにあると考えられるが、必ずしも「子供だけでいける距離」に図書館や書店等がある状況ばかりではなく、限られた地域のリソースをいかに有効に活用できるようにしていくかという点は一つの課題になっていると考えられる。

ただ、現状としてこのような課題がある中で、学校・学校図書館（図書室）は全ての子供たちに対して共通の機会を提供する場になりうるものである。高校生に関しては不読率が高い現状はあるが、調査結果として、学校における取組をより推進していると考えられる学校群では生徒の不読率が低い傾向が見られ、学校において読書に関する取組を推進することは不読の解消等に関して、一定の影響を及ぼしているものと考えられ、今後も一層の取組の推進が重要になる。

学校における取組をはじめ、地域における取組を効果的に推進するためには、学校内の教職員のほか、公共図書館職員、保護者、あるいは子供自身が、連携・協力しながら取組を実施していくことが重要であるということが、ヒアリング調査から、あらためて把握することができた。また、それぞれについて、継続性のある取組としていくためには、人的資源を継続的に担保できるようにすることや、ノウハウの伝達の仕方等について検討を行っていくこと等が課題となりうるということをうかがい知ることができた。

本調査研究で取り上げた取組の中には、他の地域・学校での取組を参考にしてはじめられた事例もいくつか見られた。また、読書推進に関する計画が策定されたり、協議会等の組織が組成されたりしたことにより、取組が推進されたという事例もある。本調査研究では、できるだけ多様な取組事例を取り上げるようにし、また、取組の概要とあわせて、取組の経緯や成果、課題点等についても紹介した。これらの情報が、今後全国の各地域において子供たちの読書活動推進を図っていくにあたり一助となればと考える。